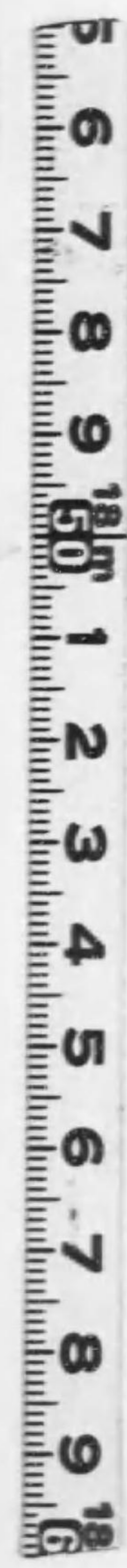


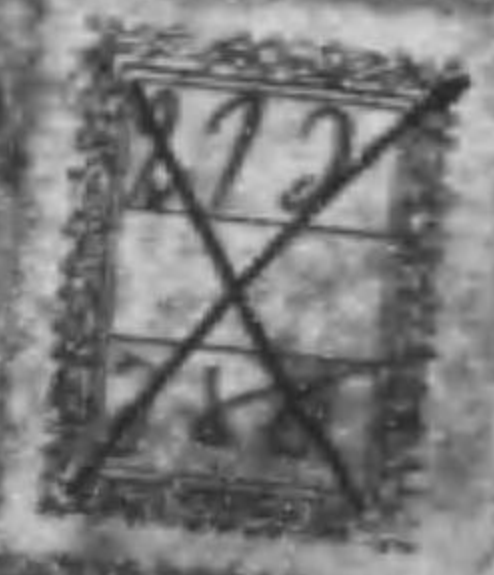
耶 鄣 諸 國 物 語 一

特 116

546



始



柳亭種彦作
歌川國貞画

家庭繪本
文庫

邯鄲諸國物語

國書刊行會版



國貞畫



國貞畫

大正
6.8.18
内交

訂校 邯鄲諸國物語

解題

此作者柳亭種彦は、幕府旗下の士にして、通稱を高屋彦四郎といふ、幼少の時府辯強く、屢々激怒する事ありしかば、父甚深く之を憂ひ、「風に天窓はられて眠る柳かな」といへる訓誡の句を作りて與へければ、種彦も其後は心に銘じて、身を慎みたりといふ。天明風の狂歌を好み、狂名を柳の風成と呼びしが、後改めて心の種彦といへり、これ大和歌は人の心を種として、といへる詞に因れりぞ。柳亭種彦の號は、右の狂名と俗名の彦四郎の彦とを取りしものなり。又愛雀軒、足薪翁等の別號あり。文化の初年より戯作に従事し、著作の神史・草双紙頗る多し。然れども神史にては馬琴の盛名に抗し難きを覺り、中頃より専ら草双紙を作り、年々三四種、多き時は七八種にも及びぬ。挿繪は歌川派の名人五波亭國貞の畫く所多し。國貞は作者の考案に迎合して、能く嶄新の意匠を表現せしかば其作流行

して、草双紙作者の巨擘と稱せられ種彦の名四方に宣傳せり。中にも正本製芝居がかりに仕ゑる田舎源氏・邯鄲諸國物語等は最も愛讀せられたるものにて、實に種彦の三大作と稱すべきものなり。

「邯鄲諸國物語」は、天保五年近江の巻、出羽の巻の八冊を公にし、同六年より九年の間に大和の巻十冊を、又同十一年、十二年に播磨の巻十二冊を上梓したり。此作は其序文にも見えたる如く、「西鶴諸國咄」其碩諸國物語」に因みて、立案したる作なれば、一名を「種彦諸國物語」とも呼べり。近江・出羽・大和・播磨等の國々に因みある古き物語を、種彦一流の面白き趣向に綴りなしたるものにして、毎編異なる世界を描寫したれども編中に現る人物には、おのづから脈絡ありて、前後の聯鎖をなしたり。此作は田舎源氏と共に晩年の作なれば、種彦が最も圓熟の筆致を見るべく、作者の技倆は此兩編に盡きたりといふも過言にあらず。然るに天保十三年、水野越前守の改革ありて、一般風紀の取締り嚴酷を極めたりしが、種彦も其側杖を喰ふに至

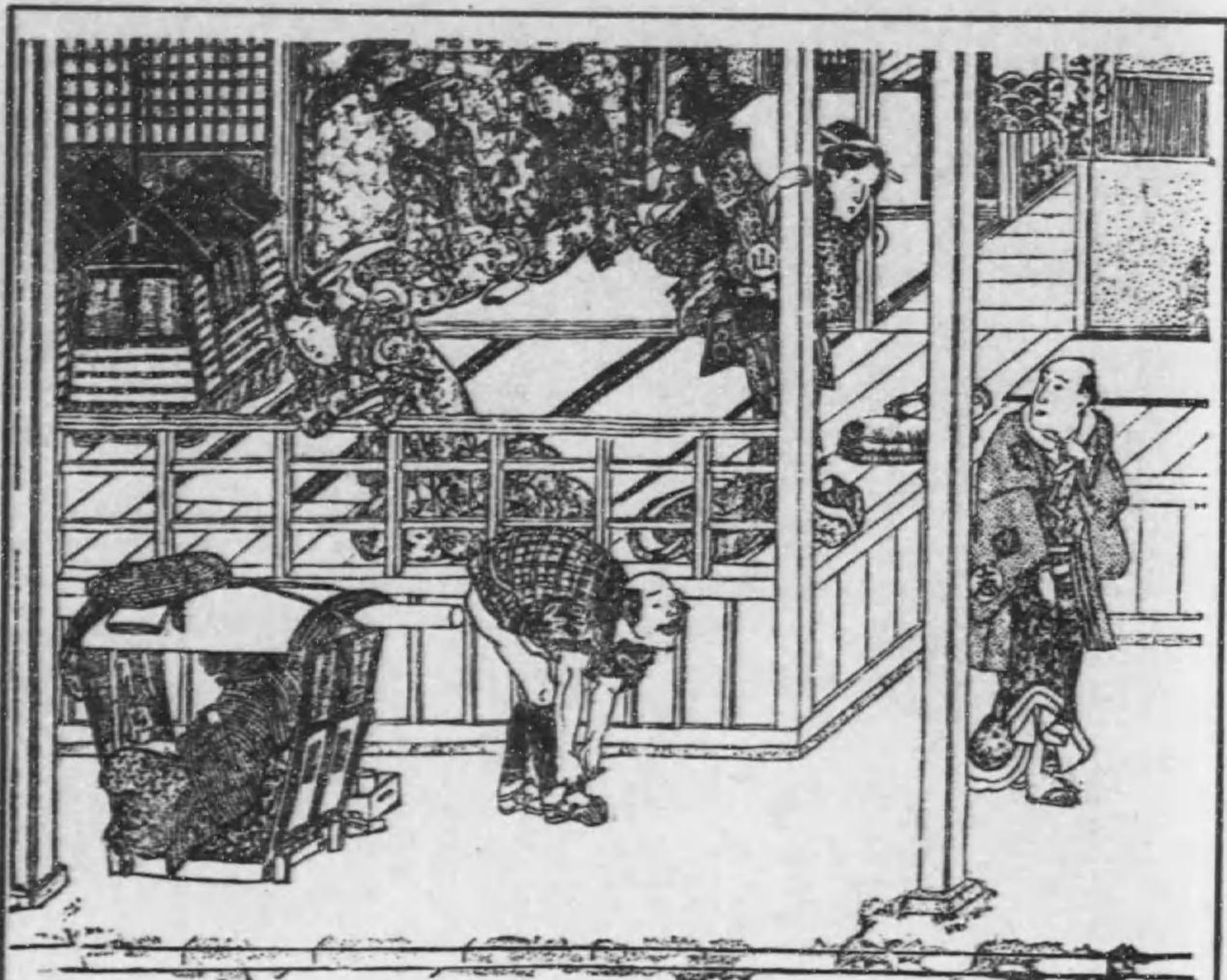


天保五年
近江の巻



近江の國
鏡の宿
旅舎の娘阿加奈

近江の國
鏡の宿
薬王次郎
鬼門



訂校 邯鄲諸國物語 近江の巻前帙

柳亭種彦作
歌川國貞畫

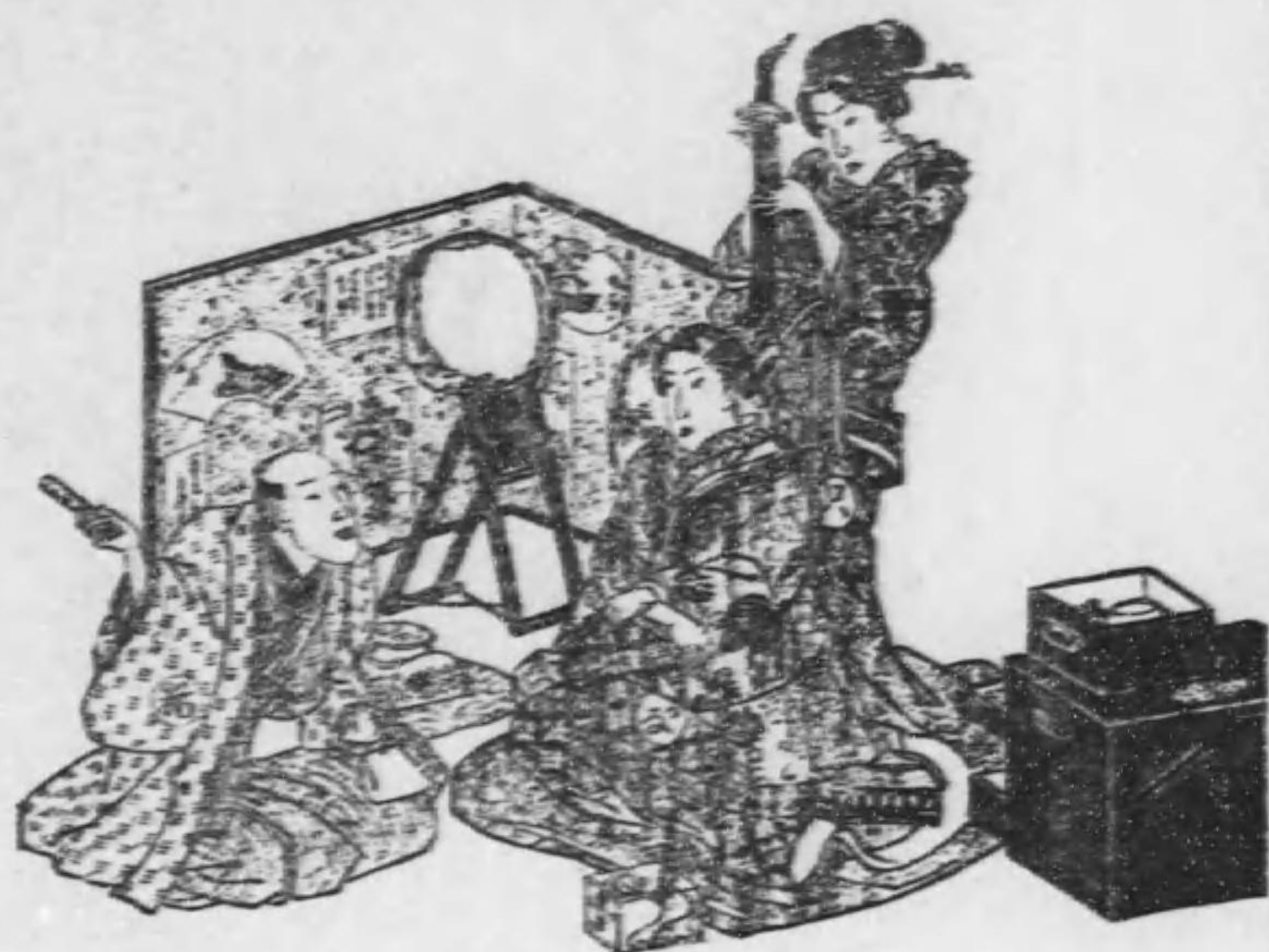
鏡山いざ立寄て見てゆかんあふみのや鏡の山を立た
ればなど古き歌に數多見えたる鏡山は近江の國蒲生郡
なり麓の道をも鏡といへり今は守山武佐のうまやいと
賑しくて其間に挟れたる鏡は面影計りなれども昔は此
宿街道一の繁華にて既に牛若丸強盗を討ちたるも此の
宿りにてありしこと判官物語に見えたり借も文龜永
正の頃かごよ此鏡の宿に小小波屋志賀右衛門と云ふ旅
籠屋あり年の程は四十許其妻をお山といひ三十路の上
を五六ツはや越ながら色香失せず奏める花と云ふにも
あらず唯一人の娘を持てり今年既に十七歳雪の肌柳の
腰彼が面に競ては櫻の花も花ならず然れば夫婦の寵愛



青の
子
武
五
信

近江の國
鏡の宿
旅舎の娘阿加奈

近江の國
鏡の宿
薬王次郎
鬼門



は手の内の玉の如く未だ定まる類がねもあらざれば遠近の若人等縁を求め傳手を尋ね文を送るも多かる可し彼の志賀右衛門は先祖より田島多く持傳へいこく豊の暮にておじやれとか呼ぶ人留女の眉目善きを數多抱へ家も廣く住ななければ往來の旅人も其の名を尋ね必らずこゝに宿泊を求め急繁昌したりけり又此家に粘助とて年まだ若き手代あり彼は漸く去年の春召抱へし者ながら生だち實明にて聊も主人の物を掠めず朝夕氣輕に立廻り客の機嫌を善く取りつゝ兎に角家に得分の付く様に計らひければ志賀右衛門は善き者を抱へたりと喜びつゝ萬事を彼に打委せ心長閑に暮しゝがさいつ頃より娘のお加奈心地悪しとて一室に籠り物見遊山と連れども氣六ケしくて出もやらす打臥てのみあるにもあらねど更に心の浮立ぬを見るのみ夫婦は胸苦くおじやれ女の其中にお只と云ひて最さかしく娘阿加奈の氣に入りて年も同じ程なるを遊相手に付け置きつ薬よ針よと

ともて騒ぎ志賀右衛門は守山なる帆柱の觀世音へ七日詣をなしけるが其利益にや娘の病氣少し怠る様なるを志賀右衛門深く喜び七日の日數は果たれども今日も御寺へ詣んと忙げに立出ければ早く歸らせ給とて女房お山は外門迄送り立歸りて娘の部屋へ入らんとせしが何日になき笑聲して何やらんお只が如の物語母が様子を尋なば却て娘の氣詰と心を察して拔足に常の居間へぞ歸ける既に先にも記し如くお只は利發の生故お加奈が機嫌を窺ひて其様に御髪も亂れお中納が仲て居るとお氣分が一倍悪い御熱はさつぱり無い程に御湯を召しても大事ないと御醫者様も御仰りますさア〜梳て上ませうと浮世話に紛され癖が付て結い悪くからうそれならざつと結んでなりと此まアふけの出來た事は額も襟も生手だらけ久振で鏡を見たら私の顔ではない様などにつこり笑ふをよい機會とお只は聲を打ち潜め「貴女の此度のお病氣の元を知つたは私計り其の様に明ても暮

てもくよ〜御思召ましてはとんと治う様はない旦那様は帆柱の觀音様へ御詣りなされ御神さまは餘念もなく本を讀で御居でなさる丁度善い首尾粘助殿を此へ呼んで委細を打明け相談なされて御らうじませと進められて顔打赤め「なんばあれが才覺でも此事ばかりは私のままにいへ〜左様おつ仰りますな該に云ふ膝ども談合殊には萬事如才のないあの人が呑み込だらどうか仕様もござりませうと云ひつゝ廊下を差覗き辛ひ帳場に欠伸してもし粘助さん〜おかなさん御用がある一寸と此處へと打招けばはいと答へて摺足なし「次郎冠者を召させられしは都の歌舞伎物語は東の流行唄左様の儀にこそ候はめと鹿爪らしく座になほれば「あのまあ眞面目な顔わいなさア彼の事をおかな様さうおつ仰つて御覽じませと進められてももじ〜と言出し愛るをもどかしがりお只がすつとさし寄て「左様なら私がかい摘んで話しませう粘助さんは知るか知らぬか八



幡の町に名高い竹花屋の若旦那七さんと云ふ御方近
年武佐へも店を出してそこへばかり来てござんす年の
程は二十一二色白で凜とした目元で一才見られるとど
んな女子も消て行く女郎に敵役娘に禁物毒程が口當り
の好い物かして其のお人とおかな様が去年の秋八幡祭
禮の夜宮の棧敷屏風仕切も驚陶しいと取てしまうてさ
へつおさへつ四方の人は酔ひ倒れころ／＼轉げた其後
は如何なつたのか手水に行て私も知らぬがそれから度
度花見や雪見御寺詣りなんのかのとて女子衆や男衆が
取り持て逢せましても旦那様は未だ子供の氣で御座ん
す故お心は附かねどもおかみさまがあれが素振合點が
行かぬと目を點けて仲立をした女供は其れとなしに暇
を遣り其からおかな様が何處へお出でなさるにも己れ
も行かうと御自分も保養の積りで何時でも番人お静ま
る其時も御夫婦の中へ挟み油斷が無いで遇ふ瀬も絶え
其れからのお煩ひ其りや善い事ではなけれども互に妻

なし夫なし不義とやらでも御座んすまい如何かして上
ましたら御病氣もつい治うと聞て粘助打ち笑ひ「其れ
は何より容易い事鯉七様といふ御方は近付ではなけれ
ども竹花屋は誰知らぬ者もない大身代お年頃もお似合
ひなり姫君に貰ひ受け頼に寄する小々波や其白髪まで
變らぬ御夫婦何故其事を打ち明けてと言はれておかな
は打奏れ「鯉七様も御一人子兄弟とてもなし忍び逢う
た其時に其方の親さへ得心したら表向から言ひ入れて
明日にでも結納を送らうと言うてなれど私も外へは行
かれぬ身の上「ホイこいつはちつと六ヶ敷い、して且
那樣やおかみ様は鯉七様を御存じて「いへ／＼ほんの
おかみ様が怪い素風と推量計り鯉七様を知て居るのは
彼の祭の時御供をした私計りで御座んすとお只が答に
粘助はにつこり笑て小隙を打ちそんなら今夕久し振で
鯉七様にお逢ひなされ談合なされて御覽じませ又善い
事も御座りませう貴女の御髪を御只殿とちつとも違ぬ

様に結せ日が暮たらばかう／＼と二人の耳へ口を寄せ
何やらしばし私語けばおかなは嘆驚興さめ顔「お目に
掛るは嬉しいけれど如何してまアそんな事が「はてさ
其角が發句にもたけ狩りやはなの先なる歌がるた手前
のまつげは目に見えぬと毛唐人も申すこやら近くはけ
つく氣が附かぬ斯く申す粘助もかゝる筋には昔より事
馴れて候へばちつとも擗りは致しませぬ我身の懺悔物
語事長けれど聞こし召せ抑も拙者は野崎村久作の息子
にて久松と言しもの瓦屋橋の油屋へ奉公に出たところ
娘のお染とよと馴染め在所では許嫁のお光めが氣が違
ふ是では行かぬと心を定め高野山へ逃げ登り衆之助と
名を代へて小姓を勤めて居る内に神谷の宿のお梅とい
ふ娘が又も昇り詰め死でくれろに持てあぐみ其よりそ
こを随得寺も寺勤めもいやになり前髪を取たなら新
る難儀もあるまじと元服なして茂兵衛と名乗り京へ出
て大經師意春の處へ手代に住み是れでは樂ちやと思ひ



の外下女のお玉が彼是と言ふ計りかは内の女房おさんと又も浮名が立ちやうく其處を立退き此方に隠れて居りまするとにつこりともせず眞面目顔お只はつくづく打守り「祭文や淨瑠璃で噂を聞たは粘助さん御前の事でござんしたかも十年も過ぎたならどら石町の右衛門へおびやの店を出さしやんせ私がお絹と名を代へてお前の女房になつて上げやうしかし減多にお半さんと伊勢参宮にやりはせぬさア行なら行て見たがよいと胸倉取て突廻され「あゝさう上手が出来ては長右衛門閉口々々どうやらかうやらおかな様の御笑顔がやつと出た永いとはいりませぬ鯉七様へ一寸一筆委細の譯は私がとつくり御話申し升お湯も丁度沸きました汚ぬ内に召ましと忙し立ておかなの文取るより早く尻はせをり武佐迄是より一里半息を切て大星力彌是で吾主のだい三役どれ行て参りませうと武佐の宿へぞ馳行ける其日も既に暮にけり女房お山はお只を呼び「今日は



おかなが珍しう湯を使う様子ちやが又寒氣でもしはせぬかよう氣を付てと言ひければ「いへ〜お案じなされますな御髪も揃へて上りましたればとんと病は忘れたやうなど針箱出して人形の衣物を縫て何日ない御機嫌のよい御顔色と答ふに後に粘助が「お只さん〜私が引て来た客人共はたつた一人なれど大和廻を伊勢へ掛け一向急がぬ遊山旅空合も六ヶ敷さうな雨になつたら晴る迄まア茲に泊つて居よう蠶子を呼でとあつた故四人座敷へ出して置た一人夜伽が御座りませぬと夜中がお寒う御座りませうと進めて見ても客人が年若だけに力身があつて臥るには一人が樂でよいと何だか味が煮へきらす外の者では治らぬお前どうぞ出てくんない餘程生氣な男だせと背中叩けばつんとして「何に私よりまだ外にと言ふをお山がひつ取て其にはほんにお只が宜からう此頃おかなの看病で久しく客を取せぬ故おつこうでもあらうけれど粘助ともに私も頼み今お茶代

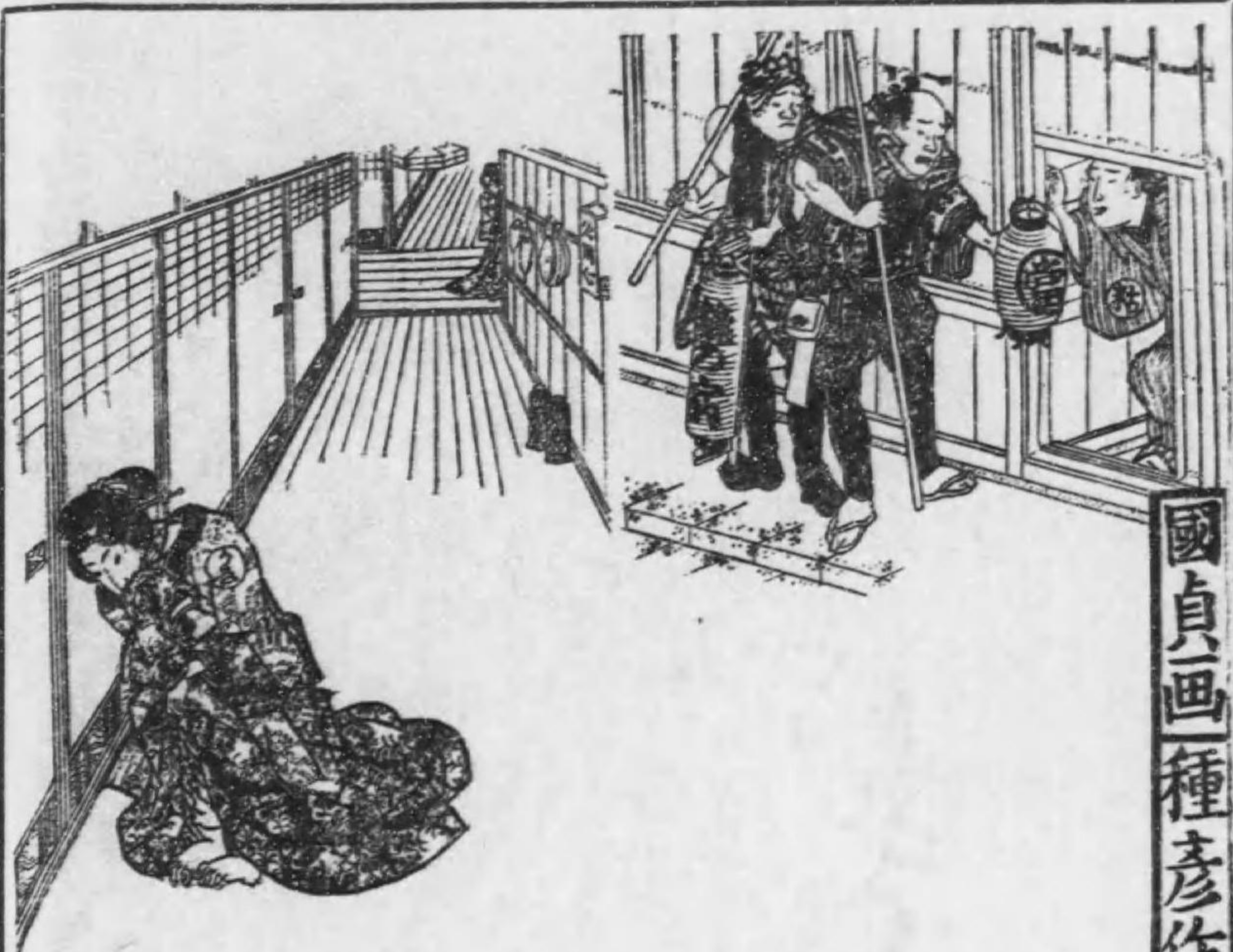


を頂いたお禮に菓子を持って行く其方も一所に出て給も
と進められてあたふたと衣物着代へて顔なほすお只を
打伴れ女房お山座敷に至り其客をつくく見るに粘助
が言ひしに違はず年はまだ二十の上を多くは越ねど立
振舞も利發げに最好き男にありければかゝる人をおか
なの婿に取りなば嬉しがるべきと惚れくとして思は
ずも其座敷を退かず銚子を更へ肴を添へて藝子と共に
寝しつ夜もはや四ツと覺しき頃今日の道の疲しとて客
の眠りを催しければ其に驚き床を取らせ善く氣を付け
よとお只にも懇ろに言ひ教へお山は常の部屋に歸りや
がて臥床に入りけり驛路の鈴の音絶えて降りかはり
たる村雨や軒端を廻る風の聲夜はしんく更け渡り
家内ひつそりと静まりぬおかなはそつと起出て右と左
に打眠る父と母との寢息を窺ひ枕に近き燈火をかき立
てながら燈心をそろくへらして薄暗がり人に知らさ
じ聞かさじと吾身を盗んで廊下を傳ひ彼の旅人の臥し

たりける屏風を合圖のつまはじき内にはお只が聞き取
りて其儘起出で小聲になりほんに菓子を預けられた私
は狗の心持ちやんと番して居りました是から積る物語
しつぱりおしげりなさりました互に寢巻の小袖を取代
へ「七ツを打つと私が又茲へ参りますもうちつとく
と未練をお出し成れますな寒くなつたと爪立足お只は
そろく廊下を戻りおかなが寐屋にそつと入り額ぎは
まで夜着をき被り様子をよく窺ふに志賀右衛門は
夫婦共前後も知らぬ様なれば己も其に心緩み其儘すや
く眠りけり彼方の部屋には夢心鯉七は忍聲「粘助と
か云ふ男其方の文を持ち來り旅人の姿にて今宵泊れか
うくして逢せて遣らうと言うた程に來て見たが大
此事が若知れたなら御前の身の上「はて知れたとて大
事ないすぐに其方を泊て置き親類中に婿披露めさうし
てしまへば私も安堵と後目でちろりと打見やれば「鯉
七も微笑を含み其地は安堵か知らぬどもおれもまだ内

には両親我儘にはどうもならぬヲ、痛い「細指ぢやが
色々男をつめつて上手なせいか餘程股にこたへたと
聞ておかなは腹立聲「私が何處の男をつめつたさアそ
れ聞かう其聞かうと涙ほろりとはなの露こぼれかゝり
し前髪の胸へ冷と風になる戸にも驚く忍音に男は四方
へ氣を配り「あゝこれもつと静に言や直に泊て婿にす
ると其方もおじやらを言やつた故ついで己もよしない口
さいたが悪くば勘忍しや是手を付てあやまつたと言れ
ておかなは片頬に笑み「勿體ない女房に何のあやまる
事があらう私は寐床を抜てくるそれ迄は身もわなく
斯うなつては落付た見付けられたら御前の家へ伴れて
退てくださんせ「いや見付らすともさうした方が早く
方が附くだらうと互に年の若きどち何を言ふやら母も
なくつい八ツも打ち七ツも鳴り名残惜しさは山々なが
らお只が音信なきを案じ明日は茲に逗留し又更けてか
ら斯うくと約束堅めて起き別れおかなはそつと吾寢

國貞画種彦作



床へ立戻らんと身をひそめ障子の隙よりさし覗けばお
 只は餘念他愛もなく夜着より片手差し出し幽に響く
 びきの聲母のお山は目を覺し起き代りつゝ行燈の火に
 て煙草を吸ひ付けつ聞き耳立つる其の風情南無三寶と
 おかなが仰天猶も片邊に耳を寄せて息を吞んでぞ隠れ
 居るお山は其と氣も付かず志賀右衛門を揺り覺し何か
 近所がさわくともし人聲がする様なと言ふに枕を軟
 て志賀右衛門も聞き澄し成程合點の行かぬ物音まア粘
 助を起すがよいと言ふ内つき出す早鐘の聲に吃くり夜
 着はねのけ帯引き占めて志賀右衛門立出んとするかど
 の戸を外よりけはしく打ち叩き盗人が今大勢春林寺へ
 押込だ宿中が總掛りで縛れくれと大騒動皆出て下さ
 れくと呼はる聲に志賀右衛門「其れ脇差を取て呉れ
 粘助は用心棒おかなが夜着から半分出て又風を引きを
 るだらう引き掛けて遣るがよいとせはしい中にも夜の
 鶴間を照せる提燈の光りを知る邊にかけり行くお山も



門迄走り出で延び上りく「御前は指圖をさしやんし
 て傍へ寄てくださんすな若衆に委せたとて誰も指の指
 してはない粘助如才はあるまいが随分共に氣を付けて
 と呼はる聲も届かねば詮方投首立歸りほんに此の子は
 踏刺いでついぞない寢像の悪さ夜着引掛て遣りませう
 と言ひつゝ手を取り打ち守り此まア肥つた事はいなそ
 して手首をたいはくの絲で結んでこんな事人がらが悪
 いとて一度も爲やつた事はなし合點が行かぬと引きま
 くり顔さし覗て呆れはてお只くと呼び覺されびつく
 り飛起きうろく「はいおかみさん私手水に行
 つた歸りがけ途戸迷ひを致しました御客がさぞかし腹
 立てゝと逃げ出すを止むるお山機にくわたり倒るゝ障
 子「其處に居るのはおかなぢやないかはいでは分らぬ
 こへおぢや其方も大方矢張戸迷ひ外の事は聞くに及
 ばぬ何んで寢巻を取り代へて着てゐやるのかさアどう
 ぢやと問はれて消えも入りたき思ひ答へも何と涙ぐみ



はてしなれば跡につき様子を聞きし鯉七が胸を定め
てづつと出で「いや申しお家様もう斯うなれば仕方が
ないが何もかも打明けてぐわらご申しませう私は八幡
の町にしにせた晒布問屋竹花屋磯右衛門の一人の件
の鯉七ふとした事でおかな様と去年から忍び合ひ大事の
娘を悪い奴と嘸かしお腹も立ちませうが全く弄玩物
慰み物にする等と言ふ氣は更にござりませぬ初より女
房に持ち女房にならうと互の心中是も前世とやらから
して定まる縁と諦らめて御不足では御座りませうが
私にくださりませ榮耀榮華をさせますと言うてはき
りの無い事ながら時々の流行物彼の子の望み相應な不
自由はさせませす兩親は本家の住居私は武佐の店を
預て居りますれば氣のつまる事もなく鬼千正とか該
に言ふ小姑は一人もなし機嫌氣稜を取るにも及ばぬこ
このところを打明けて志賀右衛門殿へも執成してと聞
てお山は太息をつきほんに盡が知らせたやら宵に御目

に掛つた時あんなお方をおかなの婿にどうぞ取て遣り
たいと心に思うた程なれば添せたいのは山々なれど何
を言うても一人の娘物堅い志賀右衛門殿彼れをやつて
は血筋が絶えると急には得心なさるまいしたが縁と時
節とやら又折々を見てそろ／＼と言ひはぐしたらお心
のまゝになるまい者でもない娘も短氣を出しやんなよ
對の白むく合々傘淨瑠璃や繪草紙に尤な浮名を流さす
るありや皆親が堅過ぎてあたら番の花と花無常の風に
吹き散らされ後悔涙に暮たともうさうなつては詮な
い事子よりも親が因果ちやと世界の人の笑草ヲ、いや
な事／＼此頃のおかなの素振合點が行かぬと思つたが
人に知られた竹花屋の若旦那から起た病氣其で少しは
落付たもう／＼薬も祈禱も止めてお只を連れてぶら
／＼と遊びに出れば其れで本腹しかしあなた其の先
からついで何處かへおかなの影を隠してもなされるこ
成る相談も破れてしまふまア二三年森の内へ預けてお

置きなさる積りで切ない思ひも却て楽しみ誰しも覺の
ある事と言へば浮氣の様なれど今でこそあのやうに眞
面目な顔して居られるれど若い時は志賀右衛門殿も如才
のない利發な男私しは屋敷に奉公して居た其の時にと
言ひかけて、あれまアとんだ母様ちやと娘がちろ／＼
私の顔を見て笑ひます例へばつゞれを身に纏ひ肩と
裾とを結んでも思ふ男と連添ふが女と生れし本望なが
ら二ツ取りなら世帯の苦もなく好た男を持つのは仕合
ほんにおかなは働き者もし鯉七様餘所ほかから女房を
お持ちなさるゝと彼の子にはかけませぬ御婚禮の其の
晩に私が振り込んで存分を申します其の代りにはあの
お加奈に婿をわきから取りましたら切るなりと突なり
とお心任せになさりませ御兩親はまだ確お若い様に聞
きましたもう一人男子を拵へてくださりませと御催促
を遊してお後取りが出来ましたら其れこそは野宮高砂
諺うて直ぐにこちらへ婿入りかう打わつて申すからは

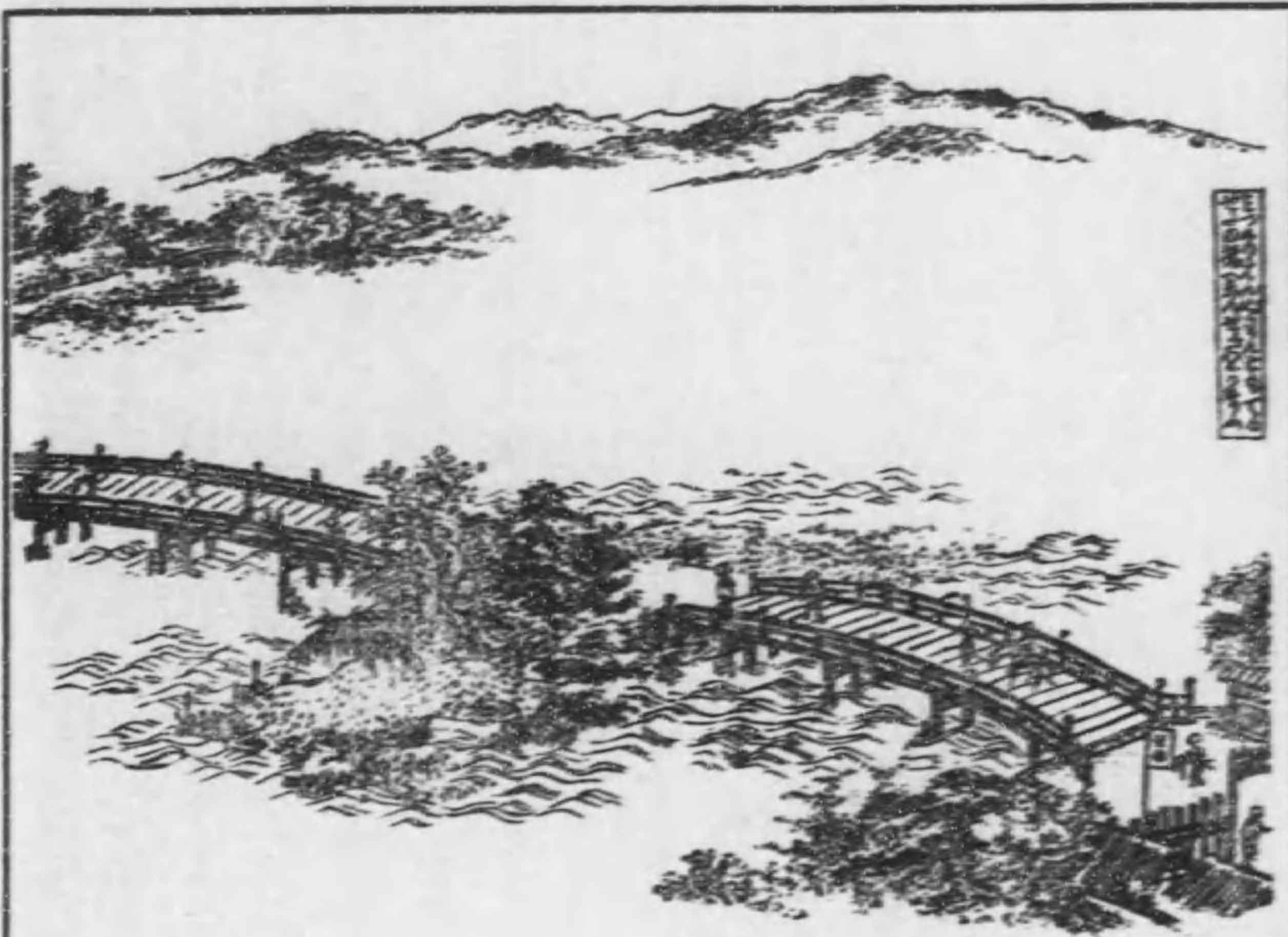
今無理に貫はふの情死せうの騒番のと御不量見は假初にも御出しなされて下さりますな是れからは宿の前は善い様に取りつくろい彼の子を遊びに出しませうはて盗人の取はあれど守りての取はない其の盗人で思ひ出した志賀右衛門が歸られて見付られては言譯の私も共に仕様がなない飯こしらへで勝手は起る人の目に掛らぬ内お只と寝巻を取り代へて知らぬ振でお加奈は寝屋に七様も奥の間へと事に馴れたる取り捌き鯉七初め二人の女何と言ふ可き言葉もなく各々臥戸に引き退く早や起き出づる泊り人水手上臈よと上を下こたつく中へ志賀右衛門粘助引き連れ立ち歸ればお山は次ぎ迄出迎へ「大分お手間が取れました若しや怪我でもした者が「いや」誰も先づ無難其の代りには願く計りて大勢掛つて盗人は一人も縛り居らぬ、しかし早くかけ付けたで春森寺は先づ仕合二三十人押し込んだが塵芥一本取る間もなく皆散りくく逃げ居つたと志賀右衛門が話の

内お只に送られ出来る鯉七様子知らねば粘助が「貴君今日は御逗留の「ヲ、積にしたが雨も晴れあんまりな好い日和故ぶら〜と出掛けよう」と草鞋はけばお山も側へ立寄りながら「夫れお只御笠を取て上げ申しな昨晚は取込んでお粗末を致しました大和をお廻り遊ばしたらお歸りは来月初めか必らずお待ち申升あれも待て居りませうとお只によそへて娘の事を打かすめつ、言ひければ鯉七は只點頭計りそこ〜にこそ出で行きけれ。此頃近江の國司は実作判官知輝殿とぞ申ける足利將軍義澄公の幕下に屬し時の管領音川政元の婿なりければ世の人此知輝を尊敬なす事大方ならずされども善く其の己を護み仁を以て人を馴付け徳を以て家を治め武に猛く文に詳しく詩歌管絃の道にさへ疎からざる良將なり去れば室町守護の爲め久しく都にありけるが何とやらん領國の騒しき由聞えければ西近江志賀の郡飯室より辻が下平尾のあたりへ押し廻しかきあげの城を



那那諸國物語 (近江の巻前巻)

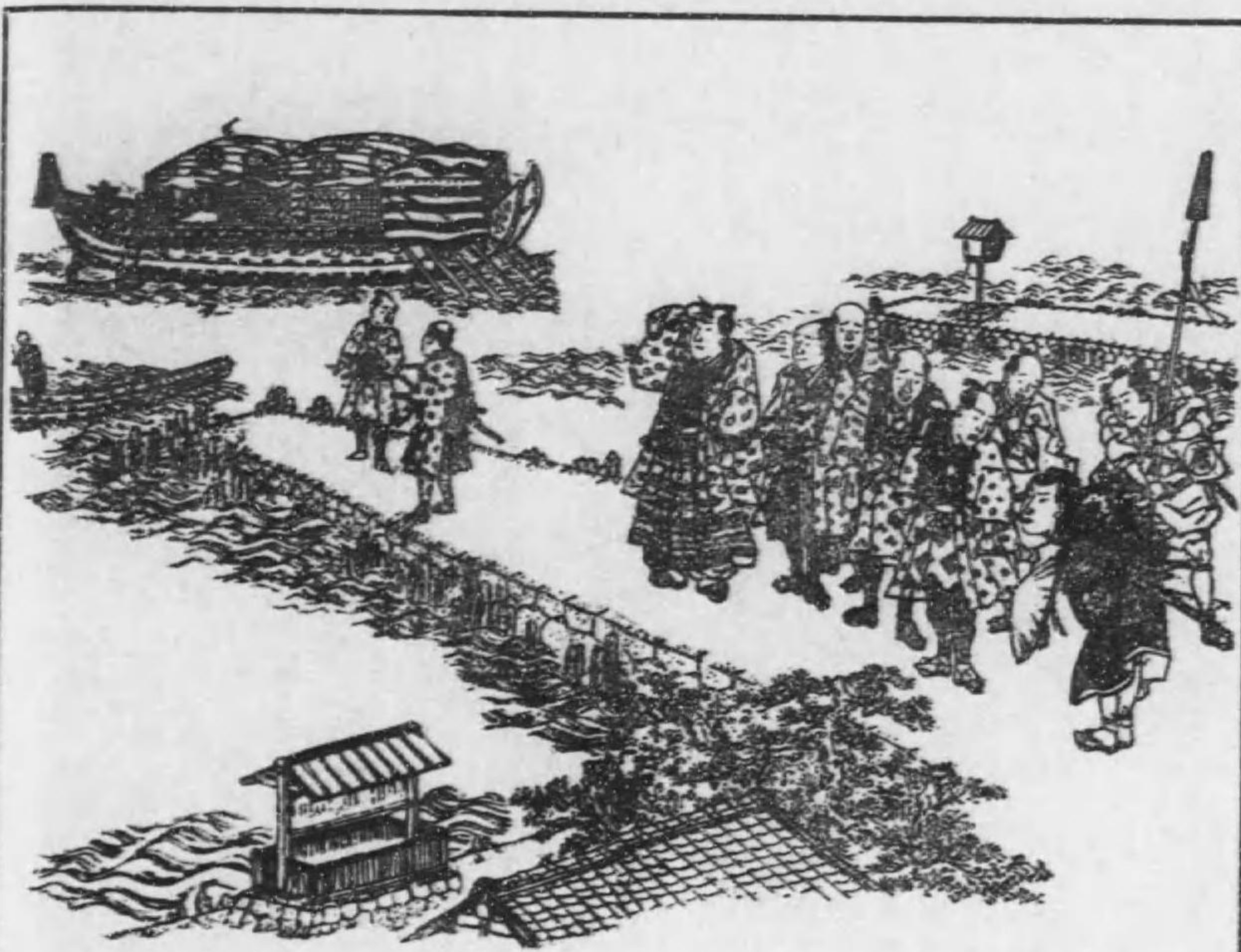
築き茲に居城をしたりけりさて或日判官知輝老臣青崎藏人景範と言ふ者を呼出し頼かに仰せありける様「今此國に樂王太郎重頼樂王次郎鬼門とて兄弟の賊首あり彼等は是より程近き楠の木原の醫者の子なるが幼き時より劍法を好み諸國を廻りて習ひうかめ其の上力量選しきが却て其の身の仇となり彼の頼光が四天王になぞらへて三星綱作、足柄雲八、碓氷の鏡三、未藏坂内など言ふあふれ者を手下に付け或は道にひ刺し或は人の家に込み入り財寶を掠め取り民の禍大方ならず吾軍兵を引き従へ國內を狩り求め彼等を討たんと思ふなり此の事如何ある可きと密々語りければ藏人景範何々と打笑ひ「人の國を押領し室町殿へ弓を引く反逆人にあらんには御尤も申さんが物數ならぬ盗人に君の御馬を向けられんはあら勿體無き事にぞある是等しきは御家の老臣に命せらるる迄もなく吾伴武者五郎景信に仰の趣言ひ聞かせなば喜びて直ぐに討手に向ふべしと



憚る色なく申しけり判官之れを聞し召し汝が彼に傳へんよりは吾直きに對面せん是へ呼べどありければこそは有難き事なりとて藏人直ぐに私宅へ歸りやがて五郎景信を引き連れて御前へ再び罷り出でけるとき近う近うと判官知輝武者五郎を近くまねき「まだ武の助とていと幼なき其の時違ひつるまゝなるがいと健かに生立ちしな抑々汝父にも告げず十六歳の時とやらん武者修業に出國なし十ヶ年が其の間遠近を經廻りて自ら武者五郎と名を改め去年歸國をなしたる處物堅き父藏人私に家出せし段々の不埒をどがめ勘當なさんと云ひたるを藏人が相役たる石倉尉右衛門久兼只管に之れを止め汝が兵法手練を試み用にも立つ可き者なりとて彼の家に止宿させてさて藏人を言ひなだめ此頃漸く父の元へ歸しやりしと石倉が竊かに語り聞せし故床しく思ひ居りしに幸ひ今日の事共は父より家にて聞きつるならんと仰せに猶ほも身を平れ伏し「尊命承知仕ると言

ひつゝ少し面を揚ぐるを藏人は睨み付け借ては石倉久兼が悴が不埒の事共を御耳に入れたるか、はや此上は包むに由なし仰せの如く十年前以前總合部屋住なればとて君へも願はず吾へも告げず出國なしたる不届者追出さんと存せしが石倉に支へられ實は某持てあくみ此度の討手の大役仕おほすとは存んせぬと彼の盜賊の手を借りて彼が命を絶つ時は石倉の恨もあるまじ、やよ悴今路々も言ひ聞かせし盜賊の首領兄弟手下四人を悉く討取て來りなば吾は其の座に刀を捨て武の道は一生言はじ仕おほせざる其時は對面も是限りぞと言葉を放て言ければ判官は打笑み給ひ「運命全く藏人が刀を全く捨てさせよと御佩刀を給はりければ武者五郎は更にも言はず父もはつと頭を下げ有難涙に暮にけり判官重ねて宜ふは「彼の盜賊に附従ふ手下も數多ありとやらん何程の兵士を添へて打立たせんごありければ父の言葉も待たずして武者五郎進みいで「某かねて國中の風聞

とくと承はるに熊野鬼門兄弟は並々の賊に非らず水昌山にあるかどすれば比良ヶ嶽に身を竊め或は沖津島を取り切り或は黒瀧の谷に隠れ出沒自在居る處さだかに其と知る事能はずされば勇を以て討んとせば味方の者にも過ちあらん知を以て搦めんには何條事の候へき先づ瀬田の橋に新關をかまへ夜は往來を固く止め晝とも油断なく一人々々に怪しげなる模様の有りやなしやを窺ひ松本阪本まの堅田渡し口へ觸れ流し船を禁する其の時は西と東と此近江は凡て二つに分る可し其上にては及ばずながら施す可き計策あり、まつた勇志の面々を數十人附け給ふとも若輩なる某がいかでが下知に従ふべき左ある時は助にならず却て是れより禍起らん只石倉尉右門久兼が悴尉の助久秋一人某に附け給ふ可し其餘は雜兵二百人吾下知を聊か背かず手腰の如く働く者を添へてに給はらば強賊悉く討平げ民の憂を除かん事方寸の内にあり彼の石倉に止宿の内



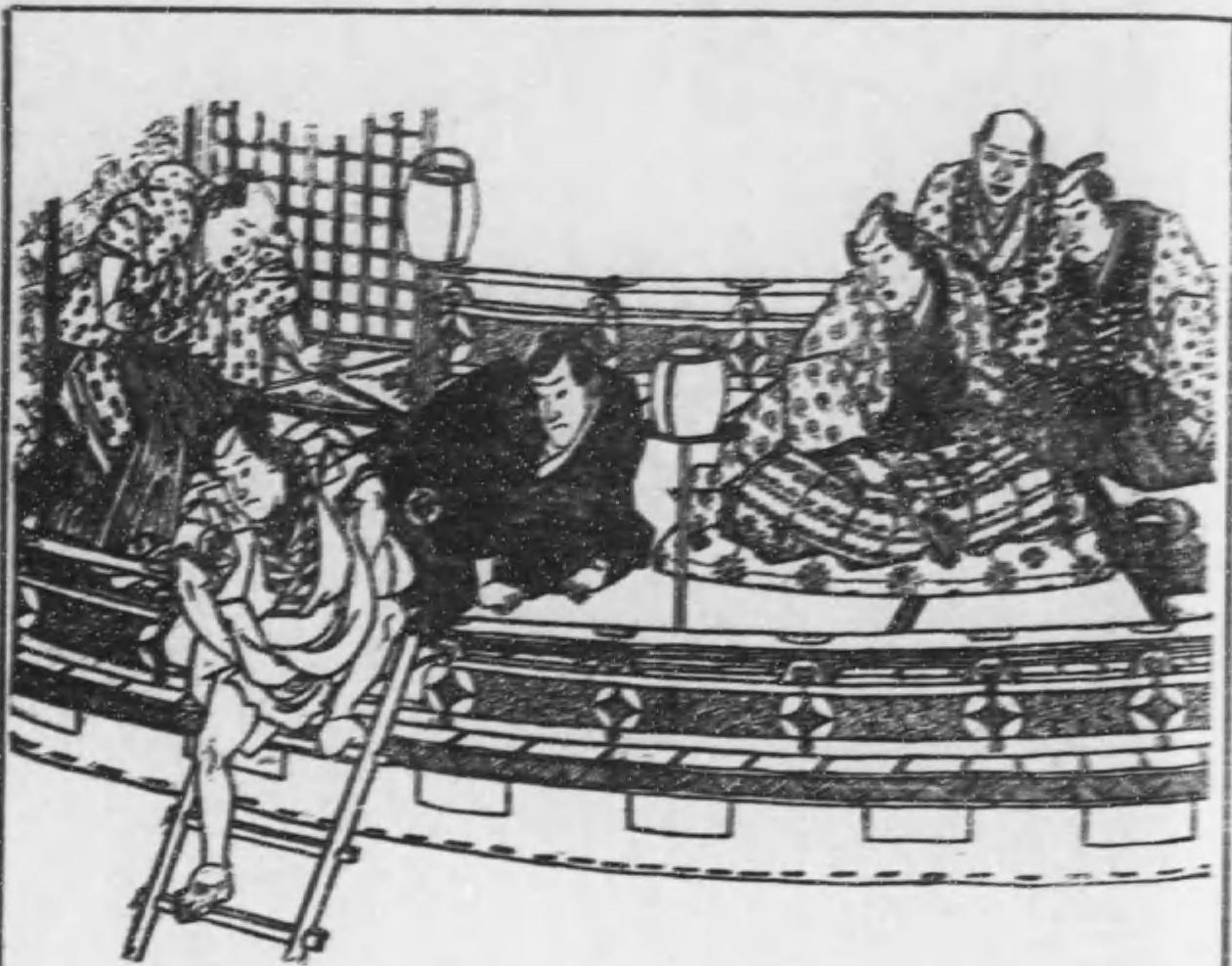
劍術取手の相手となり尉の助が手練の程は見極めて置き候と言葉すやく述べければ言ふ事道理に當れりて判官大きに感じられ尉の助を呼出し此の事漏さず言ひ聞せこれにもやがて一腰の差添を給はりければ冥加にかない候とて數多度おし戴き各お前を退きけり然れば判官知輝は此由室町殿へ訴へ手配り大方調ひければ武者五郎は先づ湖水を渡り東近江を尋ぬ可しと十人餘りたくましき武士を擇みて伴に從へ頃は如月十五日松本へ到りしときは日もはや暮て一輪の月は三上の山を離れおぼろくと霞ゆき王と絹以て包むが如くそよめく風に岸打つ波は黄金を碎くに似たりかもめは遠く沖に遊びからすは近く渚に浮かれ名にしほふたる鴉の海あら面白の景色やと暫く眺めて武者五郎たゝすむ折から一人の男後よりおづ／＼小腰をかゝめ用意の舟場へ行かんとする近衆の武士に打向ひ「拙れ事は草津の田舎中澤村の者なるが幼なき時より書を好み比叡山の

西塔に身寄の者の候ふ間是れに在りて詩文を學び只今にては堀川に小家を借りて妻を娶り寺小屋とかいふ手跡の指南大學論語の素讀なんど教へて幽かに世を渡る鳥川破門と申す者然るに兄と諸共に中澤にまかりある老母が今をも知れぬ大病急ぎ參れと此如く兄より知らせの文通を讀むと其儘取る物も取りあへず最前より瀬田の橋迄來りしところ此頃は盜賊はびこりて其れを追伐あらん爲め判官公の御近臣石倉久秋殿とやらん新關をかまへられ夜明けざる其の内は往來ならざる由を聞きほと／＼當惑仕る宿るにも旅用も乏しくよし其は兎も角も老母は早や七十餘歳何卒して存生の内に對面したきが願ひ承れば殿様には此宵是れより御船を出され矢走へ渡り給ふ由板子の下にも差し置かれ末期の水の間に合ひなば生々世々の御高恩と後言ひさして涙に暮れ言上願ひ候と彼の手紙を差出せば武者五郎も立止り様子を聞て居たりしが哀れの事やと近く寄り其の

人を熟々見るに色赤ばみたる黒小袖の最薄きを一ツ着なし柄は解れ箱ははげ今様ならざる無ぞりの大小心せきてか草鞋もはかす、みご草履は半ちぎれ布呂敷包を肩に結掛け年若かければ沐浴もせず身内垢付き鬢亂れいふせき様にてありければ切りに不憫の心起りくだんの手紙を讀み終り嘸かし心もせくならん苦しからず此方へと同船を許しければ破門は嬉さ面に表はれ只手を合せふし拜み是れこそ誠にによごとくせん例へば母が世を去るとも極樂往生うたがひなし先づ此の如く俱誓の船に乗せ給はん有難やと又も涙を流し、が漸々心を取り直し御船出に不吉の言葉恐れ入り候とて物語を外へ移し照らす曇らす春の夜の臘月にはしくものなしと詠みたるもげに、理なり彼の盜賊の事だになくば今宵こそ善き御遊山ならめ漕ぎ出づるに從ひて早や松本も遠くなりぬ船行きて岸を移すされども月を運ぶべき雲はなけれど薄霞又なき景色に候と打ちまぎらせば

武者五郎打ち點頭てにつこと打ち笑み「よし盜賊の事ありども今是に居るにもあらねば吾もだうふくよのかま各方向ても用心無用此宵は月見て遊ばんと酒肴をもたらしたり夫々どありければ寝ざめ酒重割籠なんど追々に持ち運び盃を廻らしつゝ猶ほも破門を近けて試みに和漢の事を問へば言葉の下に答へ物語に善き相手なれば是れに暫く時を移し酒酣となりけるとき近衆の武士言ひけるは御氣に入りの鹿藏が羨しげに御次ぎより差観て候なり彼にも一こん飲ます可きやと伺へば此方を見かへり「やよ鹿藏盃にてはまごろしからん天目持ちて此處へ出よ、それと注で取らす可しと武者五郎が言葉を開きさも嬉しげに件の鹿藏そろく」と這い出づるを彼の破門に差示し「此奴は己れが籠持にて體は肥てがたく面體もかしこげなれど世にも稀なる愚者されども心正直故目を掛けて取らするになか〜興なる事あり此頃雪の降りたる朝我は寢屋

にありたるが軒の雪を拂はんとてか此奴早く庭へ來り大層に降りたりと嘆くを吾聞きとがめ早や睡月も末になりぬ左程に深き雪にもあるまじ何程か降りたる隙子越に問ひたるときされば候厚はやう〜三五分には過ぎざれども横幅も縦の長さも限り知られず大層に積り候といと賢げに答へたり是れ鹿藏盃をそ〜ぐべき水を吸みて力の程を客人に見せ申せと言はれて鹿藏すつと立ちて桶を提げ階梯を下り彼の桶の半に足らず水を汲み上げ總身の力を入るゝと覺しくて兩手を掛けて顔に赤め髪のあたりに汗を流しやう〜に持ち出て「殿には吾に力なしと常に笑せ給へども是れ見給やなみ〜と言ふにはあらねど底の處にひた〜程と云ふにもあらずとしたり顔に盃を洗ふ器へ水を盛りさて其水を二口三口ぐつと飲で小首を傾げ「あら不思議やな斯許の海に鹽氣は更になし船の方は如何にぞと桶を提げて行かんとすれば破門はをかしく桶を引き「此所



那那諸國物語 (近江の巻前巻)

は聞えし近江の湖水既に鹽なき海とも言ふ鯨よるとか歌には詠めども例へば大な泉水にて何れより汲みたりとも皆な斯の如くの真水なり無益の事ぞと云ふを聞き鹿藏はたど横手を打ち「其にて思ひ當りたり何やらんさい前より魚のひら〜飛び上るを訝しく思ひしが、かの鯨にてある可きなりいで〜取りて御肴に參らす可しと言ふより早くすそいと高くまくり上げつるはぎあらわに湖水の中へ既に入らんごしたりしかば破門を初め人々もこは如何にぞと押し留むれば鹿藏から〜と打笑ひ「さる頃も御庭の御泉水へ先づ此の如く鶴匠にて立ち入りつ鯉を手取りにせし事あり此處も大きな泉水と言ふなれば何程の事あらんと止まる氣色の非ざれば武者五郎聲を掛け「それは破門ぬしが言ひつる例と言へるものにてあり水を泳げる事をも知らず捕へる事はさて措つ魚の餌じきになる可きなり、よし水練を得たりとも湖水の中に落入らば争でか命を全うせん



と叱りつけられ鹿藏はいと本意なげに投首し、ごもの
方へぞ退きける武者五郎打笑ひ「彼奴所謂空馬鹿なら
んと今迄は思ひしが池水と思ひ違へ湖水に命を捨んと
するは實に至愚と言ふ可けれ武士の家に養ふは心ある
可き事にこそと數多度嘆息し又も破門に打向ひ「某は
らつぶを好めり御身は諸藝に達せし様子何ぞ學び得ら
れしかと問はれて破門手をつかへ「先刻も申す通り子
供を集めて讀書の暇漸くとうぼく高砂の小謠を教ふる
のみ、らつぶの道は更に存せず只筆策を一二曲稽古な
したる事ありしが今は煙も立て兼ねる世帯にかまけて
手にも觸れずされども素より好きの道たしか包に入れ
置きしと笛を出して見せければ「さては樂を好まる、
か其こそ一興ならめ何ぞ一曲所望せんと言はれて辭す
る色もなく陵王を吹き立つるに風の林を渡るが如く波
の岩根を洗ふに似て玲瓏として澄み渡る音色に感情起
りけむ武者五郎は目を眠り面杖つきて餘念なし此時近



衆の武士の面々酒に亂れて禮義も忘れ彼方此方へ打ち
まろび用に立つ可き様にもあらねば破門は片頬に微笑
を含み「盜賊追伐あらんこと思ひ止り給ふ可し其の故
を如何と言ふに盜賊は殿を知るされども殿は其の賊の
目の前にあるを知らずとあざみ笑へば此の言葉あら
ぶかしと武者五郎きつと四方を見渡せば只村雲の起る
が如く何處よりかは數多の賊船矢を射る如く漕ぎ來た
り船を二十重と取り巻いたり破門後目に打見やり武者
五郎のたはけ者「汝が尋ぬる藥王太郎熊類とは我事な
り、さア搦めとれ首打てと刀おつ取り立ち上れば酒に
酔ひ臥し今迄は前後も知らぬ數多の武士心得たりとひ
つくと起き手早に袴ひつちぎり上衣を面々ぬぎ捨ば或
は腹巻或は又鎖褌袴に袴を掛け得物々々を引提げて押
ッ取り圍まれ道の熊類呆れてためらふ其の内に眞近く
寄せたる賊船より用意の熊手繩梯子船べりへ打ち掛け
く乗り移らんとなしければ熊類は聲を掛け「思ひの



外に此の船には手堅き備へのあんなるぞ近き寄らば味方の者に多く過ありもやせん一先づ引くと下知を傳へ近衆の武士が切込む刀をかいくぐり身を躍せて熊類は通ひの小舟へ飛び乗つたり逃がしは遣らじと立騒ぐを武者五郎制し止め一某思ふ仔細ありあながちに追ふ可からず遠矢を以て射て取れと言葉の下より合圖と覺しく耳を貫く一聲の太鼓の響と諸共に舟に仕掛し隠し矢間一度にばらりと聞きけり賊船之れに氣を吞まれ敵々に漕ぎ去るを合圖を待ちて船底に埋伏したる兵共つる音高く射出す矢は恰もいなごの飛ぶが如く薄の穂の散るに似たり熊類之れを事どもせず左に櫂柄を振り廻み右に白刃を打ち振て短く来る矢を切り搦ひ又打落しかい潜ぐる素より木葉を浮めし如き翻無し小船の事なれば此方に深ひ彼方に傾ぶき比良の嶺風しに吹きもどされ危き言はん方もなし、されども彼は水邊に人となりて舟の道はいと事馴れて居たりしかば波を破て



歌川國貞画 柳亭種彦作

遊への船をや出さんと、かはたれ時のまだ暗きに松明を燈しつれ渚へ出れば熊類も折能く此處へ歸り來つ吾が飛び乗りしは武者五郎がじやうせんの通ひ舟されば遠くへ行き通ふ舟とは製作異にしてほどく難儀をしつるなり方々怪我は非ざるかと問へば雲八さし出て彼の射拂ひし矢に當り薄手を負ひし者はあれど命を落しし者はなしと聞て熊類心を安じ小盗人を従へて隠家へこそ歸りけれ。

やう／＼と己れが此頃隠れ住む島の渚へ漕付けけり彼の熊類が手に從ふ足柄雲八確水の錠三末織玩内初とし其の外數多の小盗人熊類の指圖に従ひ築の音を合圖とし武者五郎の船を取り巻き打ち取らんと思ひの外計策の裏をかゝれ幸じて隠れ家へ歸りし頃は望の夜の月は山に入らんとして夜も早や明るるに程近かしされど彼の熊類の乗りたる船の見えざれば心元なき事に思ひ



訂校 邯鄲諸國物語 近江の巻後帙

柳亭種彦作
歌川國貞畫

藥王太郎熊頼は近頃迄は高島郡外羽ヶ嶽の山寨に多くの手下の指揮をなし朝妻鏡の遊君を身請なして側に居らしめ肉の林酒の池人の寶を我寶と榮華を極めてありけるが當時諸方の國司義澄公の命に反き上洛せざる者多く音川政元討手として和泉河内にせんこうあり義忠は周防に在て九州の武士を語らひ三好は京に亂入し音川佐々木心を合せ是を追伐なすなんど世の中穩かならざれば、かの藥王兄弟の賊の沙汰に及ばざりしが漸くに世は静謐して箕作判官家臣に命じ討手の向ふ由を聞き熊頼は大きに驚ぎ外羽ヶ嶽は箕作の館へ陸地の續にて便宜の地に非ざれば沖津島に人も住まざる古寺の



ありける故假に是に住居を移し計を施して武者五郎景信を討て捨んと思ひの外、散々にいたてられ幸に手負されども波を舟に打ち込れ、しとぬれたる衣服を着替へ一息ほつとつく處へ足柄雲八碓氷の錠三一人の男を引立て来り「頭の乗りて戻り給ひし舟の内に此奴めがはい隠れて居たりし故敵の間者どひつ捕へ詮議なさんと思ひしに吾は騒の其時に過つて舟に陥入り氣も心も消え失せて其れより更に前後も知らず命を助け給はれど打ち候て生體なし如何計らひ申さんと云へば熊頼彼の男の顔つくくくさし規き其奴めは武者五郎が鎧かたげの鹿藏とて取處なきたはけ者、吾も心の急くまゝに舟へ落ちしは知らざりし、命を絶んも無益の殺生さればとて放ち遣らば此隠家を敵の知らん其の儘に止め置ば用ふる時も亦ある可し、やよ鹿藏是より吾に従ひて鎌をきり壁を穿つ無かたげになる可なり夫へさがりて休息せよと言れて鹿藏恐しき夢の醒たる心



地しつ網の魚の又再び淵に躍る思ひにてあまたたび拜謝してやがて其の座を退きけり
 小々波屋の女房お山は約束堅めて經七を歸し、後に折を見合せ夫志賀右衛門に打向ひ娘お加奈の今度の病氣は元氣體より出でたるなれば只我儘に遊ばせなば自から全快せん年頃の盛りの花匂に引れて蝶の寄り、よしや浮名の立ばたて露なき風に散らさんよりは其れこそ遙にましならめと夫の氣質の物望を能く知るからに打かすめ、其れとはなしに聞えければ志賀右衛門も豫め其の意を悟りてしても留めず其處の關後處の神事とお只計りを伴に供れさせお加奈を遊山に出し、かは忽ちに本復し顔の色つや美しく、ありしよりは猶肉づきすこやかにこそなりにけれ然るに又母のお山久しく月のさはりを見ず三十路もとくに越たれば常の事にてある可きと心も留めず居たりしが何事やらん胸苦しく食も碌々進まざれば醫師を招きて見せけるに是れ血

塊と云ふものにて輕からぬ事なりと直ぐに藥を與へけるが其の効更になく日に病重りければお加奈が歎き大方ならず如何にかせんと思ふ時粘助が言ひけるは此頃より目をなやみ久しく我家に逗留する浪人めきたる旅人は形狗齋とて占を世渡りとなす者の由私に申す様お内方の煩ひを吾篋して判斷するに恐らくは懐妊なる可し其を塊物なりと思ひ碎かんとする藥の逆し却て惱み給ふならん己れ少しは醫書の端をも覗きたる事のあり、よし其職には非ずと言へど田舎醫者には優らんか先づ試みに容體を見せさせ給へと望まれぬ如何申し候はんと聞て人々打喜び直ぐに是れへと請じければ形狗齋は入り來り脈を窺ひ腹をさぐり懐胎にまぎれなし悼しいかな庸醫にまごひ命をも過ち給ふ可しと證を引き理をつめて説きさすと其の辯説恰も水の流るる如く年若けれど人柄も立ち上りて見なければ各々是に屈服し方を乞ひて藥店より藥を求めて服すること未

だ幾日も非ずしてお山は心地すくなくなりぬ志賀右衛門お加奈は更なり家内の喜び大方ならず形狗齋は目の惱みはや癒えたれば旅立たんと言ふを只管押し止め心を用ひて待遇しけり。借ても其後熊頼は武者五郎が武勇のみか智略の深きに恐れけん茲に潜みて國中を襲ひ騒がす事もせず弟次郎鬼門が便を待ちて數日を送り如月もいつか立ち彌生半の事となりけるが或る夜月最とよく晴れて秋にも優る景色なれば手下を集めて酒宴を催し妾に抱へし傾城に今様を唄はせて各典にぞ入りにける彼の鹿藏は湖水を泉水と思ひ違へ裳を掲げて鶏脛となりたるが、をかしきとて名を鶏脛と呼代へさせ呆けたる事を言はせ折節伽をなしけるが此の席に居らざれば彼は如何にと問ひけるとき末嶽玩内答へていふ「鶏脛は宵よりして心地悪とて夜着をかつき打ち臥して候と聞きて熊頼打ち笑ひ「此の夕暮迄常の如くをかしき事のみ言ひ居りたれば左迄の事の有りとも覺え



邯鄲諸國物語 (近江の巻後続)

す彼にも酒を飲ます可し此へ呼べと言ひければ態て玩内此の由を鶏脛に傳へけるにぞ恐るく下座へはひ出で「さいつ頃舟へ落ち入り矢響は耳を貫き頭よりは波をかつき今も命の消え行くかと、なんぼう悲く思ひしもかゝる月のよき夜半なり然る故に月を見れば其の事のみを思ひいで今も生きたる心地はなしあな恐しの月の影やと色は青ざめ身は慄きわつと計りになき出せば熊頼一しは典に入り「汝が至愚を見極めて武士の家に養ひ難しと武者五郎も既に言ひつさすれば彼處に在るときは早や此の程は屋敷を追はれ寄るべなき身となる可きを吾舟へ落ち入りしは却て其の身の幸なり憂を拂ふ玉箒一獻汲んで心を晴らせと只管に勧められ初めの程は盃を取る氣色だになかりしが言葉に是非なく數盃を傾ぶけ恐しかりし事も早や打忘れしと覺しくて次第に席を進み出で聲いさだみたる田舎節の小唄を歌ひ手を打叩き躍なんどなしければ人々は、つきしろひ打



ち笑ふを鹿藏はしたり貌にて熊瀬のほとり近く差し寄りつ「其夜にをかき音の出でたる笛を己れに貸し給へ吹きて聞かせ参らせんと言へば熊瀬手箱の内より取り出して手前に置き是は筆筈と言ふものにて習はねば音の入り難し先試に吹きて見よと言ふのも待たず鹿藏は手に取り上げて是れも亦陵王を吹き出すに其の調子能く調ひ心意を澄ます計りなれば熊瀬は心に驚き顔をじつと打ち守れば鹿藏片はに打ち笑みて手をつかねて討手の者に早く捕へられ給へ其の事を如何と言ふに討手はよく賊を知る賊は討手の大将の目の前にあるを知らずと言ひさま其れなる雲八が帯びたる刀取るより早く玩内が首打ち落しあはやと驚く錠三を只だ一刀に切りさげたり熊瀬はあきれはて開いたる口を塞ぎもやらず打守りて居たりしが四方に起る鬨の聲耳を貫く太鼓の音南無三寶と馳出す向へ鹿藏立ち廻り「箕作の近臣青崎藏人が一子吾こそ誠の武者五郎景信と言ふ者な

れさいつ頃船中にて武者五郎景信と假りに名乗りて汝を計りし石倉尉の助久秋が筆筈の響きを合圖にはや此島は取り巻きたり、しよせん逃れぬ網代の魚尋常に腕を廻し繩を待てよと言ふ内に石倉久秋手の物引き具し右左より込入りく或は討ち或は搦め凡て島にこもりし賊は一人も漏さず平げたり此の時に武者五郎生擒死屍の面を檢め「首領樂王太郎熊瀬足柄雲八は既に搦めつ礮水の錠三末藏玩内兩人は討ち留めたれども残り多きは熊瀬の弟樂王次郎鬼門手下の内に聞えたる三星の網作は何處に隠れ忍ぶにか某此處にあるうちに様子をこくと窺ひしが此島に嘗て居らす是等を討たん計策は後にてゆるく商議せん又是に居る女共は熊瀬が掠め取りし黄金持て受け出し、朝妻あたりの遊君にて更に罪なき者なれば夫々に歸し遣らんと尉の助と云ひ語らひ切り捨てたりし小盗人の首をあげて舟に積み繩付き引かして判官の館に直ぐに立ち歸り事の由を訴

へければ御喜び大方ならず熊瀬初め盗人の首をはねて牢獄の門に掛けてぞ囁されける形狗齋が言ひしに違はず小々波屋の女房お山は愈々懐妊の氣色著るく取り上げとか呼ぶ産の道に事馴たる老女を招き其の様子を窺はするに早や五月の程なればと好き日を選びて腹帯の祝と家内さゝめき渡り其の夜は彼の取り上げの老女をも留め置き今宵は幸ひ此に泊る旅人も左迄多からねば襖障子も取り放し家内の男女打ちこそり形狗齋を待遇すこて謀ひつ舞ひつする程に各々酒に酔ひ倒れ夜中も過ぐるど覺しき頃漸くひつそと静りぬ悉る折から小々波屋の門の戸激しく打ち叩き「宿はすれのうるふやにて産の氣の付きたる故取り上げの老女を迎へに住居迄行きたるが此に泊りて居らるゝ由はや／＼共に行き給へと呼ばれば粘助が寝耳に之を聞き付けておうと答へて門の戸を何心なく引き明れば雲突く計りの大男數十人込み入りてあはやと驚く粘助を高手小手にしばり上



げ猶ほ奥深く込み入れども晝よりの酒につかれ下男は皆前後も知らず其の外は言ひ甲斐なき女どもの事なれば、たま／＼之を知る者も夜着引きかついで念佛を唱へ支へ留むる者もなし此物音に眠りをさまし、こはそも如何にと驚くお山生體もなく泣き惑ふおかなを制して志賀右衛門胸を定めてすつこいで「汝等は元財寶を心に掛けて入つたるなる可し其だに渡さば言ひ分あるまじ罪なき者に過ちさすなど言へども件の盗人ども猶ほも心を許さずして志賀右衛門を押つ取り巻く折から彼の形狗齋静々と出で來り「皆退け／＼と言ひければはつと計りに強盜共さながら主人を敬ふ如く手を付き各々平伏す形狗齋は上座に直り「内方にも御息女にも早や恐しき事はなし先づゆる／＼と打つ寛ぎ吾云ふ事を聞き給へ己は元西近江柚木原の何某とて人に知られし醫者の俸豫て音にも聞かれしならん藥王次郎鬼門とて強盜の今は張本さればとて御身等に聊か及向ふ心に



非ず盗人にも猶ほ道あり吾遂に人を殺さず火を放ちし事もなし不義の金を貯ふる其家には限りに押入り有る限りを掠め取り行ひ正しくありながら貧しき物の有るときは施し與ふる時もあり御身の如く不義にも非らず自からに數多の金を積みたる家に入るときは其の半は取ると雖ども我故世帯を失はせ路頭に人を迷する不道の事は昔て好まず既に此家の財を目掛け目を備ひよし偽りて便宜を伺ひ此に止まり手下の者を引き入れしが色は思案の外とやらん耻しながら御息女のおかな殿の姿に迷ひ例へば今藏を開き黄金を積み置き置かるゝとも取り掠む可き心はなし此へ逗留なす内に吾兄太郎熊頼は早や箕作の討手の者に捕へられ給ひしと手下の者が竊かに注進途には吾も天の網掛らん事の恐しやと其時悪念發起して鬚を切り拂ひ姿を變へんと思ひしが噫断ち難きは輪廻の羈絆彼の面影が目にもちらつき寐てもさめても忘れず此の者共に言ひ付けてお加奈殿を盗

み行くは素より易き事ながら初めにも言ふ如く無道の事は更に好まず此のあたりを好く聞き分け己れを婿にしたまはずや面體知つたる者なければ誰かは賊と思ふ可き未だ千兩二千兩の黄金は塞に貯へ持てり不足は非らじと言ひければ志賀右衛門打首肯き「儲てはうはさに聞き及ぶ鬼門殿にてありけるか悪に強きは善にも強し其れこそ望む所なれ殊にはお山も其元の醫療を得て全快しつ娘の爲めにも恩人なり然しながら此の儘にて我家に留まり居給はゞ人の疑ふ事あらんと聞て鬼門につこと打笑み明日より七日を経て改めて婿入せん何を言ふにもあの如く荒くれしき男共大勢にて取り巻き居れば御内方や御息女は恐れ慄き我が言へる道理も善くは耳に入るまじ後にて悠々説きさとし首尾能く事を計らひ給へ若し又七日の其内に箕作へ由を訴へ捕へんとたくみなば此家のみか宿中へ火を放ちて焼き失ひ煙の内に何もを討捨て、某も潔く生害せん能く心を定

めてと手を以て胸を打ち叩き其れ〜と指圖して粘助初めいましめし者共に繩を解しめ數多の手下引き從がへ悠然として出で行きけりお山お只是更にも言はず降つて湧たる災難に志賀右衛門當惑し如何かせんと思ひまごひ一日二日過し、が或る夕暮にまだ若き商人らしき旅人の三人供を伴れたるが此の小々波屋に宿りを求め彼のお只を見て酒の相手になす由を望みければ久しくお加奈の相手として客に出し、事なれば外の女子にしたまへかしたお山が斷り言ふを聞きお只是障子の間より其客を透し見るに色白く目元涼しくいと好き男にありければ、ふと心に戀情起りお山に向いて言けるは「幼なき時より我が身をば娘の如く養ひ給ひ始めて客に出でたるは漸く去年の冬にてあり其の程もなくお加奈様のお煩ひのお伽をし遊山物見のお供計り勤めの道は疎かにて餘りと言へば冥加なし今宵は只管彼の客に我身を出し給はれと願へばお山も心を察し兎も角もと

て許しければお只是嬉かの人に偽りならざる心をあかし比翼の枕をかはしければ客もお只が打解けて物語らうが憎くからず我身の上をも大凡に其夜お只に言ひ知らせ足を痛めし體にもてなし逗留せんとしければ此頃既に形狗齋に家内の恐れし上なれば幾日も客を留めんは控に背く由を斷り立たせ遣らんとしけるをお只是主人の前に出で「彼の客は國司箕作家の出入の刀や外原屋倉藏様とて持たせ給ひしあの荷物は判官様の御家来より誂らへられたる刀の箱怪しき人には侍らす此に留めて置き給はゞお家の爲にもなるべしと事有りげに言ひけるにぞ志賀右衛門も之を聞き「彼の者國司の箕作家へ近しく出入る者ならば若し彼の次郎鬼門を防ぐ手段になりもやせんとお只が望みに打まかせ倉藏を留め置きけり待たざる日はいと猶は速に過ぎ行きて彼の次郎鬼門が約束固めし婿入りの日もはや今日とぞなりにける志賀右衛門は女房娘を人なき所に打

ち招き「御身等を誘なひて一先此を立退んと其の用意はしつれども出口々々に手下を廻し用心堅固の有様なりさればとて箕作へ此の事を訴へなば我家のみかは宿中の者の難儀となりもやせん畢竟先づ何氣なく彼を吾家の婿となし心を許させ折を見て訴へ出でんに如くべからず其れも不仁の事ながら是れより外にせん方なし情を知らざる計らひとお加奈は怨み思はんが多くの人の爲めを思ひ身を汚して呉れよかしと男泣きに泣きたればお加奈は憂ふる顔も見せず「茨を抱いて添ひ臥すも暫しが程にて侍べる可し左迄に歎き給ふなど言ひ慰めて其處を退き己れが部屋に閉籠り縦へ鬼神なればとて我身を捨てなば憐れと思ひ此家に仇はなすまじと彼の鯉七と人知れず忍び逢ひし事共を怨ろに書置きしつ庭の井筒に身を跳らせ飛び入らんと爲しけるとき折好くお只是縁側を通り掛りてあなやと驚き袖に縋りて止むるを「情に死なせて死なせてとお加奈は其れを振り



切りつ向も飛び入らんとなしければお只は愈々慌てまどひ手に當るを幸ひと雪見形の燈籠の笠を取て件の井戸の蓋に被ひ立ち隔たる其の間にお加奈はすりぬけて表の方へかけ出し東を望んで走りけり

鏡の宿を引き離れ茲に一つの小川あり水上は鏡山の麓より流れ出で二流合して湖水に入り末は二保川といふお加奈は茲にかけ來り念佛の聲諸共に身を沈めんとなしける時思ひ掛なきお只の客倉藏後より追ひ來り飛び掛て抱き留め「節義に迫つて捨身の覺悟お只に詳しく様子は聞けり我だにあれば其鬼門押て婿に來ることも事なく治むる手段あり心易く思ひ給へと言ひ宿る内粘助お只追々に馳せ來たり先はお加奈が無事を喜び共々に言ひ慰さめ漸々伴れて立戻れば志賀右衛門夫婦とも此事を聞き付けて狂氣の如く門口へ走り出づる出合頭お加奈の顔を見るよりも嬉しさ餘りて物をも言はず右左より取りすがりやがて居間へと誘ひ行く後より一人



の旅虚無僧會釋もなく打ち通り、己れは斯く姿を扮し武者修業を爲す者にて弱きを助け強きを挫き親しき疎きの差別なく人の難儀を救はん願ひ見受けし所此の家の御息女何故河へ身を沈め命を捨てんとし給ふかと言ふ其の言葉の頼もしければ主人の言葉を待たずして粘助が進み出で事の様を物語れば修業者か、と打笑ひ「其れこそ望む所なれ其の奸賊を引き入れて賜殺しにして呉れん吾御息女の衣服を着なし燈火を遠避けて寐屋へ屏風を引き廻し打ち潜みてある可き間其の鬼門が來りなば娘は此頃病氣なりと騙して其處へおこし給へ斯く家内打ちしめり憂の色を表しなば却て賊の疑ふ可し常の如くに旅人を留め然らぬ體にて居られよと聞て少しは力を得酒肴を持ち出で、彼の虚無僧を待遇なす時倉藏はお只と共にお加奈が又もや隙を窺ひ走り出づる事もやと付添ひてありけるが倉藏庭を指さして最前にお加奈殿の身を投げんとし給ひし其時に石燈籠の

笠をもてあの如く井戸を被ひて止たるお只の力の恐しさ我は手に持つ扇子を落し呆れて言葉も出でざりしが其の隙にお加奈殿の表の方へ出でられしに又驚きて後を追ひ漸くに止めたれど初め命を助けしはお只の力故なりと聞て人々げにも見遣り打驚けばお只は我手を打ち振りながら小首を傾け物をも言はず庭へ下り件の石の笠を取り彼方此方へ打ち振ふにさながら扇子を使ふが如しお只につこと打笑ひ「昔此の國に住みしお兼

國貞画種彦作

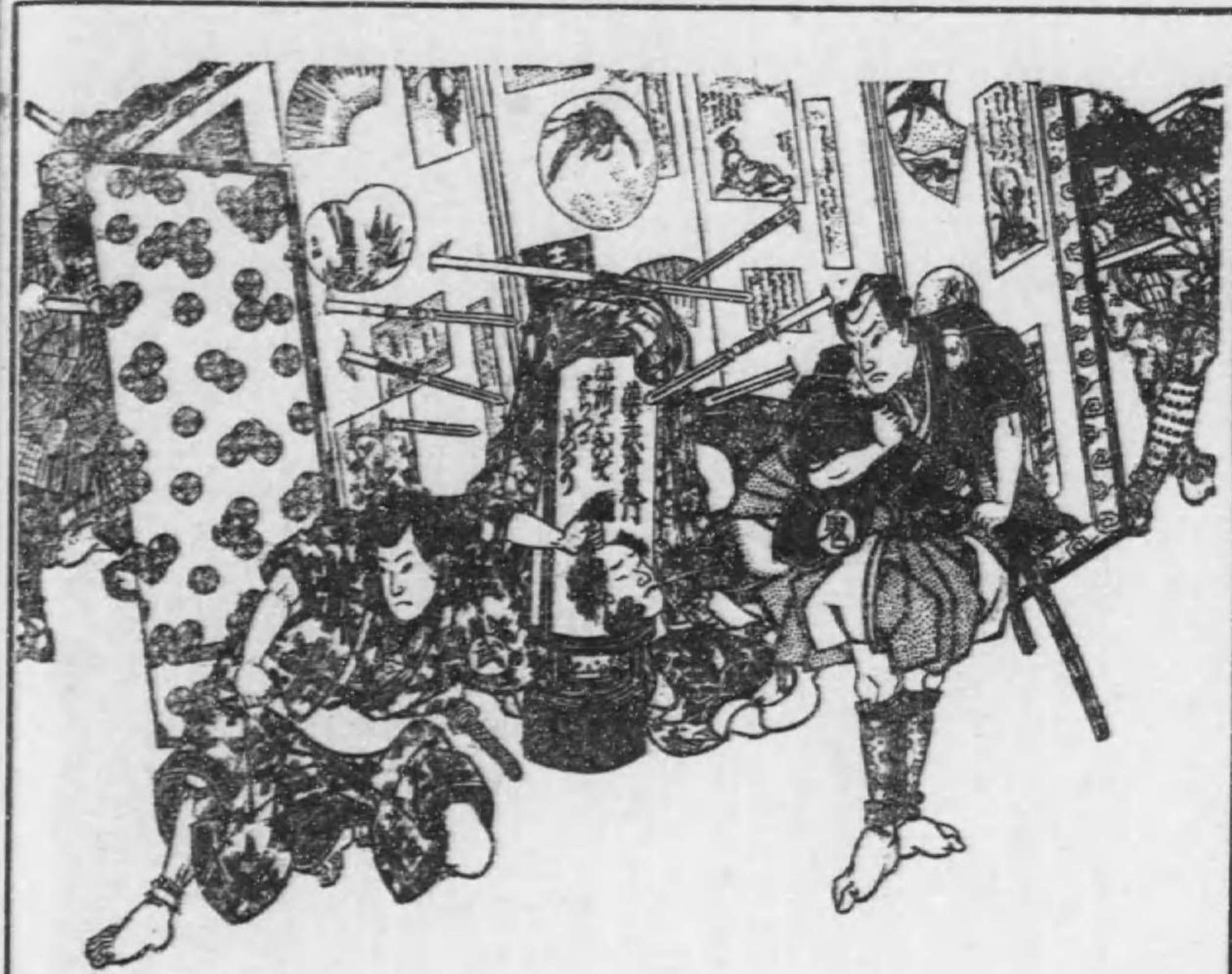


とやらん言ふ女は放れ馬のはづなを踏み初めて力の有るを知る丁度吾身も其如く今迄は此力を夢にも知らずにおた故に此頃の盗人にもお加奈様の御身の上案じながらに怖さの儘行燈部屋の隅に隠れ泣て居たのが口惜い、もう〜お案じなされます五人十人來居ても先此様に粘助が襟髪つかんで宙を引立て投げんとすれば「あゝ是れ〜其の張合に投られたら己れが頭は粉微塵そつくり置て貰ひませうやれ〜是れで安堵したいつぞやは帯やのだんでどう〜己が言ひまける兎にも角にもお前は苦手、とやかういふまに日が暮れたよ折柄に武者修行のお方は之にお泊りなさる思ひがけないお只どのがあの大力では何百人來ても配慮ふ事はない素知らぬ顔で私は見ほしにで、参りませう然しなから婿君の御里が何處か知れぬ故空な者ちやと言ひながら彼の虚無僧を後目に掛け羽織打ち掛け粘助は表ての方へ出で行きけり

宵は人目を憚りてや藥王次郎鬼門は亥の刻も過ぐる頃麻上下を爽やかに黒小袖の上に着下し晴がましく出立ちたる人品骨柄尋常ならず箱提燈に途を照らさせ供人二人從へて用心の體もなく静やかに打通れば志賀右衛門はお山と共にさらぬ體にて出迎へあるべき程のあいさつ終り「娘お加奈は昨日より風の心地と言ひたるが寒氣立て堪へがたしと寢屋に籠りて打臥たりされども重き病に非らず先づ行きて問ひ給へと指さして寢屋



を教へ其身は遠く引退く鬼門は打點頭彼の一間へすつと入り屏風へ手を掛け開くるかと思へば左はなく聞き耳立て呼子の笛を吹き鳴らせば庭の植込み縁の下其處此處より數多の盗人手鎗を引提げ現はれ出で屏風をぐるりと取り巻たり其時鬼門聲を揚げ「やア卑怯なり武者五郎汝尋常の勝負はせず虚無僧と姿をやつし我々を尋ぬる事も問者を以てとくに知る此小々波屋は財寶を數多貯へ置く故に是れを奪ひ取る可しと四天王に擬らへたる我手下の其唯一三星の網作を去年より入り込ませ粘助と言ふ手代是なり此頃彼が手引にて安々と入つたれども猶も其と知らざりと粘助を眞先に警めたるは反間苦肉盜賊の計策にも遙に劣りし己れの白癡水滸傳に事ふりたる嫁御察への水祝冷やりと参らす鎗襖血しほに染る色なほし、心得たりと手下共鎗の鋒先を突き入るゝを先づ待て〜と鬼門制し「まだ云ひ聞かす事のあり己れ最前吾を釣り寄せなぶり殺にしてくれん



と廣言を吐き出し娘の寢屋に臥したる事も迎へに出でたる粘助が道すがらの物語なぶり殺にして見ぬか何うぢや〜と鬚かきなで彼方此方と眼を配り見れば家内に人氣もなし逃げ去たのか隠れてか怖い事はちつともない然し此頃言ひたる如く情を思ひ道を立て義を磨いては盜賊の頭と人は敬はずおとなしやかに歸りしは算作へ訴へさせ武者五郎をおびき寄せ斯く計らはん其の手段娘と金の有りだけを呉れてしまへば仇はせぬいやだと言へば可愛い娘か又可愛がる鯉七を見て居る前で生け造り人質に件れて来いと粘助を早や最前武佐の住家へ遣たれば鯉七からさゝを引き通し鯉七をば提げて歸へるであらう先づ青崎の青首から縛てくれんと下知を傳へつばなの鋒先と屏風越し突き入れても〜手ごたへもせず聲もなしこは心得すと立寄て屏風かい遣り差覗き見れば娘の振袖を行燈に打ち着せて薬王次郎鬼門を此に捕ふる者なりと墨黒に書たりけり鬼門は齒がみ

をなし「南無三寶計略の裏をかゝれし油断すなご向うをきつと打見遣れば「粘助歸り候と首を疊にすり付けたり心急くまゝ能くも見留す「様子は如何にといらだてば「されば候仰せに従ひ武佐の宿へ馳せ向ひ鯉七を搦取り件れ来たらんと思ひの外彼が力量拔群にて手に餘り候故詮方なく切て捨て斯くの通りと鬚を捉んで首を差出せば鬼門大きに氣色を損じ「人質になす可き奴を討ち留ては其甲斐なし持て退れと腹立紛れ蹴飛す首は燭臺のほごりに、まろんであり〜と見ゆる面を鬼門は何心なく打ち守りや、此首級は粘助と名乗らせ置たる三星綱作持ち歸りし其方はと立寄る所をはつたと蹴据へ「吾こそ青崎武者五郎此家の娘の寢屋に入り打臥したる様にもてなし姿を扮して竊かに抜け出で汝の來たる途すちに隠れて様子を窺ふにいと親しげに粘助と己れひそ〜打語らひ武佐の方へ走らすは、あらいぶかしと後を追ひ粘助を引捕へ究問して白状させ先

づ此如く打留たり又倉藏とて五六日此家へ滯留なしたるは箕作家の近衆の武士石倉尉の助久秋なり汝が計れば吾も計り彼の久秋を商人の様にもてなし刀の箱へ武器を仕込て廻し置き商人百姓さま〜に姿をかへ形をやつし今宵泊りしは皆箕作の兵共、翅あらばいざ知らず所詮逃るゝ道はなしと辯舌淀す言ひ流せば鬼門ははつと計り差うつむいで居たりしが漸あつて頭を揚げ「僅十人廿人手下の者を伏せ置て用心のなき體にもてなし各々を釣り寄せて討たんと計りし吾が愚かさ天なり命なり早や是れ迄さア繩打て引かれよと大小投出し座を占むる神妙なりと武者五郎立寄る所を身を跳らせ兩足かいて投げんとす、さしつたりと引つばづし直ぐに蹴倒し膝掛け用意の早繩引しごき鬼門の腕ねち上げ高手小手にぞ縛しめける小盗人等は屏風の中に人なきを見るよりも皆氣を吞まれて鬼門を助けんと云ふ心もなく突き捨しまゝ槍をも取らずひそ〜其場を逃げ



出すを尉の助を初めとし家來の面々手配し其處よ此處よと追ひ詰め追ひ詰め中にもお只は吾が力を今宵こそは試みんと尉の助が荷物よりくさり帷子取出し雪の素肌引掛つ燃え立つ計りに紅なる絹をしごいて棒に掛け、いと花々しく出立つ度を失ひてうろたへ廻る盗人共を引捕へ曲球などを取る如くばらりくんと投出せば件の討手の武士共あら目覺しの方やと笑壺に入りつつ折合々々お只が投げれば取て押へ一人りくんに繩を掛け凡て此家に込み入りし鬼門が手下の盗人一人も餘さず揃めけりお山お加奈を初めとし凡て家内の者共は武者五郎か差圖して先に此家を竊かに出し宿はづれの地藏堂へ立退せて置たりければお只は其處に走り行き「先づ〜御安堵なされませ大將鬼門其外の手下も残らず珠數繁ざ味方は少しの怪我もなく打さゝめいて皆々が酒の爛する肴をさがす序に是から、すゝはきをして行かうとて無駄口だら〜倉藏様と言ふお方に初め



て私が出た晩に一昨日此に鬼門と言ふ盗賊が押入りて内の娘に心を掛け又婿入りに来ると聞く其迄己れを泊めて呉れ家内の難儀を救うて遣らう然し先づ此事は主人にも沙汰するなど口堅めはせられたれど其れとはなしに彼お方は泊めてお置遊ばせと私が言うたに違ひなく尉の助久秋さまとて彼の盗賊の討手の頭旅虚無僧は武者五郎景信様とてお相役其勇さこぎみの善さお歸りなされて御覧じませと物語る其折から竹花屋の鯉七は息を計りにかけ來り「小々波屋に騒動ありと馬追ひ共が言ふを聞き取る者も取り敢へずと言ひつゝお只が着込みたる鎖襦袢を打見遣りこは〜如何にと驚けばお山はありし事共を鯉七に語りつゝ打連れ立て家に歸り過なかりし事共を各々つとひて喜びけり、去程に青崎景信石倉久秋兩人は生捕の賊を引かせ箕作の館へ歸り言上に及びければ判官大きに感じられ賊悉く征伐終り借て件の兩人はまだ部屋住にてありける間別に



家祿を興へ給ひ是よりしては父と共勤仕怠る事なかれと懇ろに宣ふにぞ景信久秋は更にも言はず父尉右衛門藏人も面目を施して意々忠勤を勵みければ箕作の家益榮え國中穩かに治まりて民百姓に至る迄安堵の思ひをなしたりけり、偕て小々波屋志賀右衛門は其の日お加奈が書置にて竹花屋鯉七と忍び逢しを知しかと思ひ掛なき災難を逃れたるが嬉しさ故是等の事は更にとがめずさればとて望みの如く竹花屋へ送らんとはまた言ひ出でねど鯉七と是よりは一家の如く親しく互に行き通ひ夏も立ち秋も来て女房お山の臨月に至りけるがお只も亦た懷妊にて早や五ヶ月の程になりぬ外に客を迎へさせねば彼の尉の助が滯留中に其の胤を宿し、はいと著るき事なれども打出しても言ひ難く相ばらみとて同じ家には忌物なりとて此事を鯉七に語りければさうらば我家に預り善き様に計らはんとお只を誘ひ歸りけるが日あらずして此方のお山は玉の如くの男子を生め

り志賀右衛門は四十歳生れし子も健やかなれば是れに家を譲るとも遅かるまじと人も勸め吾も其の心に決し娘お加奈を竹花屋へ送りたき由言ひければ彼の両親も大きに喜び結納の取り換はし其れ彼れをも取り急ぎ日を探みて竹花屋へお加奈を迎へ鯉七と祝言芽出度調ひけり、めでたし〜

出羽の巻

出羽の國飽海郡鳥海山の麓月光川の邊

に語代關右衛門と云ふ浪人あり父は九州の武士なりしが此處に世を避けて後關右衛門は生れたり幼時より弓を好み遂に其の妙を極め針をさげ木の葉を釣りのとなして矢を放つに凡て目に連る者は中らずと言ふ事なし殊には廣き此の國にも並ぶ者なき強弓なれば善き主取して語代の家名を引きす可き者なりとて人も褒めのめきけるが此關右衛門は運拙なく二十歳計りの年なりけん父も母も此世を去り妻を娶て一人の女子を設けしが其子三歳計の時妻も亦歿したり是等の事に貯へし

黄金は残らず使ひ失ひ今は煙も立て兼て生が嶽に竊かに分け入り猿兔の類を射止め之を賣りてやう〜と露命を送る其内に或時山を蹈み迂り肩の骨を引ちがへ其れより弓をも取る事能はず既にせん方盡たりしが此家に久く奉公する帆助と言へる男あり彼は元生れ立忠實忠實しき者なる故斯く貧くなり行きても暇も乞はず此に在て晝はそここの日雇に頼まれ夜は馬のくつを作り我だに斯くてある内は如何にもして養ひ申さん心安く思す可しと最頼母しく仕ふるに關右衛門は力を得て仕官の事は思ひ絶え貯へ持ちし武器箱を賣代なして書を求め是より終日夜もすがら勤學する事十餘年螢雪の功積り内典外典に能く通じ詩を作り文を綴るに是も亦近國に右へ出づ可き者もなき博覽とこそなりにけり然ば城下に隔りし片田舎に住むと雖も聞き傳へ語り傳へ門人となる者多く彼の鳥海山の奥の院赤龍山靈水寺へ常に立入り歳が岡の坊中も大方弟子となりければ富ると

云ふにあらざれども飢す食ひ寒からず衣を打着て世を送るにいと安き身となりぬ借或日後の帆助一人の若き男を誘ひ關右衛門の前に出で「己れ十歳計りより此御家に仕へ参らせ昨日今日の様なれど三十年にもなりなんか心は左迄變らねども力も抜け身も弱り若き人には及び難し此男は紀の國の妻野の邊の者なるが心も正しく年も若し書を好めども家貧しく求る事の難き間御家に奉公なしたきとて此頃より吾を頼めり是幸の事にてあり之を二代の帆助として吾には暇を給はる可し老後を安く送りたしと親切に聞えければ關右衛門打うなづき「最もなる願なれど汝は元此國なる高島の生なれば暇を乞ひて本國へ立歸ると言ふには非ず二代の帆助諸共に此家に止まりて吾儘に振舞ふとも誰かは尤る者あらんさりながら其事も心任せになすべきなり只言ひ聞かせて置く可きは汝吾が正直なるに人の心を引くらべ稍もすれば欺かるゝ是れ慎みの第一なり又二ツには弓

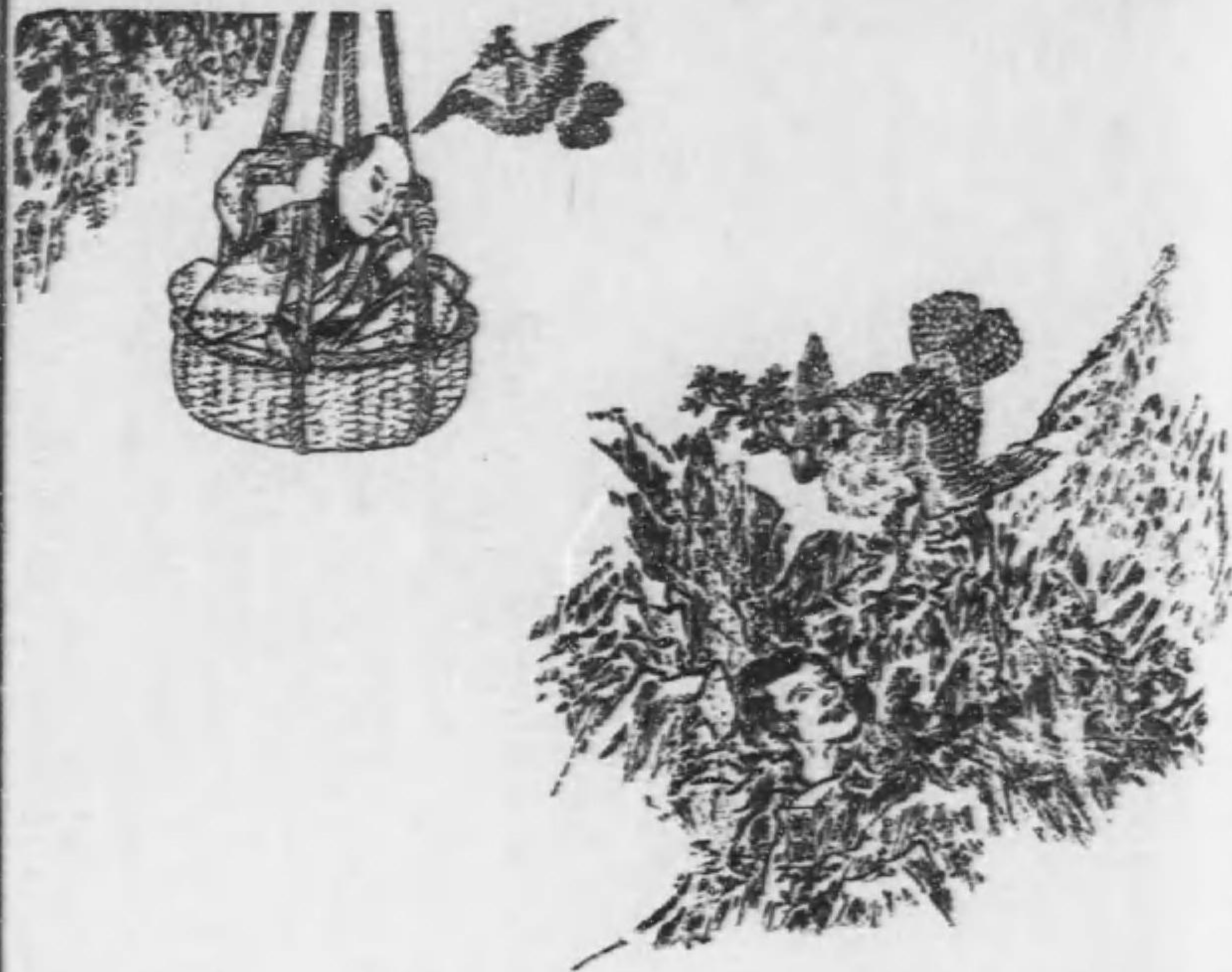
射る事を其昔し吾に習ひ開だにあれば野山に遊び鳥獸を狩暮し之を上なき業と思へるは僻事なり眼前に我を見よ抑々此鳥海山は大物忌の神社と崇め倉稻魂の命是なりかゝる靈山に併び立てる生ケ嶽へ竊に分け入り猿兔を射たる神罰忽ち肩の骨を違へ骨て弓を取る事能はずよし靈山に非らずとも物の命を取るときは忽ち其身に報ゆなり其よりひたすら後悔して鳥海山の御神を信じたる徳に依て又文道にては名を知られぬ汝常の忠臣には引換へて神を信せず殺生を好む事實に玉に瑕と言ふ可し吾家を入づるとも心に掛けて守る可しと細まんと説き諭し少々の銀子を與へければ帆助は己れの扇巻より小判を數多取り出し「彙を見れば纏をなひくつを拾へば寸沙に切り斯くの如くに貯へ持てりと彼の銀子は受け收めすまづ故郷の高島へ訪れんと出行きけり、關右衛門が推量の意見に違はず彼の帆助は獵者にならんとて暇を乞ひて出たるなりされば故郷へは



足をも向けずよこね山の麓より登る事八丁餘り只二軒ある離れ家の其一軒を買ひ求め見苦しからず作り改へ一人此に住なして猪猿狐兔の類を日夜毎狩り暮し市に賣りて錢に換へ福裕の身となりぬ抑々此横根と言ふは鳥海山には及ばずながら峰高く谷深く人里に遠く離れ彼の一軒の隣と雖も間合二丁も隔たりて是へも此頃何處よりか夫婦の者の引移り住まふ由は聞きつれども互に未だ音信れず其の面をだに知らざりけり斯く物淋じき處ながら關右衛門が肩を傷め殺生を止めてより己れも共に弓射る事を久しく止められしかば今は憚る事もなく住めば都の思して、春も立ち夏も過ぎ頃しも秋の末つ方月いと明き夜なりけるが今宵は狩にも出遣らず麻袋打かつぎ宵より眠り居たりしに夜中許りと覺しき頃帆助起よ／＼と言ふ者ありふと目を開いて軒端漏る月影にすかし見れば五ツ組を身に纏ひ縛の袴踏したき、さもやんごとなき宮女なり彼女につこど打笑み



「妾は別の者ならず倉稻魂に仕へまへらせ命婦の位を授かりて山に年経る狐なり此の頃汝が矢先に掛り吾眷屬を失ふが歎かはしさに此に來れり是れよりしては野狐を心の儘に招き寄する呪文を授け得さす可し之を射留めて眷屬をば必らず過つ事なけれ先づ試みに妾と共に早や〜來れと立出づれば帆助少しも疑はず矢を負ひ弓を携へて彼女の後を付き登る事十餘丁只ある處に件の女辨扇子を差かざし打招くと見えたるが尾花の中より一匹の狐ひらりと飛び出づる帆助は直ぐに射て落し繩以て腰に結付け愈女の後につき思はず數多の道を過ぎ八劍が崖と言へる此横根第一の險阻へこそは至りけれ其時女先の如く彼方此方を打招ぎあれ〜數多出たるに射て取らずやと勸むれども帆助の目には遮ざらずそは何れにと山岸へ何心なく立寄る所を女ははたと突落しかき消す如く矢にけり帆助は其儘絶え入りて更に前後も知らざりしが日も高く上りて後漸々に



正氣付き熟々と顧り見るに身に傷はうけずと雖も螺の如き岩のはざ間へ落入りし其の上は大石の覆ひ重なり僅に首の出づるのみ、身を動かす事も能はず既に先にも記し、如く山第一の難處にて落つる者は上らずとて地獄谷とも名に呼べる恐ろしげなる處なるに其上に大石の斯の如く覆ひたれば上らん事は思ひも寄らず此時に關右衛門が意見初めて骨身に應へ後悔しつゝ涙を流し「吾此國に生れながら鳥海山を信せずとて彼の御神の符守を主人より給はりて今猶は首に懸けてありかゝる深谷へ落入らば身は粉に砕けて果つ可きに些少傷も受けざるは此御守の徳なる可しと頻りに彼の山の方を伏し拜みて居たりければ鶴計りの大きな目馴れぬ鳥の一番ぐみの如き實を結び木の枝を嘴にくはへ之れを帆助に與へけるにぞ帆助其の實を口に含むに氣力を増し飢を忘れ忽ち心涼しくなりぬ是れ疑もなき鳥海山の御神の加護なれば此處を出づる時もあらんと頼母

しく思ひつゝ、愈信神なしにけり、これはさておき或時語代關右衛門今の帆助に打向ひ、「吾は元武の家なり文事を以て世を送るは如何しても本意に非らずさればとて肩の骨を傷めし上はせん方なし之を療治なさんには鳥海山に靈草あり鳥獸は能く之を知り鶴のかひこそ傷めし時に彼の草を取り來り鼻を打覆へば例へば一度湯に入れたるかいごなりとも解らずと言ふ事なしさりながら御神の惜み給ひて取る事能はず此頃聞けば横根山の八劍がそばの下にも彼の靈草の生ずる由彼處は俗に地獄谷とて降り難き難所とやらんと不圖語り出しければ今の帆助小首を傾ふけ、「己は紀州熊野に育ち天狗が峯など言ふ恐しき山に登り籠を釣りて其へ乗りいと險しきそばへ降り岩茸を取る事を童の時より習ひたれば取れざる事はよも非じと覺えし如くに籠を作り綱の用意も調ひければ主人と共に彼處へ行き草の模様を詳しく聞き大木に綱を纏ひ籠に乗りてつる／＼と谷の

底へ下りけるが稍有て綱をたぐり元の道へ上り來り「思ひ掛なき初の帆助新様々々の事共にて此深谷に落ちてありされども大石打覆ひて吾力には助け難しと語を聞て關右衛門大方ならず打驚き「彼久しく音信せず訴しく思ひしが吾意見を用ゐずして此に隠れて居たりしよな家來ながらも吾貧苦を貢ぎたる恩人なり救はずんば道に非ずと籠に打乗り谷に降り大石を跳のけて先帆助を籠に乗せ今の帆助に綱をくらせ又再び籠を紐させ己れも續て上りければ初の帆助は夢見しが如く、ありし夜の事よりして飢に望む其時は二ツの鳥の交る／＼に木の實を運びて與へし事など落もなく物語り伏し拜みてぞ居たりける此時に關右衛門左の手を數度振り動かして大きに喜び「吾大石を押のけんと力を極めし其時に此左の肩先にてがつきりと響しが喰違ひたる彼骨の元の所へ治まりけん昔に變る事はなし早や靈草を得るに及ばず初の帆助は此山に今は住居を求めしとか



其へ行ききて休息せんと三人打連れ下りけり初の帆助指さしつゝ、「あれこそ己が住居なれ久振にて歸りたれば嵐に傾き崖も積り見苦しく候べきと言ひつゝ、近くなる儘に能く／＼見ればあら不思議や軒は新に葺もて音き破し障子も張り改め有しよりは清げに出來夫婦と見えてまだ若き二人は此家を吾物顔に悠々と住み居れり呆れて暫し佇みしが拔足に其處を立退き少し道に遅れたる關右衛門と今の帆助を木陰へ招きて言ひけるは見給ふ如く吾家には早や人の來て居れり鬚抜き居る男の顔は更に見知らねども緋の袴を外戸口にて洗いで居る女房は狐なりとて山深く吾を連れ行き彼の谷へ突き落したる女に似たりと聞て左こそと關右衛門打領きすつと入り鬚抜き鏡を持ちたる手を振ち上げて提緒たぐり件の男を戒めたり今の帆助も彼女を禰の緒にて摺り上げ突き並べて引据ゑければ初の帆助が今此へ歸り來るを打見遣り夫婦はあらがふ言葉もなく「情に命を助

けてと打慄きて居るのみなり關右衛門きつと居直り
 「抑も汝等は何物にて何等の譯にてあの帆助を害せん
 とは計りしか包ます語らば望の如く助遣らんと言ひけ
 れば恐るゝ顔を揚げ「己れは小島小兵衛次の門人の
 旅役者薩破鯉藏と云ふ者なり女房は柄杓とか世に仇名
 する坂田の遊女連れて驅落したりしがかの廓よりの追
 手殿しく街道には佇み兼ね此よりは二丁程彼方の家を
 買ひ求め是に隠れて住む内に帆助殿は金も貯へ着類も
 多く持たれしと聞いて不圖惡念起り持て居た官女の鬘
 衣裳で女房の姿を粧ろひ狐を一匹求め置き吾は尾花の
 内へ隠れ女房が招くを合圖に彼の狐を放ち遣り誠と思
 はせ山深く引入れて突落させ上りし體も見えざれば其
 身は碎けし者ならんと此へ移りて住みけるなりと物語
 つゝ詫びければ若氣に速やる今の帆助「天命知らずの
 奴原かな公に訴へんと言ふを制して初の帆助「偽り
 かたりと言ひながら誠は神の彼等に托し殺生の報を知

らせ著るしき利益の程を見せ給ひしも知る可からずさ
 すれば怨は更になし殊には己れが貯へし金は柱を深く
 掘り其處へ隠して置たれば探し得ずして其儘あり彼等
 が持て來し衣類の類は取り揃へて返し與へ其儘放遣る
 可しと繩解きほごけば關右衛門も其意に委任せて二人
 の者へ様々教訓なしければ夫婦は蘇生の思をして伏し
 拜み「鯉藏は猶ほ身の上を懺悔して言ひけるは「己
 れ元此國の福又の生なるが十五の年より三ヶ年近江の
 國へ武家奉公今も知る人家中にあれば當春は越前より
 近江を掛けて世渡りの其序でに彼のお家へ訪れし時古
 朋輩好き折からと招き入れ汝が生國鳥海山の一王子の
 大堂へ一面の繪馬を懸く可き若殿の奥方の御願に依り
 て既に出來、生國の事なれば是より直ぐに立歸り彼の
 繪馬を奉納せんや路銀は申し下す可しと聞いて畏み候
 と直ぐに繪馬を受取りしが既に此處迄歸りながら古葛
 籠の底に打込み今に於て繪馬を納す其爲にこて給はり

たる路銀は酒色に使ひ失ひ其上かゝる惡企あら恐しの
 神罰やと彼の繪馬を取り出せば關右衛門つくゝ見る
 に長亨二年三月四日の誕生かめ、父居まさば神力にて
 知らせ給へ近江の國筑作家の近臣石倉尉の助久秋の室
 と記してあり關右衛門顔色變り懺悔に付て吾も亦懺悔
 なす可き事の起れり十六年の昔なりしが己れ妻を失ひ
 てまだ三歳の女の子を身貧に迫て養ひ兼ね親知らずと
 か言ひ習はず音信不通の契約にて或人に遣りたるが此
 繪馬の主こそは疑ひもなき吾娘偕ては無事にてありけ
 るかと額を抱いて泣ければ初の帆助も機嫌能く「私が
 懐へ入れて其處此處乳を貰ひ御育て申すと言ひ張た
 を貴君様が御心強く沙汰なしにお遣りなされ腹の立た
 は今も忘れぬ直ぐにお供と氣は急げども何を言ふにも
 岩の中に日敷を重ねて居た故思ふ様には歩けもすまい
 此お行方の知れたのも鳥海山の皆御利益又一つには鯉
 藏どの、懺悔よりの事なれば、愈怨は残らぬと頻りに

喜び居たりけり、旅仕度に日を重ね寒空に向ひなば發
 國は煩はしと關右衛門は取急ぎ今の帆助を供に連れ漸
 く近江の國に着き着替の衣服に形を改め彼の石倉の屋
 敷へ行くに棟門戸高く立竝きたうゝたる構へなれば
 心の内に驚かれ己れ如きの貧しき者の娘を娶る者なら
 ば僅か五石か十石の武士ならんと推量し鯉藏に能くも
 問はず若し聞き違へにあらんかと遠侍の敷板へ恐る
 く「匂ひ寄りて鳥海山へ掛けられたる繪馬に就きて若
 殿の奥方に申さん事あり語代關右衛門參れりと傳へ給
 へと述べければ侍此の由奥へ通じ暫らくあつて此方
 へと關右衛門を案内し奥深き座敷へ誘ひ彼の侍はす
 べり出でぬ此時に向うの繪襖右と左に押し開かせ花の
 如くに獨りの女性静やかに立出たり玳瑁の笄は地無
 し小袖に輝き合ひ四方眩き心地して思はず善くは見分
 難く躊躇暇に近くより「尉の助が宿の妻満月とは妾な
 り侍元共は遠避けつ四方に憚る者もなし是れへ〜と



ありけれど關右衛門其威に吞まればつと計りに踏まり言葉なければ満月はいと親しげに會釋なし跡の緒の書付と御姓名の合ひたれば疑ふには非ざれど別に正しき證據もありや幼かりし其時に母上逝ぎ行き給ひしは夢の如くに覺えながら其餘の事は更に知らずと若し關右衛門が名を知る者偽りて來りしかと心を引見る様なれば關右衛門進み出で「跡の緒の其中には鳥海山の守符一枚を入れ置くのみ此守ありし故に一王子へ件の繪馬を奉納ありし者ならん曾祖父の時迄は弘齋と名乗たるが赤松に屬せし時汝奇代の力量あれば之を以來名字となせと舟に立たる五大力の轅を主人滿祐より給はりし其後に力は腕にあればとて字を書き變へて語代と呼び赤松斷絶なしてより父は出羽へ引置れり此血脈を受續ぐ者非力なるは獨りもなし御身も力ありや否やと言ひ様三尺餘りなる唐銅の手水鉢に水並々と溜へしを片手に受て見せければ此時初めて疑解け「借ては誠の父上

か今奥方と冊かれ思掛なく世に出しも力を受續く故にてあり妾を後に養ひたる其人々も死失て鏡の宿に賣り渡され其時の名は只と呼べりされども主人の情にて左迄憂き目も見ざりしが初めを言へば斯様々々終りを言へばかうくにて若殿の御種を宿し彼の竹花屋に在りけるが身の納りは如何にぞと文して是に訪れしに此方の父上尉右衛門久兼様の御耳に入り斯迄力量ある女

柳亭種彦作



歌川國貞画

は君の御役に立つべきなり巴の子には義秀あり善き孫を得るならん假令賤しき女にせよ何かは苦しかる可きと勿體ない御自身に武佐の宿迄御迎へ高繪の乗物扱箱長刀持たせて鏡の宿を打たせて通た其時に彼の小々波屋の御夫婦は實の娘の出世の様に門戸へ馳出でお喜び此正月に安々と産落したは殊に男子靈氣も知らず丈夫な生れ鳥海山の御利生にて新く父上には御目に掛る早や此上には望はなしと互に手に手を取り換し嬉し涙に暮れにけり、新くて後石倉親子關右衛門に對面し數日此家に留め置てよりく〜に試みるに弓は更なり武術に達し十餘年の勤學にて又文道にも暗からねば主人判官に推舉して直ぐに箕作の家臣となしければ關右衛門も大きに喜び娘満月に言ひけるは御身が新く有難き身の上となりたるも元力ある故にてあり其の力有て武術を知らざるは智有て學力なきが如しと是より長刀健鎌心を用ゐて教へければ満月も稽古を勵み多くの年を

重ねずして、悉く奥儀を極め夫婦の中睦まじく猶ほ數
多の子を設け舅姑に好く仕へ家は愈々富み榮え芽出
度事のみ重なりけり、めでたし、程なく竹花屋の
女房お加奈も男子を生めり夫も是もめでたし

邯鄲諸國物語大和卷前帙

忠臣不事二君、貞女不更二夫とは誰々も知る史記田單附傳王燭が
詞なり是巻は鍾三郎が二君に事て災禍其身を亡し小篠が二夫を更
て苦辛するの談柄にて巢林子二萬翁の册子より出たれども惡を記
し善戒を垂こみ旨趣として事實の如く編りしかば淨瑠璃かぶき
に准へし繪さうしよりは殊更興なく繪像も亦花華なられど竹馬芥
鷄にかへて童子の戯弄とし給はば勳善の端もならん歟

天保六年乙未發春

柳亭種彦



訂校 邯鄲諸國物語 大和の卷前帙

柳亭種彦著
歌川國貞畫

近江の巻に物語し箕作判官知輝の家臣に茂山鍾三郎
的具と言ふ者あり彼が生立を尋るに祖父よりして此箕
作の家に住へ庖丁の事を預るいと輕き料理人にてあり
ければ刀は差せども諸侍に肩を並べて交り難く祿僅
なれば家も貧しく主人の用なき折々は家中は更なり近
き邊に婚禮法事何れど客ある家に雇れて料理の事を
取賄ひ謝禮を受て雜費に當て果敢なく世を送りしが此
鍾三郎は父祖父に優りて其の業妙を得て例へば金味い
と鈍き庖丁にもあれ彼が手にて打切るときは如何なる
大魚の頭も瓜を割が如此頃箕作の館へ左迄遠からぬ
稗が辻と言ふ處に稻積一有齋とて世に聞えし武術者あ



り或時家に客ありて彼の鍾三郎を雇しかば例の如くに
 左に眞魚箸右に庖丁取持て俎板に打向ひ常の手練を顯
 しけるを一有齋つら／＼見遣り傍らの鯛を取り「此魚
 鱗を引くに及ばず只最中より二つにす可しと鍾三郎が
 扣へたる俎板に投遣りければ「何にさせ給へると言ひ
 つゝ持つたる庖丁にて力も用ゐず彼の鯛を二つに切り
 て差出すに一有齋は驚き賛め「あら奇代なる手の牙え
 かな我二刀には凡そ天下に敵する者は有まじと心に慢
 じたりしがなか／＼庖丁眞魚箸の左右の働き目の配り
 其手練には及難し是見よ只今切たる鯛には口の内より
 尾先迄鐵の火箸を某が竊に差して置つるを其と知らず
 に切たる奇術あはれ御身是よりして此翁の弟子となり
 劍法を修業なし其の手の牙えの太刀筋に移る時んば三
 年を待たずして拔群の武術者となるべきに竈の元を立
 廻り生涯を送らんことあら惜む可し／＼と頻りに嘆息
 したりしかば鍾三郎言ひけるやう己に一人の姉ありし



が先年浪華の商人福原屋と言へるへ嫁しつ彼の家富る
 には非ざれども世を安く暮す間僅の米に繋れて朝夕
 腰を屈めんより此方へ來よと言ひ越しつれども刀を捨
 つるも本意ならねば其言葉に従はず若し御門下に加へ
 られ萬に一つも武藝にて身を立つる事も有らば是に越
 したる喜なしと其日直ぐに新門して一有齋の弟子とな
 り劍術稽古に心を委ね日夜出精したりしかば實に一有
 齋が言葉に違はず幾程もなく其術秀で多年修業なした
 りし門人さへ彼に及ばず稻積流の奥儀を極し事の由を
 知輝の近臣青崎藏人景範委細に知りて件の趣殿へ訴
 へたりしかば奇特の事にあんなりて辱なくも鍾三
 郎が料理人の役を轉じ取來りし祿を増し諸侍の其内
 へぞ召加へ給ひける抑々稻積一有齋が妻は先の年に身
 罷り只一人の娘あり其名を小佐見と呼びたるが眉目麗
 しく其上に伶俐き生れなりければ或は高祿の侍或は
 由緒正しき百姓其れ彼れより要らんと望む者も多かり



けれど一有齋之を許さず却て彼の鍾三郎に送らん由を聞えければ鍾三郎大きに驚き「師の高恩にて人並に剣法を覺えたるが遂に主人の耳に入り祿をも増して給はれども其も僅の事なれば漸くに下男一人ならねば養ひ難し何とて尊師の御愛女を小生如きが申し受んと恐れ入りて言ひければ一有齋打笑ひ「小佐美は老後に設けし娘某は七十に程近くして餘命もなし持傳へたる家財雜具外に取る可き子もなければ賣代なして暮すとも御身夫婦が兎も角も世を過ぐる程はありなん恩を知り義を守る志こそ千貫の知行に勝りて頼母しけれと強て小佐美を送りけり是鍾三郎が武術に達し其心柔和にて色白く眉秀で人柄も打上り賤しからぬを娘の小佐美日頃よりして憎からず思ふ素振を一有齋も豫て知りたる故なる可し鍾三郎は思ひも掛ぬ師の娘と言ひ殊に又數多の人の心を掛しかゝる美人を妻となし婿引手にとて世に稀なる菊一文字の刀は得つ諸侍の列には加はり

其喜斜ならず此趣姉にも言遣り只父母の世を早く過ぎ行かれしのみ残り多く是より益一有齋を誠の親の如くに敬ひ小佐美も操いと正しく、まめくしげに仕へければ夫婦の中の睦じさは翅をかさね枝を連ぬる其等の譬も物ならず程なく小佐美は孕りて玉の如くの男子を産み名を京太郎と呼びたるが此京太郎八才の春の頃より一有齋不圖病の床に就き水無月末にぞ世を去りぬ其の歎にや此程より風の心地と小佐美も打臥し左迄の事とも見えざりしが思の外に病激しく命も危かりけるが療養疎ならずりければ其驗顯はれて漸々に本復たし是より記す事もなく月日の経て近江の巻に詳しく説きたる熊野鬼門兄弟二人が國中を騒がせるは京太郎十歳の時なりけり去れば茂山鍾三郎も日頃習ひ得たりし武術を顯すは此時なりと彼の盜賊討手の事を竊に願ひ出でたりしが石食尉の助久秋青崎武者五郎景信二人に早や先立て命せられ遂に望を失ひつ彼の武者五郎景

信は己を見出せし恩人の藏人の一子なりよし然なくとも祿重き近臣の子息なれば強て願ひ出でたりとも及びなき事を知り只だ空しく拳を握り祿の少なき身の輕きを心に悔み居たりしが或時に女房小佐美湯を使ひ化粧して新しき小袖を着更へつ何處へか行くならんと思へど出で行く跡もなく床の間に摩利支天の御姿を掛け供物を捧げ劍術稽古をなし居たる京太郎を近く招き夫の前て手を仕へ「何事にもあれ妾が言ふ事必らず驚き給ふなとつれつと打守れば鍾三郎眉を皺め「改りたる御身の言葉驚まじと斷るにぞ聞かぬ内より驚かれぬ急ぎ語れと問ひける時小佐美は猶も近く差し寄り「覺てもおはすべし四年以前の今年今日妾の病甚しく既に息も絶んとせしとき父上信心したまひたる妙定院の摩利支天を心の中に深く信じせめては我が子の十才迄命を延し給はれと題目數返唱へしかば現に尊天現れ給ひ定劫なれば汝の命如何とも詮すべし然れども切な



願の趣 天帝へ訴へて今日より三ヶ年日に積りて千餘日は健に此世にあらせん猶も信心怠るまじと告げ給ひしよりすら〜と心よくなりたるは見給ふ如くに侍るなり其の限りの日の今日なれば早や臨終の近きに在り變る姿を見せ申すが何よりも耻かしければ髪飾りも此の儘にて柩へ納め煙となし母様は眞言宗お骨は高野の山に在り父は知ろし召す如く法華の堂場妙定院に御亡軀を葬りたれば妾の骨をば二ツに分け一ツは父の御側に納め一ツは人にあつらへて高野へ送り給はる可し、ごくにも申す筈なりしが御歎の程を察し今日迄包みてありし故死に行く身とは知り給はず御物好きの此小袖下されたは五日以前今が着初めの着納めと成るも定まる命數なれば歎かせ給ひそ妾も歎かじ此小袖をば旗に縫ひ何れなりとも納めてたべ京太郎よ是よりは父様一人になり給へば愈々孝行盡す可し言ひ置く事も是迄ぞと武術に心を練りかためし父の氣性を受継げ



ば涙も落さず潔よく言ひ終りて小袖を脱ぎ白無垢着替へて覺悟の體泣よりも猶ほ哀なり鍾三郎は茫然と只打守り居たりしがやう〜に口を開き思ひ出づれば御身の惱み危く見えたる其の時に頻に空を伏し拜み何やらん言ひたるが然に侵されしごもなき漫言を吐くならんと心も留ず居たりしが借は其時尊天の現に拜まれ給ひしごか其れ疑ふには非ざれど今日は常より顔色好く聊か惱める氣色もなき御身が何とて左る事有らん先忌はしき白小袖はや脱ぎ代へて酒吸み交し氣を爽に持ち給へと進めても開入れず「何とて摩利尊天の儀を告げ給ふ可き若し生存なば優曇華の花の御顔再び拜まん夜明くる迄は妾の寮屋を必らず開き給ふなど豫て用意やなしたりけん一間處に閉籠り内より柩を確と差し押ごも更に開かざりければ鍾三郎は只呆れに呆れ京太郎も早やおろ〜は物の辨ありける程にうろ〜として泣き涙を襟々に言ひこしらへ先女房の言葉に従ひ彼

の一間は其儘差し置き夜もすがら尊天の御姿に打向ひ心を凝して明くるを待ち東雲頃に一間に立寄り差したる戸口に耳を寄せ稍暫らく窺ふに潜まりかへつて音もせず大に怪しみ戸をこち放ち内に入て見てあれば小佐美はきつと畏まり西に向て手を合せ顔色も更に變せず眠が如く死てあり此は抑も如何と打驚き若し亡き魂の歸り來る事もやあらんと様々に祈り等させせけれど其甲斐更に涙に暮れ親子兩人が其歎きは愚かの筆には書取難く大凡にして皆漏しつ斯くてあるべき事ならねば其次ぐの夜遺言に任せて野邊の煙となし有爲轉變の世の有様昨日の花の顔も今日一掬の塵となり只香を燒き花を捧げ後弔ふより外詮無く打濕りたる鍾三郎が身の上には引代へて石食久秋青崎景信彼の盜賊を打平げざんざめきて歸りしは此小佐美が初七日の連夜に當りし頃なりけり國中ゆすりて彼等が手柄を賞めのいめくを聞くに付け又今小佐美が新々しき位牌となりしを見

るに付け鍾三郎は兎に角に浮世の中に飽き果て仕官なすべき心も失せ程なく忌も明けて後青崎の藏人は大人役なり殊には又初め推舉の人なる故彼處に赴き案内を乞ひ面會なして長の暇を給はりたき由願ひければ藏人暫く思案なし「御身何日ぞや盜賊の討手を願ひ出でられしが吾等々に命せられ其望を失なひしを快からず思ふの餘り身退かんの所存なる可し此の處を善く聞かれよ今治りし御世ながら反逆を起す輩あるまじきとも言ひ難し其時には最先駆功名手柄を顯すこそ武士の本意と言ふ可けれ此度のは多寡で盜賊小伴共に相應故御身に限らず武士らしき者は彼處へ差し向けず見處ありて君に訴へ御家の子の其内へ加へ入れたる御邊の事何とて粗略になす可きと道理正しく言ひければ鍾三郎はつと平伏し「某此頃手を控き筆取るさへも儘ならねば太刀抜く事は猶ほ更なりじせん御役に立ち難き不具に近き身となりて君の祿を食はんは空恐しく候間回國



那那諸國物語 (大和の巻前巻)

修業もなす可き存念無ならず其記を頼て料紙硯を乞ひ右の腕の傍に依り武術の事は思ひも寄らずよし御暇給はることも武藝を以て二君には事へざる段々を神文に認めつゝ思込で願ひければ藏人は兼てより鍾三郎が廉直なるを能く知りし上なれば彼最愛の妻に繼れ其故の發心とは言ひ出で難き候とは心も付かず誠と思ひ左あらばよしなに計らはんがまだ年若の事なれば養生だに加へなば必らず本復近きにあらん先其の由は言上せん心安く思ふ可しと彼の神文を納めければ鍾三郎は一禮を述べて宿所へ歸りけり此に浪華の大和町に福原屋徳兵衛とて吳服商賣をする者あり店は格子戸引附て物淋しげに見ゆれども久しく老鋪で得意も増へ何不足なき暮しにてまだ若き頃近江より京見物に上りたる娘を見たるが心に適ひ頼て彼を買ひ受けおたへと呼んで妻となし程なく男の子を設け徳の助とて寵愛しつされば月日に關守なく徳の助



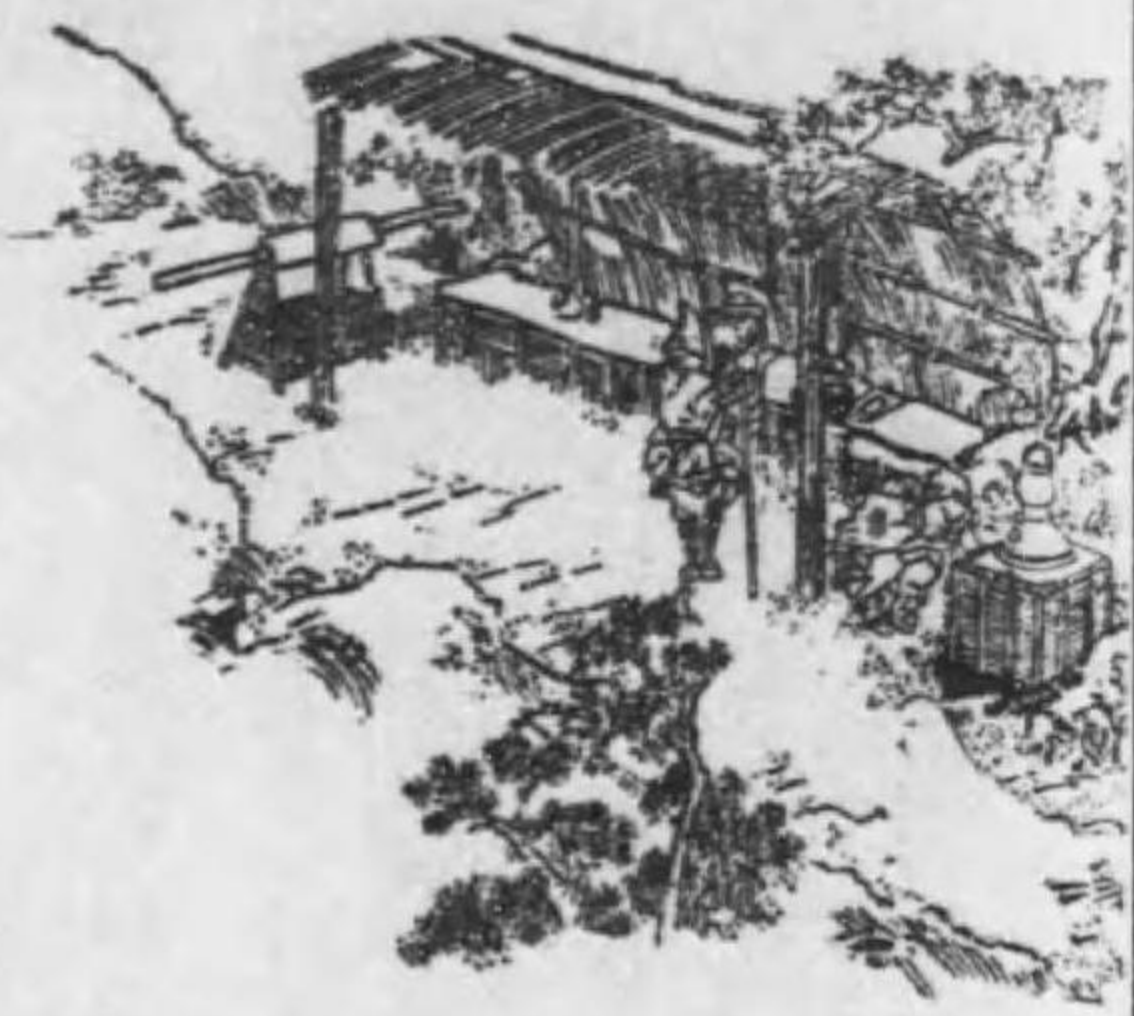
は十三歳おたへも三十路の其の上を五ッ六ッぞ越えたりける是即ち鍾三郎が實の姉にてありしかば此家を頼りて来るにぞおたへは大きに打驚き「やれ珍しや何として此度は上られし其子は定めて京太郎目元涼しく色白にて女の様な生付き小佐美様も一所にか、まアく伯母の側におちやほんに何から言ふやら此からの道程も二十里には足らねども私は世帯の暇なく殊に女の事なれば供一人でも下り難く其方は主人に仕ふる身我儘には旅も成らず只文の取交して互の無事を知る計り遇はぬのはもう十七年女は變り易ければ私は昔の影もあるまい其方は年のふけた計り見違へるといふ程でもないと喜しげに言ひければ鍾三郎も打絶えて懐しかりし事を述べ「偕て此度態々と私の参りしは女房小佐美近頃病死書通で申上げたる通り箕作の家臣の數に入りしは彼が父に指南を受し故なれば一方ならず思ある妻なかく行末後妻を迎へん心嘗てなし是より回國

修業に出で立ち先初め高野山へ遺言なれば彼が骨を納めて菩提を弔はん存念羈絆となるは此悻何卒此へ留め置かれ若し望みてもあるならば何處へなりとも遣りてたべ今迄は劍術を怠たらず學ばせしが今よりは十路盤の指南をして給はる可しあゝ家柄のなき武士は商人には遙に劣れり我も此度盜賊の討手を願ひ出でたりしが若輩の者にし落され口惜しさ故暇を願ひ其事すむと片時も屋敷に住む可き心なく此頃風邪に侵されて長髪ながら立退きしと有りし事其物語れば心を察しておたへも妻れ「小佐美様には只一度もお目に掛らず打過ぎしが善い御器量と言ふ事は飛脚に下した男のお噂此子に似たらばさうでもあらう確かお年も三十になるやならずに果敢ない事と言うたどて歎いたどて命計りは是非がない此方にも此の頃不幸のあり徳兵衛殿の弟は升形屋堂助殿とて高麗橋にてあら物商買私嫁つて來ぬ前に茲の家より堂助殿は其升形屋へ婿に行かれ男の

子も出来たれど三年前家付の女房は病死され去年の夏其後へ呼び取られしはまた年若利發には見ゆれども家内の示し子供の世話覺えないと此方の人も蔭では噂されたれど堂助殿の氣に入た様子故に漸々此頃披露をするやせずに堂助殿が又病死後取りは子供同然殊には實の母はなし兎角に家が不仕だら故徳兵衛殿の何かと厄介今日も早く徳の助を伴れて彼處へ行かれしが日暮でなければ戻られまい其方の事は隔りて近江に住むより引取てこゝへ置たら私の頼にならう様に昔から此方の人と言うてなれば少しも案じる事はない京太郎は徳の助と丁度よい遊び相手幸ひ風呂も沸たさうな先緩る／＼と休むがよいと年月遇はねど骨肉同胞いと頼母しく聞えければ然あらばと湯あみしつ打寛いで居たりけり斯くて鍾三郎は徳兵衛に對面し妻に後れて發心の事共を語りければ徳兵衛之を委細に聞き「貴殿未だ年も若し浮世を思ひ離れんより永く此の地に留まりて身



の治まりを計るこそ京太郎が爲なりと初めは承引せざりしが強て願をかへてたべと繰返へして言ひければ止まり難き氣色を悟り然らば先づ回國の修業者に出立ち高野山へ參詣し妻の遺骨は納む可し必らず共に髪を下し迂濶に僧となり給ふな去る者は疎しとやらん年月経ちてせんもなき菩提心を起しと後悔なして還俗せば却て人に笑れん武者修業なす者なんどが六十六部の妙典を修むる姿にやつす事世になき事に非らざれば其は苦しかるまじとやうくに許しければ鍾三郎大きに喜び鐘鼓錫杖は更にも言はず調度を整へ勇より譲られたる菊一文字は幸に尺も然迄長からねばまさかの時の用意にと元の妻の骨と諸共に笈の中へ隠し入れ既に仕度も調ひて京太郎が事夫婦の者へ懇に頼み置き別れを告げて立出でつ先住吉へ參詣し堺を廻りて一夜泊り左に折れて和泉に入り赤畠の萬代八幡鉢が峯の長福寺處々を順禮し遠き道には非らざれど元より急

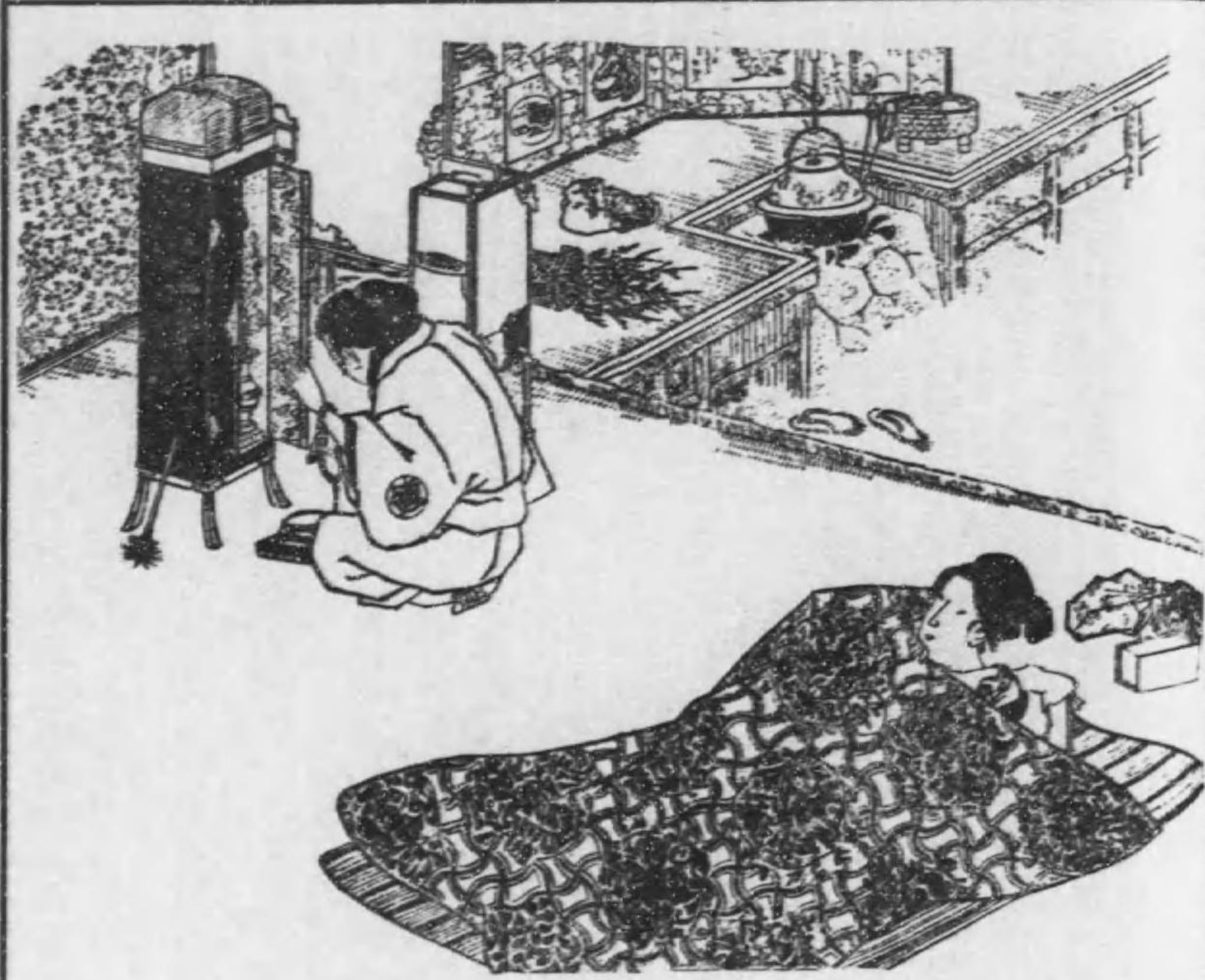


木更ん宿

がぬ旅なれば暮れば宿り明くれば立ち只我儘に途を行き河内に入りて天野山鳥帽子形山河合寺三日市より清水岩瀬後に見なして木の目時或は紀伊見時とも所の人と言ひならずは坂道へ掛りしとき申しと後より呼止むる者あり振返て其の人を見るに三十路に足らぬ女なりいたく途に疲れし體にて髪も亂れ衣物は土塵に穢れながら襪端れいと清くなか／＼斯かる山途へ供をもつれず只一人來たる可き人柄ならず然れども連立つ人もなく小布呂敷の包を負ひ手に笠を持ちたるが鍾三郎が袖をひかへ「下岩瀬の酒店にて籠昇の仲間喧嘩息杖持て打合ふを貴方が見兼ねて先々互に了簡せいと止め給ひし其時彼等は却て腹立ち修業者の無用の妨げ是から己が對手ぞと兩方一度に打掛るを其錫杖にて一寸止め身を交されると兩人はばつたり轉たまゝにて起上らず恐れ入て喧嘩も其切りはて頼母しいお方ぞと後に附いて参りました確に貴方はお侍お見掛け申してお頼

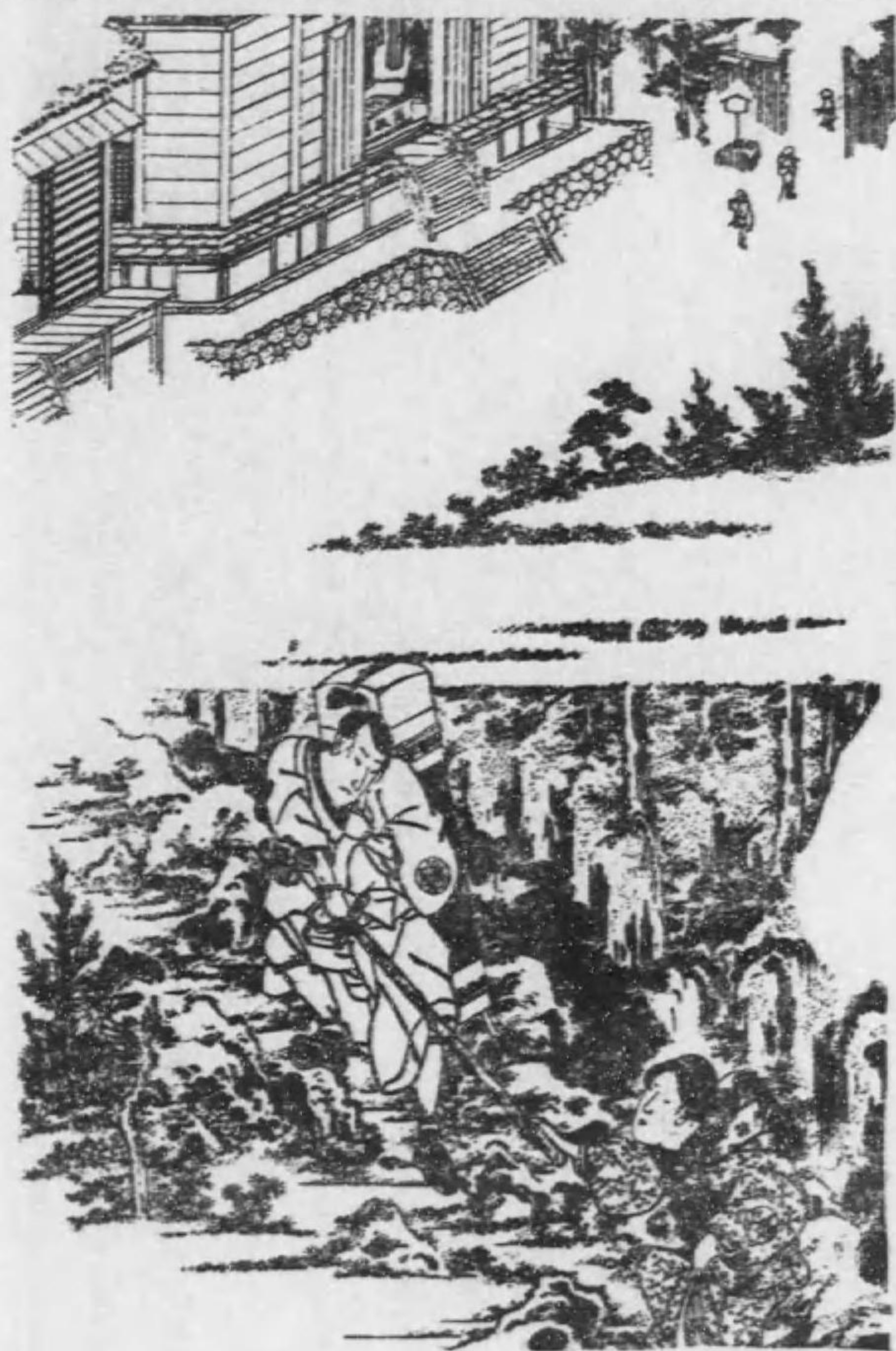
を何卒かなへ給はれと様子有りげに言ければ鍾三郎打
 領き「言はるゝ如く元は武士力の及ぶ事ならばとたち
 休らへば彼の女さも嬉しげに猶すり寄り「私夫は浪
 華の商人近頃病死致せしが臨終の折吾骨は高野山に納
 めよとくれぐゝの遺言故手代一人を供に伴れ御覽の如
 くの旅出立思掛けなや彼の手代慾に迷うて心の變り能
 と有られぬ道へ誘ひ旅用は元より着類のたぐひ皆かき
 集めて夜の間に駈落まだ 幸は夫の骨片時も身を放さ
 ねば其は残りて包にあり僅計りの小間金を鏡袋に入
 れ置しを思出して此所迄はやう／＼に來りしがはや其
 さへもかれ／＼になり行くのみか道は知す女の身空で
 只獨り心細さを推量あり何卒お山の麓迄お連れなされ
 て下さらば宏大無邊のお慈悲ぞと涙を流して頼むにぞ
 鍾三郎も目をしば叩き「世に似た事もある者かな吾も
 此頃妻を先立て其骨を遺言にて彼處へ納に行く道なり
 身につまされていとをしく心使ひをし給ふな泊り／＼

も取賄ひ又歸るさも浪華迄送り届て進す可し某とて
 も參詣は初てながら此山を越れば紀の路の橋本なりい
 ざそろ／＼と連立たんが旅の女中と呼ばんのも耳立ち
 て聞悪くかる可し名は何とか言ひ給ふと問はれて少し
 口籠り「今では小笹と申します「何に小笹みの字の一
 字違ひし計り覺え能くてよし／＼と思掛なき連を得て
 浮世語りに草臥も忘れて峠を何時か下りはや橋本に著
 きけれど日もまだ高く見えければゆる／＼と打休み籠
 を雇ひて、小笹を乗せかひろの宿に至りし頃漸く雀い
 ろどきなり借此宿には近き内大和の國の郡司何某殿
 の到着にて逗留ある可き用意とて本陣初め家門廣きは
 旅人を留めざりければ混雜大方ならずして宿る可き處
 なし然なきだに鍾三郎は修業者の事にてあればはか
 らしき方を頼み宿るべき身にも非らずやう／＼にし
 て軒端も傾きいと佗しげなる殖生の小屋水風呂桶のた
 が切れて湯をさへ立てぬ木賃宿に今宵は一夜明さんと



て小笹諸共泊りければ夫婦の連ぞと思ひ違へ是にて一
 つに寐給へと夜の物も多く貸さず詮術なくも背中と背
 中さし向けて姿を亂さすまごろまんとしたりしが其名
 の似たりしのみならず何とやらん過去りし女房の面影
 を思出して眠られず鍾三郎はそつと起き出で香を焼て
 心を清め笈を開て本尊に燈光を捧げつゝ念佛唱へて夜
 すがら寐す朝未明に仕度して豫て御山は坂道多く駕籠
 にては登り難きと聞き置きたれば女の足の後に疲れん
 事を案じ小笹は昨夜能く寐てはや草臥れも忘れしと言
 ふのを強て此より三里神谷の宿迄駕籠にて誘ひ歩行路
 となれば猶更に心を付けていたはりつゝ音に聞えし不
 動坂四寸岩等いと險しき路をやう／＼攀ち登れば歩む
 に安き平地となり左の方に聳えし山を後にあて、造り
 しこそ彼の女人堂なるべけれど兩人は立寄り伏拜み案
 内を乞うて彼の座敷へ打通りてつら／＼見るに百人を
 留むるに猶狭まからず作りなし寛を以て山水を直ぐに

風呂屋の内へ取り見上ぐる許りに薪木を積み其自由さ
宏大さ聞きしに勝る御山の富は此より先顯はれ目を驚
かし打寛ぎ茶を飲み飯を喫して後鍾三郎の言ひけるや
う「奥の院へは僅に一里殊には道も平にて更に難所も



なき由なれば吾は直ぐ様參詣せん向ひに見えたる木戸
めくもの内へは女を入れずと言へば此に留まり待ち
給へ故主の館に在し時此所の坊にも知る人あり其を尋
ねて今宵は宿り御身の夫と吾妻の骨を納めて立ち歸ら
ん日牌をも付け給へ立替置く可き用
意はありと深切に聞えければ小笹は
只泣きに泣き「お禮は言葉に盡し難
し然あらば是をと夫の骨に法名月日
を書き付けたる一ひらの紙を添へ渡
せば直ぐに受け納め立出でたるが小
戻りして「山風激しく今日は冷えぬ
見うけし所が肌薄にて顔の色つやい
と悪しと笈の上なる包を解き打重ね
たる小袖を取り出し「言ふのも愚痴に
は似たれども仕立し計りに手も通さ
ず果敢なくなりたる妻の片身然れば



汚は更になし是着て寒さを凌ぎ給へ旗に縫はんと思ひ
しが人が難儀を救ふのは其れに優りし功德にこそと小
笹に與へて後の事此の法師に打頼み女人堂をぞ立付け
る箕作家も高野大師を久しく信仰し給ひて此のお山の
何某院は度々近江へ下りし故鍾三郎も能く知りつ其れ
より彼處に尋ね行き「手の傷にて暇を乞ひ回國修業に
出たる由を物語りなしければ其は奇特の事なりとて一
間處に案内し高野山の七度食とか 諺にも言ふ通り爰
の習に候と食よ餅よと取換へ引換へ様々に饗なされ愈
々道の疲も安まり此院に二夜宿し諸堂を殘らず順禮な
し果て別れを告げて又元の女人堂へ立歸れば小笹はそ
れと聞くよりもいと嬉しげに出迎へ「御歸を待兼ねし
と言ふ顔をふと見るに女房小佐美が又再び此世へ歸り
し心地せられ其品形に至る迄別の人とは思はれず初め
の程より面影の似たりと心は付きながら斯く迄にはな
かりしがあゝ迷たりくと取落したる珠數取上げ眼を

押眠りて居たりけり是は小笹が亂たる髪を取揚げ湯沐
 みして小佐美の小袖を着たりしかば旅の寢もあてやか
 なる姿に歸りて此程よりも見優りたる故なる可し小笹
 の夫は色黒く形も賤しくありしかば鍾三郎には比べ難
 し然れども心いと優しく深切なりしに絆されて小笹は
 外に妻らんと言ふ者ありしを振捨て、彼が妻とはなつ
 たるなり然るに不思議の災難より鍾三郎を打頼み介抱
 は受くるものから仇めく心の其に又移ると言ふには非
 らざれど割なく勞りくる、様と、こねねは夫に違はね
 ば思ひ出す事いと多く果なく過ぎし其人を頻に戀しく
 思ひけり此時に鍾三郎は佛に懺悔しやう／＼に心を静
 め目を開き兩人の骨を障なく納し事を物語り直ぐに立
 たんとしたりしかば小笹は小袖を脱ぎ更へるを振り返
 り見て押し止め「湯帷子を其上に引掛て端折りなば然迄
 に目にも立つまじと兎角なす間に晝にもなりぬ支度を
 調へ立出で、例の險しき坂道も下るには少し安く然れ

ども女の事なれば道抄取らずやう／＼に神谷をば過ぎ
 たるが、かむろ迄は心許なく殊に郡司の泊にて彼處は
 混雜すべきと思ひ其れより一里南なる、かねと言ふ處
 には木賃宿にはありながら聊か廣きへ日暮て宿り屏風
 を隔て、小笹とは引離れてぞ臥したりける其夜は村
 雨吹き注ぎ風に落葉のはら／＼と窓打つ音の物淋しく
 鍾三郎は目を開き見れば近江の住居にて小佐美は夜
 べに京太郎が羽織を縫果て火熨斗を掛けまだ忙しげに
 起てあり是れ一睡の夢なれど今迄現にありし事を却て
 夢と思ひ違へ是をば更に夢と知らず鍾三郎は吐息を付
 き「言はぬも胸の苦しければ聞ゆるなれど必らずとも
 氣に掛給ひそ病もなく其方は果敢なく此世を去り吾ら
 暇を給はりて回國と志ざし高野山へ行く道にて云々の
 女に遇ひ其の歸る途にかねの宿に宿りたる其迄を長々
 しくも夢見たり窓打つ風と聞たるは火熨斗を扇ぐ其團
 扇の音にこそありつらめと始終を物語れば小佐美は

殊に機嫌能火熨斗を火入に取移し煙草吸付け差出しな
 がら「誠に夢は逆夢と世の諺にも言ひ習はずさぞ私
 は長生を致す事で御座りましよう珍しひ其女中と兩人
 お泊り遊して面白さうな處とは知らずにあたふた立働
 き遂お目を覺さしました先此羽織も明日から京太郎に
 着せられるぞれ私もゆる／＼と休ませうと枕を取
 る姿を暗き火の影に鍾三郎は透し見て「其方は近頃拵
 らへた下着を寝巻になせしやると咎められて打ち微笑
 み「何日ぞや一寸此小袖は引掛て見た計り其から何處
 へも行かぬ故今日迄仕舞うて置たれど如何いふ事か今
 ふつと着て見たうなつたから箆筒の中から引出し着た
 れば子供やうなれど肌當りが柔和でどうも脱ぐのが
 嫌になり世帯知らずの途其なり古臭い女房でも寝巻小
 袖の柔かな手探り許は全盛なお山や藝子に變りはある
 まい、なアもうし旦那様と打戯れて寐たりしが程なく
 明けぬと告渡る遠寺の鐘や鳥の聲耳に入て鍾三郎誠に

目覺て茫然と四方を見れば思ひも掛けぬ宵には寐屋を
 隔てたる小笹は何日の程よりか同じ臥房に打眠り彼の
 先の程咎めたる小袖を寝巻に着て居れり偕て今迄小佐
 美と心得語らひたるは彼なるかと餘りの事の淺間しさ
 に思はず獨りつぶやくが是も寐耳に入つたりけん小笹
 も目覺めてはつと驚きわざり退いて差し俯き「のう情
 なやいたづらなる女と蔑すみ給はんが有しに變らず過
 ぎ近きし夫のまさ／＼來り給ひ「偕は御身も其の夢
 を「貴方もお果てなされたる妻と思ひて仇枕「こは何
 とせん淺間しやと暫し言葉もなかりしが鍾三郎形を正
 し「今更悔みて歸らぬ事然はさりながら心より互に侵
 し、罪には非ねば佛に詫びて道心を我はいよ／＼堅固
 にせん御身も益々操を正し夫の無き後弔らはれよ元
 某が生國は近江なれども幸ひに福原屋徳兵衛とて大
 和町に姉婿あり御身も浪華の者と聞く先々是へ同道せ
 んと聞て小笹は猶驚き「そんなら貴方はおたへ様の弟

子にて茂山様とか仰るお方に侍るかご問はれて此方も訝しく「如何にも吾は鍾三郎、して又其を何として御身は知りて居給ふと言はれて小笹は顔打頼め「私夫は升形屋堂助とて仰つた徳兵衛様の實の弟御おたへ様のお身内と貴方を今朝迄知らぬ故きいみ峠で身の上を申上げたは大凡にて實は再び升形屋へ歸り兼ねたる今度の災難お聞なされて下さりませと、うかむ涙を振り拂ひすり寄て聲を響め「私は雪野とて京都祇園に舞子の勤め堂助殿が商買の上らる、度々に馴染重ねてはや六年お内方がお果なされ其後へ舞子といふ事内の者にも知らさず嫁つたはやうくと去ねん水無月末の頃先嬉しやと思ふ間も泣くも泣れぬ堂助殿の此春よりの大病に薬も加禱も効しなく遂に果なくなられしは何日ぞや申し上げたる通り去りながら其折は私の名さへ包み小笹と言ひしは彼の時に多く根笹の繁りしを其の儘言ひし偽にて升形屋へ來て後はの字を抜きて

雪と呼ぶ此の身は却て消えやらぬを打歎けば鯖六とて彼處に久しき手代の男竊やかに私へ向て其様にくよくよと思召ても歸らぬ事旦那様が御臨終の二日前に仰しやるには己が骨は菩提所へ葬る様に人に見せ隠して置てお雪に渡し手前計りが供をして高野山へ參らせて骨堂へ納めてくれ福原屋の夫婦が聞かば定めて留めるであらう程に家内の者にも沙汰するなと御遺言が御座つたから支度は残らず調へました今夜人の寐静まるを待てお立なされませと親切らしき言葉といひ殊更常々彼のお山を信仰されしは誠なれば欺かるゝとは夢々知らず人に隠れて其夜に旅立ち元より途も方向も知らねば頼みは鯖六計り二日路程も行きて後龜山道と書いたる印し堤に立てゝありしに目の附き心得難く荷物を下させ腰打掛けて暫く休み「高野山へ浪華より然迄に遠くもないと聞く此所は何と言ふ處で道は是より何程あると不圖問ひ出づれば鯖六はからゝと打笑ひ「是見給



へと吾袖をまくり上げて差つくるを見れば腕にお雪命と何日の間にやら入ばくろ、はつと思へど驚かぬ風情に態と待遇して「其方のゆかりの名は問はぬ爰はもう紀州かと言ふを押し止め身近くすり寄り「爰は丹羽で我在所是からは僅に五六里其處へ伴立ち申さんとはや龜山をも越えられたれば高野山へは遙の道旦那の骨は人に頼み納めたにすればよい心中見せた上からは今更くどくご言ふにも及はず疾より御身に執心ながら流石に口へは出し難し待てば海路の日和とやら内の不幸は我身の幸よし主人でも今では後家殊には何程包まれても元は舞子といふ事を家内に知らぬ者はなしあれでは後が治らぬと徳兵衛殿も蔭では噂さ是より若旦那をもち立て居られても店の者にも侮られ口惜き目を見給ふが何ぼうか、いとをしい吾等が在所へ同道して身を吾儘に持たせんと高野山へ行くと偽り駈落したる忠臣者憎ふは思ひ給ふまじと言はれて胸は沸へ返り喰付ても遣

らふかと腹の立つのを押鎮め「昔は道の柳にて往來の人の手折次第風に委せし身にもせよ三日なりとも定まりし夫を持っては園の梅香も墻の外へは散さじ御身は幼時よりも升形屋へ奉公して大恩受けしと常々話し其を忘しも私故辱ないとも言ひ難きはまた年のある此身體多くの金にて身の儘になし給はりし其人の世におはせねば猶更に身を慎むが女の道其程思ふ心なら堂助殿の存生に何故打開けて言給はぬ當座の花の戯れより、のくに退れず呼取て下されたれどやううに女房の披露はまだ近頃其前ならば許を受け夫婦となられる事もあらうにゑ、遅かつたくと泣つ口説つ様々に意見したれば鯖六もしよせん心に従はぬと思つてか初めに變り悄悄として言葉を和らげ段々と其罪を詫び是より思切る間人に沙汰して給はるなど只管後悔懺悔して一宿戻りて宿りしも私に心を許さず矢張彼が偽にて皆かひ集めて其夜に駈落、升形屋では鯖六と不義して私も

諸共に逃げたと思つて居るのは必定今立戻りて斯々と言うたごとく證據はなし人にも告げず、さ夜中に旅立つたのが身の誤り幼ない時に父様母様お果てなされてみ頼りはなしお骨を納めた其後に自害と心を極めながら思ひ掛無御介抱受たが此身の絆となり今更ごうも死なれませぬ現にもせよ夢にもせよ添寝したのは宿世から約束事と諦めて連て退て給はれと顔に諸袖押當て、伏し沈みてぞ泣居たる鐘三郎も小首を傾け「堂助殿の死去されて後添ひが若い故何にか家内の不仕だらと福原屋夫婦の話今思ひ合すれば鯖六が豫てより此方に氣色のある事を推量されたる故なる可し儲て氣の毒は御身の上吾も共々鯖六が悪事の事を言ひ解きなば其身の明りは立つにもせよ心の鬼の恐ろしく打連れ立て福原屋へのめくとは歸り難し又打付に吾女房に給はれと言ひだしなば承引さるゝ事もあらんが吾なき妻は師匠の娘恩義の人なり殊に又十をも越し男子のあり重ね

て妻は迎へじと言ひ放ちたる言葉の立たず吾身捨つれば御身は死ぬ、とあつて行へき家もなしはて何とせんくと思案に暮るゝ表の方「御亭主は御宿にか、かむろの宿から來ましたが知ての通り一昨日から大和の國の郡司花城千早の助様が玉津島御參詣のお歸りに御逗留お連れなされしお料理人が病氣故にいろくんと手を盡くして差上げて町風の獻立ではとかく御意に入り兼ねる上つ方の上り物に馴た者はあるまいか思召にかなふと直に御扶持人になれるが尋ぬる所には無い者と彼處の宿の歩にや語る高聲耳に入り鐘三郎は心に領き吾武を以ては仕へじと既に誓紙は書きたれども其だに深く慎まば上の咎の恐はなし幸なるかな是に取り入り小笹と共に兎も角も身の治りを計らんと思案を定めて表に出で「己は武士の浪人なるが四條流大草流凡て料理の一通りは能く心得て候なり口入頼むと言ひければ彼男大いに喜び「此の主人は能く人の世話する事が

好なる故一里の道を態々と頼みに來たが其れを待たず此方へ行つて下さらば事が早く済でよいと言ひつゝくく打見遣り何程料理が巧者でも六部殿の姿ではごうも連れて行き惜しいと、もじくすれば打笑ひ「袴はなけれど着更大小見苦からぬを用意せり髪結は呼べまいかと言ふに小笹はさし寄て「よくはなけれど月代も如何やら斯うやら剃りまするお心持が悪くとも早い方が善さそうなど宿の女に櫛道具借りれば件の男も心得月代の湯を汲み來り兎角なして鐘三郎支度も頓て調ひければ彼の男と打連立ちかむろの宿へ急ぎけり抑々先にも記し、如く花城千早の助知一は大和の國に聞えたる高市郡の司にて彼の箕作には及ばずながら系圖正しく家富みて名高き家臣も多くあり未だ紀の路を遊覽せざれば此度態々思立ち高野山を初とし和歌の浦加田の浦名所々々を打廻り供の者の疲を休め歸國せんとて禿の宿に暫し逗留ありけるなり然程に先の男は鐘三郎



を誘ひ來り云々の由言ひ入れければ花城の老臣本竹喜
太夫其れ此方へご招きいれ立出で面會なし吾名を通せ
し其後に生國姓名尋ねられ鐘三郎は謹みて「某は美濃
の浪人落窪鐘三と申す者元より田舎武士なれば武藝は
更に存せぬご御用の筋は若きより好の道にて聊か計り
心覺の候ご名を略し名字を變へ生國をさへ隣國に取
つくりひて聞えければ喜太夫は打領き「夕御膳を取急
げば何かの事は用果て明日又聞かん此者を臺所へ案内
せよと言ひ捨て立けるにぞ鐘三郎は是よりして其々
の指圖を受け久振にて庖丁は持てごも名を得し上手な
れば人々の目を驚かせ其夜は彼處に留められ夜明けて
後に本竹喜太夫再び彼を近く呼び「さて其の許の御手
際主人ことなう心に叶ひ浪人ならば直ぐ様に召抱へん
この事にてあり武士受ごか言習はず屋敷の規もあるな
れご大和へ御供された上取り極めて遅からず昨夜よ
り和殿の様子を吾もつらく打見るに人柄の打上り立



振舞も賤しからぬは確に由緒のある人と思ひ定めて出
所をも強ちに聞糺さず召連れられ候ごも當人だに得心
せば差岡なしと言上せりと懇に言ひければ鐘三郎は
つと平伏し「有難き仰せの趣何とて違背仕らん武
士の身寄は候はねご浪華には徳兵衛とて姉婿の一人あ
り吾悴をも彼のものに預け置きて候へばお受は彼を頼
まんが直ぐに御供を願ひ難きは愚妻を連れて只今は高
野山より戻り道即ちかねに待たせ置く彼を獨り捨て置
きてと言ひさして太息を衝き此の故に候ご聞いて喜太
夫につこと笑ひ「其れのみならば氣遣あるな貴殿一先
かねへ戻り内方をも同道あれ當宿にて又別に一軒の宿
を吩咐け先それに留め置きお立の節は我々ご諸共に和
殿はお供内方をば一日路後より大和へ送りの駕籠は用
意させて置く可きなりと聞て益々打喜びさあらばとて
かねへ戻り斯様々々ご小笹へ語り修業の道具は望手も
あらば譲りて遣り給へと其宿に残し置き小笹を連れて又



再びかむろへこそは来たれければ、かゝりければ、落窪鐘三と姓名を呼び改め其日直ぐに千早の助が目見え首尾よく相済みて袴野羽織旅の衣類は彼の喜太夫が承はり取揃へて渡すにそ元の武士の妻に返り二三日過て後まだほの暗きに此宿を千早の助の出立にて鐘三も供の内に加はり行列亂さすだいな立笠、松の木の間伊達道具見えつ隠れつねり行くを後に残りし小笹も立出で打見送りて佇む折しも是も同じ花城の家來黒塚の官六郎出立されたる旅宿の片付手づから提燈提げて隅々迄も打廻り表へ出ればほのくさはや人顔も見え渡るに何心なく小笹を眺め眉を顰て下郎を呼び「あの女は何者ぞ彼に知らさす 側」に此頃内の旅宿の女房立列で居るこそ幸竊に問ひて吾に告げよ提燈消せと言捨てて足早に立ち去るを小笹は心付かざりけり」去程に千早の助程なく高市の館に歸られ新参りの落窪鐘三も其日住む可き家を給はり明くれば小笹も恙なく駕籠に

國貞画種彦作



て送られ来りしが「福原屋より其お子をはや呼寄せて遇せ給へど頼めば實にもと人を雇ひ小笹の事は深く包み再び仕官の事をのみ大和町へ言遣りければ徳兵衛夫婦は初より鐘三郎が發心を不得心にてありし故此書状を見て大きに喜び迎へに寄こせし人のみにては安心せずとや思ひけん手代を添へて京太郎を彼の高市なる花城の館に頼て送り遣しけり小笹は折善く門に居て豫て知りたる福原屋の手代の來たるを遠目に見付け云々

鐘三に囁き一間に隠れて面を遇はさず鐘三はさあらぬ風情にて返事を認め送りを歸し京太郎を小笹に遇はせ斯りし後は媒介も頼す遂に夫婦となり次の年に男子を設け梅の助と名付しが小笹は心素直にて實子より猶ほ京太郎を心を付けていたはりければ彼も亦眞實の母の如くに孝を盡くし凡て家内睦じく兩人の子供の生長を夫婦は樂しみ暮しけり



訂校 邯鄲諸國物語 大和の巻後帙

柳亭種彦著
歌川國貞畫

花城の館に程遠からぬ東大寺の鎮守の神は正八幡宮
なりけるが靈驗殊に著るく參詣する者いと多し千早の
助も信仰ありて此度新に社の傍りに繪馬堂をぞ建ら
れける高市の者其れ〜に奉納したる其中に盃に錠
を下し願主大串團吾と書きたる小さやかなる額あり
或日彼の落窪鐘三家内の者を引連れて彼處へ參詣した
る時不圖此の繪馬の目に留り其故を知らざりければ彼
れは如何なる言はれぞと茶屋の女に尋ねけるに女笑
つて答へて言ふ様「知り給はずや彼の類は近頃流行者
にてあり酒の上の悪き人又は病に障ると知りつゝ酒を
過ぐす人なんと神に誓ひて酒を絶ち盃を再び取らじ

と其印に彼の如く錠を下して捧ぐれども稍もすれば其れを破り罰を被る者もありと語れば小笹は打笑みて「止められぬ程なれば神を頼むに及ばぬ事なアもうし此方の人と言へばほくく打領き「己かやうに生れ付ての下戸には更に分らぬ事ぞれ茶を今一杯此様に呑では茶に酔かも知れぬ茶杓子へ錠を下した額でも上げずばなるまいと打戯れて何気なく立歸りしが心の内につくくと思ふ様吾一有齋の教を受け劍術を勵しより心に滲て面白く忘れ難きは此道のみ然れども恩人藏人へ誓ひし言葉もあんなれば慎みに慎めども家中の者が法に外れし劍術を學ぶを見るに心の底にもごかしく其は斯く是は斯うと教へて彼等に立合はんと思ふ事度々なれば盃の額に微ひ八幡宮へ誓を立てんと木刀へ錠を下し、繪馬を彼處へ奉り夫より愈々武道の事は物語にさへ慎みつ只人の無き折々に京太郎へは教へけるが彼能く父の手筋を受續ぎ十五歳の程には早や稻積流の

奥義を極め末頼母しくぞ思はれける當殿花城千早の助は其の年未だ若しと雖も月を眺め花を賞づる遊興は曾て好す只明暮兵術の稽古に怠りなかりしかば上を見倣ふ下ごやらん家中の者も武を磨き大ばる組小ばる組とて走り使のいと輕き侍迄も劍術柔術を心掛けざる者はなし此大ばる組を預るは彼の本竹喜太夫なり彼も武藝は秀でながら老年故に人用ゐず小ばる組の頭役黒塚の官六郎は其年漸く三十餘りまだ盛と言ひ鎗劍法凡ての武術に秀でたりと其噂高かりければ家中は大方彼に従ひ既に當殿千早の助も去頃よりして官六郎に指南を受け給ひけるにぞ其勢ひ花城の館に肩を並ぶる者はなし抑々彼がとなり奸佞にして邪智深く人を侮り身を高振り吾に阿り諛らふ者は馴付け置きて誠に君へ忠義無二の者たりとも己れに疎は諷言し其行ひ一ツも宜からず縦へ武術に詳しくとも斯かる無道の侍を取り用ゐ給ひなば御家の亂るゝ端ならんと心に思ひ、ひ

そくく囁く輩はありながら君の寵臣殊には御師範小ばる組を預り持つは重役といひ迂濶には言出難くて胸を摩り拳を握り官六郎を憎める者も多くあり偕て或日官六郎弟官八差向ひ己が家に他人ませず酒打飲みて居る處へ不圖入り來たるは天原流波是は近年官六郎が推舉によりて花城より扶持を給はる醫者にてあり一寸と式代盃を差すのも待たず直ぐに取上げ「俗に申す口果報さて善い處へ参り合せた御兄弟計りでは貴方がたもお淋からう、すりや兩爲と申す者と獨り吞込み續けて四五杯官八は打笑ひ「何日も氣輕な流波老兄者人のお氣の浮く話があらば何ぞ聞きたい知ての通り不幸に遇はれ兎角お氣の結ばれか御顔色も宜しからず其故一二種魚をこしらへ燗を付けて始めた處と語れば流波太息を衝き「御總領の綾七様はまだ確御五ツ位其をお殘遊してお年若で御新造様がお果てなされた事ぢやものごう輕口を申したとてお氣の浮う筈がない愚老が療

治をお受けなされれば御本復は遠からずと申上げてもお用ゐなく扱て是非なき仕合と眞面目になれば官六郎「話相對に丁度能く來たと思へば百日も濟んだ女房の又悔みか其では愈々氣が迷入る悴綾七は乳母に能く馴じて居れば苦にもならず女房はあれよりも若い美しいのを世話してくれ官八肴が餘りない何ぞ淡泊した物との言葉に流波取次で「確旦那は擦り芋に酢を掛けたのが御好物幸ひ持たせて参つたをお目に掛けんがお話に悔に聞えて叱られた其後へ又精進物と愈々お氣に入らぬも知れぬと座を退きて供の者に擔がせ來たりし自然薯の長芋を臺に載せ捧げ出るを黒塚兄弟見れば其の丈二尋餘り太さは二尺も回りつ可し斯る芋も有るものは是はくくと賞けるにぞ流波は扇をしやくに取りしたり顔に押直り抑々是れはと言ひ出すと何うやら飛だ靈寶の言立の様になれど吉野の奥せいごうの瀧のほとりに年經る山芋薬にせよと彼の地より今日到來仕る自



然薯は散薬とて薬にも使へども左迄功ある物にも非らず粉にして吞むは此様に大いにも及ばぬ事其より此儘使方もありさうなものと存じ薬箱の捧に結び付け擔がせて参つたが何と之を擦芋にと言ふを押止め官六郎「世に珍しき物なるをわざ／＼食はんも心なし幸ひ今日は殿様に御客來四五輩あり此儘にて獻上なさば何よりの御待遇なし善い物を呉れやつたと言ひつゝ立て此頃抱へし木偶内と言ふ草履取心利たる者なるを縁先迄近く呼び寄せ「自然薯の此長芋折れざる様にお臺所へ持て参つてお料理人落窪鐘三を呼び出し御獻立の其外に然る可く之れを料理し先づ盛り上げて置く可きなり且那後刻出仕の時一通り檢分なし其上上へ差上げんと申付て置く可しと言ひ終りて又元の座敷へ戻れば流波はにこ／＼「自然薯が鰻昇りに出世して御前へ上げれば此上もなき愚老の大慶いや出世と言へば鐘三が悴京太郎は偕て善い氣量若衆好きの殿様へ奉公させたら



千石取り今日も確親と一所にお料理の間に詰て居た、もし官八様貴方は又京太郎の母を御覽なされましたか召使も小女一人家内の賄子供世話紅かね付す繕ろはず寔れしだいで居り升が其美しき／＼先第一に年が若いどうしてあんな大きな子があるかと御家中一ぱい評判何と鐘三は仕合者と言掛けて四方をきよろ／＼「官八様は手の悪い人にさん／＼口を叩かせ挨拶もなく何處かへついと、ごうも座敷に堪らぬと言ふ程酔ひもなさらぬがと立を引止め官六郎小聲になつて「是流波今云ふ鐘三が女房は雪野と言つた祇園の舞子以前京のお藏邸へ己が詰て居た時に五六度も座敷へ呼び金を償ひ祇園を引かせ手掛にせんと言うたれど兎角に彼は承引せず兼ての馴み大坂の升形屋と言ふ商人へ嫁入したと言ふ噂其後當殿和歌の浦を御遊覧のお歸り道、かむろの宿を御出立跡片付に引残り夜も白々と明るく頃何心なく行列を見送る女の顔を見れば疑もなき雪野なり吾

は其儘立去りて家來に吩咐け旅籠屋の女房に彼の女は何者なるかと問はせしかば名は知らねども當宿にて召抱させ給ひたるお料理人の女房なりと答へし由を歸りて告げ其れより心を付け見るに道にて出遇ふ其時は顔を反向け見ぬ振して足早に行過ぐるは昔の客と某を彼も見知りて居るなる可し雪野が年の大凡を數へて見るに十四五の子をまだ持つべき筈はない京太郎は確に繼子何の故に鐘三の女房になりしか一圓合點行かず包

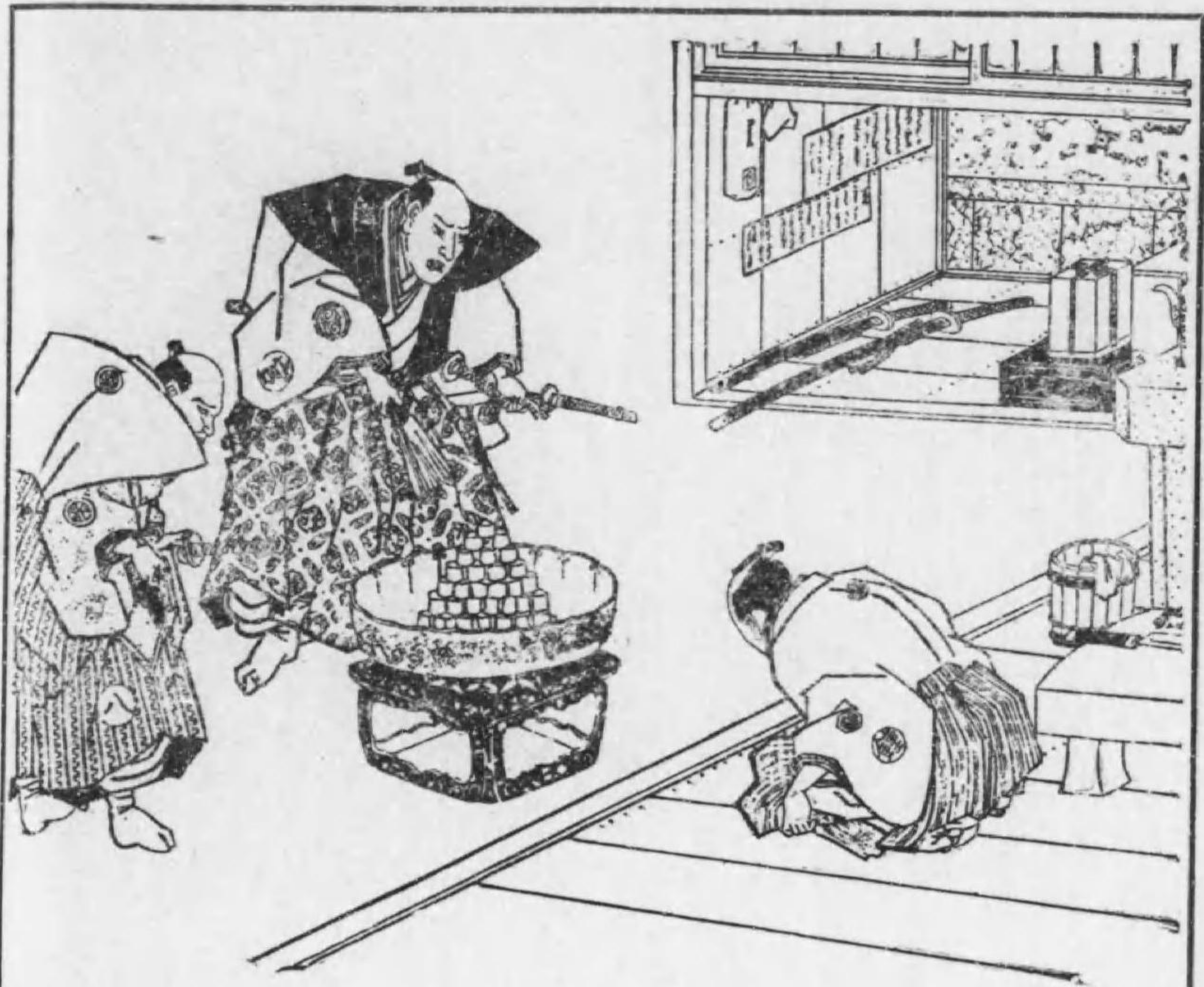


むとすれど弟官八是等の事を知る故に御身がうか
鐘三が妻の噂を言ひしを氣の毒に思ひて此座を外したのちやと語れば流波溜息衝き「揚貴妃は馬塊に消え小野の小町は秋風の吹につけてもあなめく美人の運の悪い事唐も倭も昔も今も其ためし、いと多けれど鐘三が女房は不仕合其時貴方のお手掛に成て居ると此度は押附れての御本妻活計歎樂引代へて小身者の悲しさは人にすぐれて前垂禰此頃も京太郎が弟の梅の助がちと風の氣ちやと私を鐘三が呼びに參たから一寸と見舞に寄りましたれば彼の顔貌をやつした姿で洗濯をして居りましたが、いやもう久米の仙人なら雲からぼつたり落つる處昔お迷ひなさつたも無理ではないと扇ばちく官六郎は伸上り「其れはよいが綾七は乳母を伴れて東大寺の八幡へ參つたが、もうとくに歸る筈と見違る此方の襖子を明け上下引掛け出で来る官八「いへくお案じなされますな綾七は只今歸り庭に遊



んで居りまする何時もよりは大分遅いと供の女に問ひましたれば彼の社の額堂へお組下の大串團吾が奉納した盃の繪馬の錠が粉微塵に碎けて落たのは不思議ぢやと群集をなすをうかくと見て居たと申す事其れは差置き先程鐘三へ仰付け置かれたる料理も最早調ふ時分いざ御一緒に出仕せんと進むれば官六郎衣服改め打連立ち直ぐに御殿へ罷り出で先料理の間を差覗き「先刻家來に申付け送り越したる大長芋定めて煮上げ置き

つらん檢分の上差上げんと言ふを鐘三は心得て恭しく臺に載せ持出づるを官六郎近く寄りて打見れば常にあるべき芋程に小さく切て盛りてあり、はつたと睨み聲荒らげ「大なる儘輪に切り煮てこそ是は珍しと御賞美もある可けれ斯くむきなしては世に稀なる大長芋の詮はなし煮直して差上げよと今申し付けたりとも亦とある可き品ならず其職にありながら心得のなき奴かなど打擲もし兼ねまじき氣色に鐘三はつと平伏し仰せの通り又とあるべき品ならぬ故只常の長芋程に切りたるが料理の古實に候なり其れを又何故と申すに貴人高位は下々の事は詳しく知ろし召さず大きなま、差上ることお國の土が芋に適ひ斯う出来るかと思召し御同席のお附合お物語の序などに拙者の國では長芋が此皿へははひらぬ程此位に出来ます、いや其れは珍しいどうぞ其れを頂きたい早速に差上げませうと受合てお歸り遊ばし先達の様な芋を何某殿へ遣はせと仰つた



時國中を探してもない其時は殿様を虚言者と人に笑はす様な者春の初茸秋の蕨時ならざるを食はずと聖人の教を守る計りでもなく何うしてか不圖出来て盛り代の無い物を差上げぬのは右の理由然りながら大きな儘にて御覽に入られんお思召をもごきし段謝り入て候ご只管詫れば官六郎言葉もなくて佛頂顔立端を失ふ風情を見て取り早野矢軍次原北門作其外大勢若侍次の詰所を立出で、「是は先生のお早い御出仕兼々お話申したる拂物の此刀無銘ながら何うか古さうお目利を受けまして求めたう存するご好の道より氣嫌を直し日頃最負の鐘三故此場を事なく済まさんと取繕ろへばよきしほと官六郎刀を受取り「此所は暗い其次の縁先でとくと見ませう、あゝ備前々々成程古うて随分美事にえがあれば長光と申しても憎うないが範光の初代か二代目、先も確お求めなされ私のを先生ついでに拙者も吾もと持ち出づる刀を膝のほとりに並べ先小口より四



五寸抜き是は關物大坂打北國鎌倉新刀古刀國を差し銘を當てるに大方違はざりければ先生の御鑑定誠に恐れ入つたりと賞めそやされて官六郎漸くに機嫌直り「刀劔を見ます事は生れ付て好きなれど近年は諸方から餘り度々鑑定に持て参るで五月蠅くなり眼病なご、言ひ紛らし断わつて置申すが斯う見掛れば幾腰でもお持ちなされ〜イヤ原北氏只今見たる其元のお差添は餘りなかつ打所詮人は切ませぬ然し刺身は作れるか鐘三にお聞なさるがよい庖丁の鑑定は料理人が丁度相應定めて鯛の尾を包む折紙でも出すで御座らうイヤ鐘三と言へば戸棚の隅へ押込んである彼の刀は落窪の殿お差領よい序でちや拜見致さう取て参れと目配に官八心得立ち上れば鐘三は驚き刀を取り後に隠し手を付かへ「私風情の鈍物何とて御覽に入れらる可きと恥ぢ入る様を遙に見遣り「魚を料理るが役目なれば赤鯛でも身分相應苦しいない官八早く兄の機嫌の損ねぬ内一寸見せ

れば其れで濟むと進められてもいつかな放たず「さア
 身分相應なら早速御覽に入れますがどうも是はと低頭
 平身官六郎又急立つかゝ側へ寄る袖を早野矢重次引
 き留め小聲になつて「是れ〱先生あの如く綱は切れ
 鞘は剥て見られぬ體中子は確に眞生箸のちゆう鐵きう
 に候可し許して遣はされまじと言はれて心に打領き山
 の芋にて言ひ込められし其返報に恥顔を搔せてくれん
 と弟を突きつけ鐘三の前に膝突き掛け「すりやどうし
 ても吾刀を見せることはならぬと言ふのか「はい抜ま
 す事がなりませぬ「黙れ鐘三料理人でも武士は武士扱
 れぬ刀は何で差す祿盗人めと官六郎に恥しめられて悪
 びれすすこし前へにじり出で「此刀を抜きまするは殿
 様の御大事か又は無法な輩に出遇ひ己れの身の災難か
 此二ツの外慰みに人に抜せる刀はさゝぬ「ヲ、面白い
 斯る無法な者あらば何とすると言ひながら刀すらりと
 抜持て打て掛らん其結構鐘三も是非なく刀の鞘拂つて

白刃を目先に突付け「料理人に不相應な菊と申す御製
 の太刀俗に所謂菊一文字御鑑定下されと、びくともせ
 ぬ大丈夫劍の光は眼を射五體の堅の具りしに膽を挫が
 れ官六郎言句も出でねば有り合ふ人々見掛に依らざる
 鐘三の嗜み感じながらに此治り如何あらんと手に汗を
 握りて互に顔見合せ太息衝いたる其處へ慌たしげに
 本竹喜太夫「官六郎殿上意々々走り來ればはつと驚
 き刀を納めて畏まり様子如何と控へ居る喜太夫は言葉
 急しく「お組下小ぼろの者中窪皿右衛門熊月輪兵太門
 松毬藏大串團吾猶ほ此外に近頃貴殿が抱へられたるお
 草履取り木偶内と以上五人東側のお長家にて酒の上
 に喧嘩をし出し木偶内は切殺され大串團吾半死半生彼
 の相手三人は雜物倉へ閉籠り土戸を引いて切り死と覺悟
 を極めし體なれば官六郎官八兩人罷り向つて召捕るべ
 し切られし者は非分にて切たる者は道理なりと風聞も
 あんなれば彼の三人には必らずしも傷付くる事有る可



からず上意は斯くの通なりと捕繩三筋渡しければ黒塚
 兄弟眉を擧め「手に餘らば切捨てても苦しからずの仰せ
 ならば假令十人二十人籠りたりとも物數ならねど聊か
 も傷を付けず兩人向つて三人を召捕事は覺束なし餘人
 に仰せ付けられといひも果てぬに急立つ喜太夫「四人
 の者はお組下一人は御家來なり此捕方には願うても向
 はる筈なるを斷わらるゝは言甲斐なしと勵されても兄
 弟は默然として言葉なし鐘三をづく「匂ひ出で「此お
 役は私親子に仰せ付られ下さらば上意の通り三人に
 怪我をもさせず取逃がさず搦め取て奉らんと言葉を
 放つて言ひければ喜太夫は大に喜び「お屋敷へお抱へ
 に其方が成つたも己が推舉最負に思へば願の通り吩咐
 け度は思へども何日ぞ武術の手際を見ず京太郎はまだ
 やう〱十五計りの若年者熱いな爲事出して却てお
 家に居れぬ様な首尾となつては氣の毒な其とも覺があ
 るならば火急の事なり殿様へ申上げすと苦うない今よ

り直ぐに三人を搦め取て手負と死屍は釣臺にかき載せて、あのお庭の御門よりお縁先へ引かせて参れ官六郎殿諸共に彼にて待たんと言ひければ鐘三少し面を上げお心使遊ばします幸ひ悴もお次にあり是より罷り向はんと京太郎を呼出し耳に口寄せ斯様々々心得たるかと打囁き三筋の捕縄取上げて先一筋は袂に隠し一筋は京太郎一筋は我手に持ち一禮なして立上れば喜太夫は聲を掛け「はや夕暮に程近し若し夜に入りなば戸前

國貞画種彦作

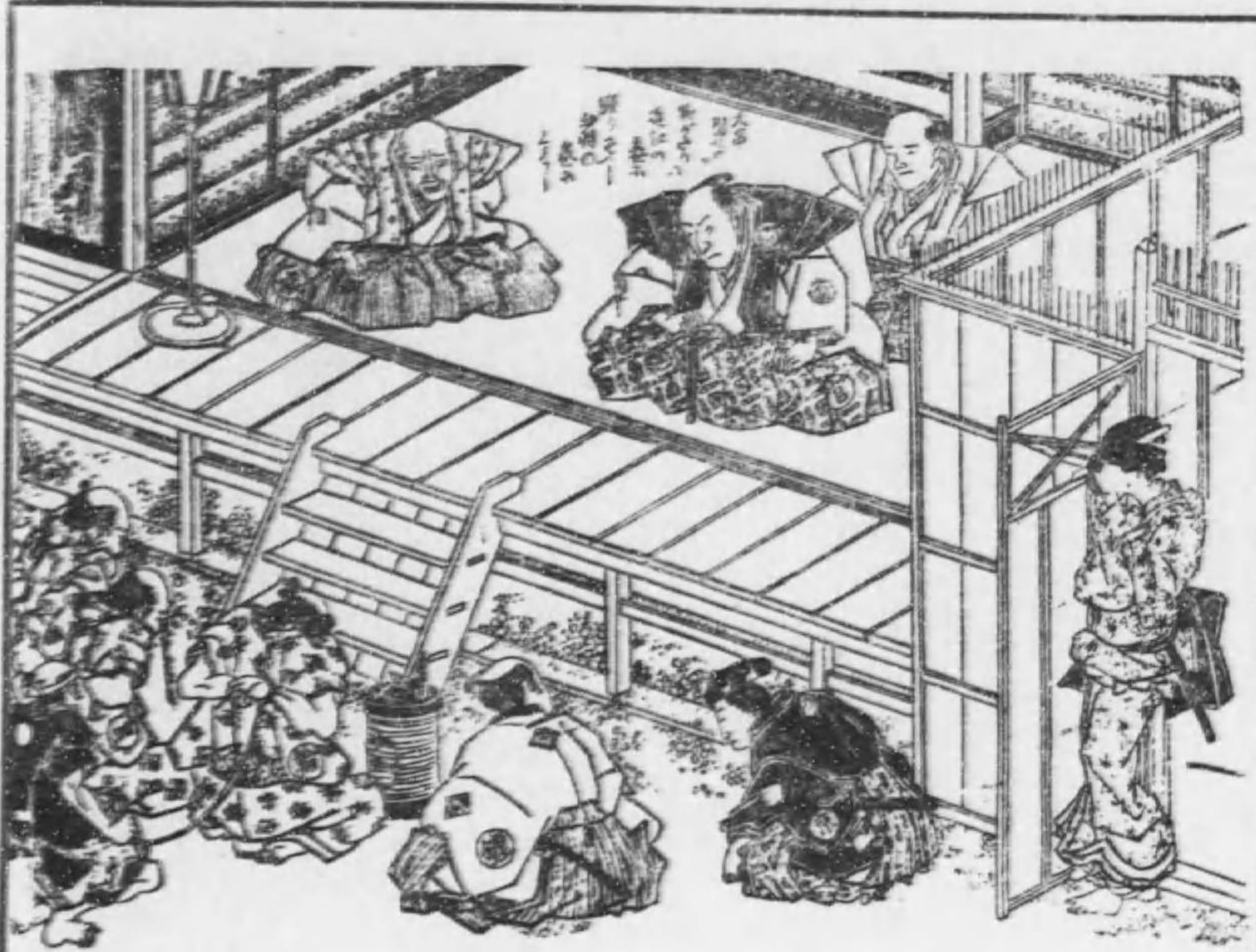


を打たせ夜明けて捕りても苦しからずと聞て鐘三冠を振り「捕物に越く時時刻を延すと延さざるは相手に依りて差別あり是は急なる方こそ善けれ定めて籠りし倉の廻りはをつ取り巻いて逃がさる備へをなして置かれしならんが圍を解て親子兩人に一先委せて置き給へと表へ走り出でけるが立止まりて京太郎其方は急ぎ家に歸り手頃なる小木刀を二本取りて来る可し大井戸の木戸口にて待合さんと言ひければ「承り候と飛ぶが如くに歸り来る母の小篋は見るよりも「此子は何をかく歩く今大喧嘩で人が兩人切られたと上を下騒動の中へ出て怪我でもしてはなりませぬ静まる迄家に居やと言ふ其隙に京太郎木刀取て出でながら「其喧嘩の相手三人倉の中へ籠たを父様と兩人して召捕に参りますと言ひ捨て走出でければ小篋ははつと打驚き「鐘三殿は日頃の手練顯はすは此時と思はれたも尤もながら何は稽古をしやつたとてまだ骨も堅まらぬ京太郎を危い處へ

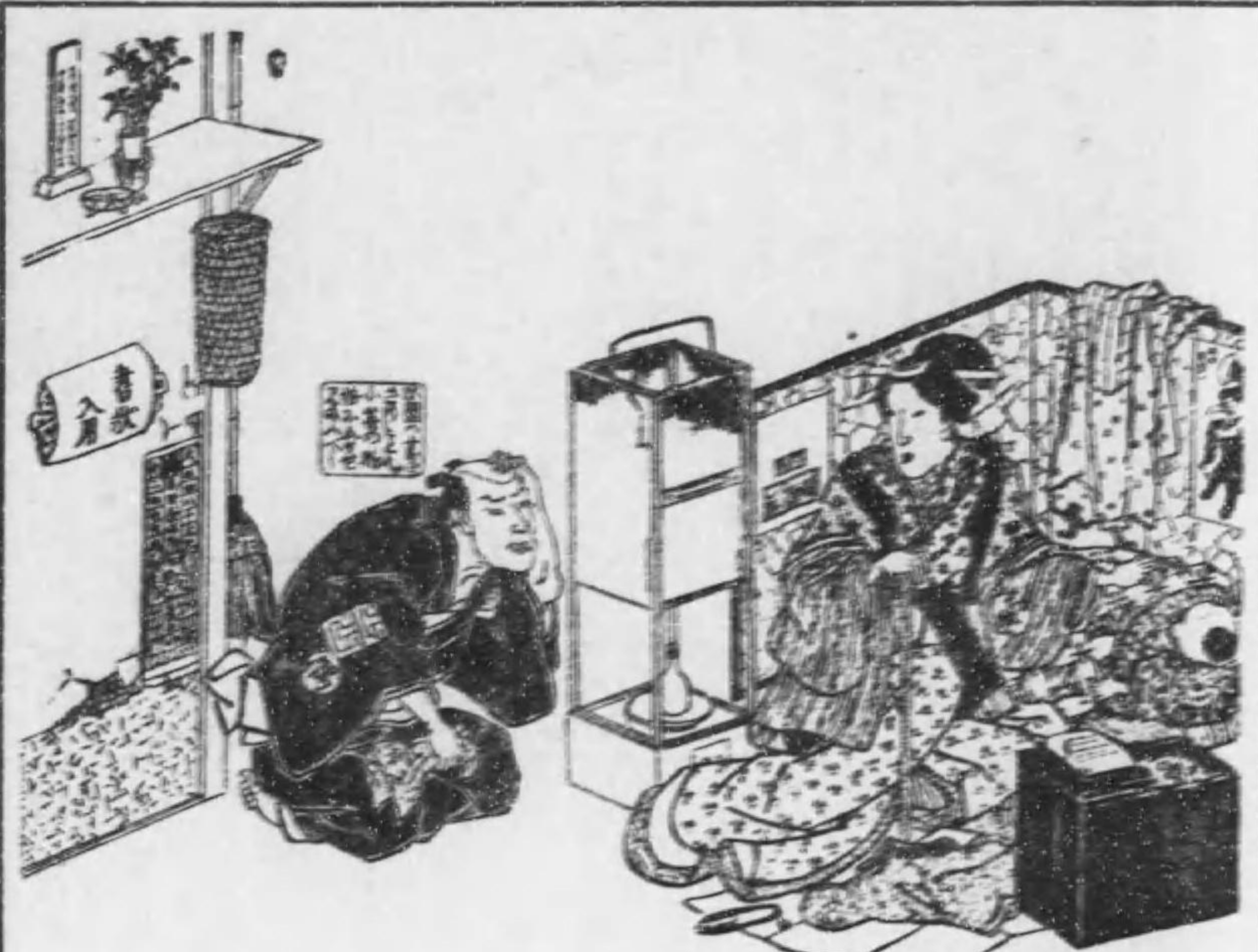
連れて行くとは狂氣の沙汰女にしたら善からうと人の賞める美しい顔にひよつと傷でも付と取返しはごうも出来ぬ、たのや此子を氣を付けなと乳を啣へて梅の助すやく眠るを引放ち下女に負せて甲斐々々しくもすそ引上げ京太郎の後を慕うて駈出けり、鐘三親子は大小を塚の此方へ隠し置き只木刀を腰に差し圍の人数を引取らせ用心の體もなく彼の難倉の戸口より「喧嘩の次第逐一に知るもの有て上聞に達せし處堪忍ならざる



仔細は道理にありながら内二人には御不審のなきにもあらねば尋常に繩を掛つて申し開き致す可しとの仰せに依て我々取りに向うたり内一人は神妙なる取計ひを聞召されお構なしと高らかに呼はりながら鐘三親子倉の戸開いてすつと入る内なる三人案に相違し神妙なりとの御賞美は我事ならん我事ならんと三人共に己れに迷ひ寝刃を合せて切り死と覺悟の白刃は手に持ちながら躊躇ふ隙を見澄して京太郎は血右兵門鐘三は輪兵太取て押へ刀をもぎ取り踏付け「高手小手に縛むれば毬藏は安堵して非理明白なるお家に仕へ誠に命の拾ひ者是は御苦勞千萬と言ふに鐘三は打領き「其許も御苦勞ながら暫し繩目を受け給へと一寸あて、踉蹌く所を是も難なく搦め取りほつと一息付いたりけり
此時既に日は暮れぬ暗きに紛れて取逃す事もや有らんと鐘三は前後に心を配りて三人の繩の端を一つに集め引立て出る倉の外口に佇むを誰なるかと透見れば小



篋なり物をも言はず行過る袖を取へて「お二人共お怪我が無て先嬉しい京太郎が小腕の働心元なく留め様と追うて来ても間に合はず神や佛を根限り爰で祈て居りましたと猶ほ何やらんくり掛けく言ふをば更に耳にも入れず初め引かせし固めの者を京太郎に呼寄せさせ手負と死骸は釣臺に載て最前喜太夫が指圖の庭の小門より内に入りて見上ぐれば晝の如くに燭臺を燈しつらねて正面には黒塚兄弟初めとし數多の侍居流れたり喜太夫は嬉し氣に縁の先迄立出て「天晴なる働を殿様にも聞し召され恩賞は追ての沙汰先は當座の褒美を與へん望もあらば言上よと只今仰せ出されたりと傳へれば鐘三は平伏し「御言葉に甘へまして申すも恐入たれど御褒美には三人の命を助け給はる様偏に願ひ奉ると言はせも果てず官六郎「其りやならぬ二合半でも吾扶持人木偶内を殺した奴生して置う法はない白癡者めと叱られても鐘三恐るゝ氣色なく「籠りし者は打手



を待ち死者狂の六ツの耐其に向うは身を堅固に守るが上に四本の手敵ふべき道理はなし其の捕方を望みしは切られし者が非分にて切つたる者に理はありこの風聞なる由上の御せ承つて其より工夫武術も力も何にもいらぬ手練仕掛の欺捕、手柄とお褒めに預りては却て赤面仕つる吾等如きにやみくもと擲められたが強ちに無法者ではない證據様子を尋ねさせられて道理に當らば三人の助命の事は私の命に替へても本竹様と願へば實にもと思ひけん喜太夫はつと立ち上り繩付是へと廣庭に引据ゑさせて向うを見渡し木偶内が死體も其れへ運び置て大串團吾は深手に言舌分らぬ由先々其れにて樂を與へ介抱なして置く可きなりさア中産熊月門松三人豫ての遺恨か當座の喧嘩か二人をあやめし様子を言へと尋ねられて顔を上げ「お頭の手人ながら吾々とは身分も違ふ木偶内に候へば左迄親しく仕らす顔を見れば目禮計りに打過ぎて罷りありしに十日計り以前

の夜酒肴を多く携へ彼の木偶内吾々が部屋へ來りて少し計り心祝の事ある間何はなしとも是飲んで給はれと言ふ此三人團吾も元より好の酒辭儀なしに引受け飲で酔伏す其明日の夜も亦明日の夜も木偶内が酒肴を持ちて來る事昨夕迄も怠たらねば自然と懇意になつたるが今日はまた晝過より何日にも優りて立派の馳走例の亂酒となつたる時木偶内の申す様儲て各に此如く酒を侷め參らするも實は己が片腕に頼まん爲の計策なりと聞て皆々左もあらん身に適ひし事ならば何事なりとも承たまはらんと言ふに木偶内打喜び耻かしながら四五年前我惚れ込んだる其女何う言ふ譯か此家中の人の女房になりてあり未だに思ひ切り難く言寄る便りもあらかんと此春より黒塚へ爲付けもせぬ仲間奉公折々毎に言寄りて試れども彼女いつかな靡く氣色はなしいつその事に彼の家へ夜に紛れて忍び入りひつさらつて立退く心底元より女が得心で駈落するなら人手

も入らねど右の始末にあんなれば吾一人では覺束なし力に成りて給はれと只管に吾等に頼み大串團吾は此時早や酔ひ倒れて前後を知らず爰に連らなる三人が顔を見合せ言葉を揃へ同じ不義でも人の娘又は奉公する女定まる夫の無き者ならば筋に依りては力も添へんが是は現在人の女房殊には得心せぬ女を盗出すとは大悪無道ふつと思ひ留まるか左もなくば黒塚殿へ申上げんと答へしかば木偶内大に憤り人に大事を語らせて聞入ぬのみならず大悪無道と今の悪口堪忍ならずと切て掛る此時に取押へ申上ぐ可き筈なるを吾々も酒興の上抜合せて立向ふ團吾は目醒て様子も知らず支へ隔つる其後は眼も眩みてめつた打次第は斯くの通りなりと交るゝに三人が言ふのを聞きて喜太夫が重ねて問はんとする内に官六郎進み出で、「死人に口なし己等が身勝手計り並べても言譯に其れや成ぬ木偶内が今夜忍び奪ひ出さうとした女は先何物の女房ぢやと問はれて三

人口籠り「さア其女は」さア其女は「ハイ其女は私で御座りますと庭木戸より怖めず臆せず入來る小笹様子如何にと驚く鐘三此方は縁を見上げて手を付き「黒塚様には私をモシお見知りも遊ばしますか只今では鐘三の女房以前は祇園で舞子の雪野勤めを引かせつ世話せうと信實に仰やつた然るお方も有つたれど古き馴みの義理に引かれ野の字を抜て雪と名を變へ升形屋と言ふへ嫁入り今日殺された木偶内は鯖六とて其家の手代連添ふ間もなく夫は病死後家になつたを彼奴は幸と思つたやら私へ不義言ひ掛け心中を見給へと雪と云ふ字を入ばくろ疑しくば死骸の腕をまくつて御覽なされませ高野山へ參れと進め釣り出して着更も旅用も皆ひきさらつて遂に駈落ち今の夫鐘三へは、ちと水臭ひ言分ながら道には迷ひ飢には望むせん方なくて世話になりやつし今世帯も皆んな彼奴が悪戯故さうでない」と此頃は何處ぞへちやんと身を修め樂

な暮しをして居りますなア申し官六様其れにまア厚かましい貴方の處へ住んでから鐘三が番の留守へ來てさまゝの縁言を言ふが五月蠅く是れ鯖六女ぢやとても以前は主殊に衣類も金も盗み途から逐轉した身ぢやないか途中で遇うても其方から逃げねばならぬ身を持ちて爰へ來るとは何う言ふ心重ねて淫な事言ふと夫に言うて仕様があると耻しめてから此頃は遠ざかつて居りましたが無理に連れて退うとは聞てもぞつとする企み彼の衆達が得心して彼奴に加擔をなされると私はどんな悲しい目に遇ふも知れぬに小氣味善く打て捨て下されたでもう是からは一安堵さすれば恩あるお三人命を助けて上度い故此身の耻を明白に申上げます黒塚さまと官六郎が氣を和らげ初め助命を願ひたる鐘三の本意を叶へんと言葉を盡して言ひければ今迄きよろしく睨し目を忽ち細めて官六郎打領いてにこゝ顔「ヲ、最もなる其方か願何れも只今聞かれし通り鐘三の妻を盗ま



んごは憎くい木偶内三人に罪はない其繩解けと指圖を喜太夫押留め「先其事は明白に分たれども今一ッ大串團吾に手を負せし此言譯がと眉にしわ折から庭へ二人の足輕大串團吾をかき抱き連れ來たりて畏り「仰せに従ひ樂を與へ介抱を致せし所見受しよりは手も淺く心も確に罷りなり申上げ度事ありと申すに付いて御前へ召連れて候と訴ふれば手を付かへ「只今の概略は木戸の外にて承たまはる拙者は元より酒を飲むと性根を失ふ癖ある故八幡宮へ誓を立て 盃に錠を卸した額を揚げて絶つたる酒を木偶内に進められ此頃内より只もの飲みしが聞けば今日彼の繪馬の錠の碎けて落たる由神の告にも心付かず前後も知らず酔伏して其れ故受たる此手傷木偶内の刃に觸れしか又三人の所爲なるか切られし我さへ知らざれば切たる人に猶知るまじ然れば此儘死したりとも更々以て怨なし禁酒を破りし神罰の其れのみならず其昔様々巧んだ惡の報此位な災難は

なければ成らぬ身の懺悔己れは佐葉藏とて若き時は旅役者出羽の國に在し時坂田の宿屋が金出して抱へし女を盗出し利さへ横根山と言ふ處の狩獵を彼の女に言付て深き谷へ突落させ其家を吾物に住なして居たりしが登園らんや彼の狩人命ありて立歸り夫婦共捕へられ既に首をも刎らる可き罪を許して給はりし其恩人は近江の國におはする由は聞きながら遂に一度訪ひもせず其れより諸所を廻りて男子一人設けしが段々この不仕合其子を付けて女房は離別親の因果が子に報い此奴も確な死をば遂げまい右の次第に候へば相手も知れぬ傷を受け死のも自業自得にて初に申し上げたる如く人を怨みん道理はなしと、いと苦し氣にぞ述にける是にて邪正明白なれば重ねて問ふに及ばずとて喜太夫は席を進み先繩付の三人は小ぼろ組の者に守らせ手負は向ほも勞る可し落窪親子の者其は宅に歸りて休息せよと其れく指圖をなし墨塚を打連れて頓て奥へ入りけ

れば鐘三親子は心安まり木戸の外へ立出る折から内に殘したる梅の助は眠氣さし母を慕ふに賺しわび下女のたのが連れ來たるに丁度行遇ひどれくど小笹は其儘抱き取り打連れ家に歸りけり慥て次の日本竹喜太夫鐘三を招きて言ひける様「明日の事共逐一に上に申し上げたる處彼の三人は命を助け國境より追ひ放ち若し歸り來る者あらば其時罪に行ふ可しと今朝早や中窪熊月門松の三人は追放に處せられぬ扱て御身の武術奇代の早業吾のみならず遠目ながら能く見極し家中の者共追追言上なしたる間殿殊の外賞し給ひ其身は欺取なりとて聊か技に誇らぬ由是以て愈々頼母し僅なれど追放らし三人の知行を先づ鐘三に與へ近衆の武士に取立て後言ふ可きは劍法柔術に秀でながら今迄包みし心憎き主人の吾を柔弱者と見侮りての故なるか誰に頼りて何流を習ひ浮めし其れを問ひ官六郎と目通りにて立會を言付く可し竹刀木刀或は及引得物の道具は兩人が勝手次第



たる可しどの仰にて候と謹んで述べければ鐘三類を疊に擦付け「僅なりとの嚴命なれども藝もなく能もなき己等が身には過ぎたる高祿下し給はる辱な此上は今目の前にて切腹せよとの仰なりとも嘗て違背は仕らず然りながら黒塚殿との仕合は御免を蒙らん其故は申さずとも知れたる彼方は殿の御師範私が打勝なば料理人に負る者に今迄指南を受けたりと殿様を多くの人に笑はする様な者其れは千に一ツの事散々に此鐘三が叩かれるのが必定ながら黒塚様のお手柄にもならねば此方の耻にもならず左すれば無益と申す者西近江種が辻に引込みて罷り在りし一有齋が門人にて稻積流を少々は習ひ置て候へば官六郎殿御多用にて御迷惑なる子供なんごに教へる位の御用なら承り候はんと懇ろに答ふるにぞ喜太夫は其趣又候申上げたる處千早の助益鐘三が武術を床しく覺されて追々近衆の侍を彼が門下とし給ひて試み給ふに其修練官六郎が及ぶ



所に非らずと思ひ給ひければ殊更家中の若侍は鐘三を褒め恭ひて偏に彼は摩利支天の再來ならんと嘯めきけり是先にも記すが如く官六郎は其心邪にして稍ともすれば讒言して罪なき人を陥入るゝ事度々なれば各々心に憎むと言へども彼に勝れし劍術者當家中になく且君の御師範故にせん方なく心に思ぬ追従を今迄こそ言ひ居たれ幸にして此鐘三御見出しに預る上は彼を立身出世させ官六郎が威を挫かんと言合さねど此如く鐘三が技を善きが上にも善しとぞ皆々言合ひける然れば殿に願を立て稻積に改流する者も此頃少なからず官六郎が稽古場は次第に淋しくなりければ定めて彼は憤らんと思ひの外に鐘三の武藝は己が及ぶ所に非ずと官六郎も家中の者と諸共に鐘三を慕ひ吾方へも繁々呼び己も度々落窪へ音訪れいと親しく劍法の事など問ひ殿の前に出づる時は鐘三は御役に立つ可き者どよりく聞え上げれば官六郎が我慢無きを千早の助感じ給ひ且



彼すらも敵し難しと言へるに依て鐘三が武藝に秀でたるを愈知り良者を抱へたりとて追々加増を給ひけるが此程に本竹喜太夫年老たりとて退役の事を願ひ出たりければ其意に委され彼の後役大ぼろ組の頭をば鐘三に命じ給ひけり是よりしては官六郎相役の事なりとて益親しく行通ひ其年も何日か暮れて次の年の彌生中旬櫻の盛なりける頃官六郎は酒肴提重を用意なし鐘三を誘ひてそここの花を眺めて打廻りさすがに永き春の日も西に傾く其頃に彼の東大寺の八幡宮へ打連立ちて詣でつゝ額堂なる茶店に休らひ鐘三心に思ふ様去年家内を引連れて此處へ來たりし其時は身はいと輕き料理人袴も着けずやつ／＼しき姿なりしが今年引替へ遊山に出づるも若黨仲間殿様より拜領の羽織小袖に吾と我身を見違へる此行装束と言ふも過ぎ行かれし一有齋殿の高恩又當殿の御惠愛の國へ移りしより信仰なしたる八幡宮の加護に依る所なりと信心膽に銘じつゝ又も社

の方に向ひ伏拜む足元へがつたり落しを何ぞと見れば去年己が納めし額の木刀へ卸し、錠なりはつと驚き立留り吾身の意にはなさすと雖ども金串ならん己が刀を見侮られし一旦の怒に依つて鞘を拂ひ其憤りの治まらざる折節喧嘩の籠物擲取て見せんすと其れより段々引續き武術を顯はし立身出世は何とて誓を忘れしとて神の咎に疑なしあら恐しや／＼今の君の惠を知て昔の主の恩を知らずあゝ吾ながら淺猿しき心になりしと後悔し茫然として行む顔を官六郎差覗き「遽かに貴殿は色青さめ折節拙者の顔を睨め口の内に何やら囁きわな／＼慄うて居らるゝが御氣分でも悪いのかと咎められて心付き「いや左様でも御座らぬが御覽なされあの如く奉納致した額の錠砕けて落しが心掛り知らるる如く大串團吾が事もあればと言ふを打消し「あれどは違うて貴殿は下戸其れ故別に味淋酒を用意致して参つたが其れさへ漸くおはらで二ツさすれば酔るゝ氣

遣なく縦へ何人抜連れて打掛らうとも御手練では手取にせんもやすかる可し錠は愚かさゝらの如く繪馬が碎けて落たりとも團吾の様な災難が貴殿に有らう筈はな

い必ず氣に掛け給ふなどはほろ酔氣嫌の官六郎聲高々と打笑へば「如何様武士にあるまじき愚痴を申した家内の者がお目に掛つた其節にも此事御沙汰下さるなご口固めて諸共に道を急ぎて黄昏に鐘三は家に歸りけるが神の咎の恐しと心に掛りし故なるか何とやらん心地勝ぐれずさればとて服薬す可き程にも有らねば寐つ起きつ次の日は暮しゝが其夜遽かに熱を發し血を吐く事數升なり家内の者大きに狼狽先づ近き程なれば天原の流波を呼び云々と言ひければ先容體を窺ひて小笹を小陰に招き寄せ眉を擧め聲を低うし「下戸の吐血は治し難し其上主人今迄に多く神勞されしと見え體の疲のあらなれば吾力には及び難しと求むれども藥を與へず其れよ是よと立騒ぐ其隙に憐む可し鐘三は遂に息絶ぬ針



よ灸よと様々に介抱すれども驗なく次第に身内冷え氷り昨日手折りて歸りたる櫻の枝は花瓶に今も盛にありながら思掛なく散りて行く實に人の命程果敢なき者は無かる可し是よりして小笹が縁言京太郎が歎の様くだだしきは例の漏しつ推量りて見給ふ可し、官六郎は次の朝斯くと聞より取る者も取敢へず馳せ來り「御心中察し入り今更申さん言葉もなし吾も誠に片腕を取られし心地に候と懇ろに悔を述べ家内の様を情々見るに小笹は只泣きに泣きまた若年の京太郎は歎き高じて涙も浮めす只うつとりと差し俯き梅の助が物心能くも知らぬぞ教へられひたすら位牌を拜むなど見捨難くや思ひけん兩人を様々言ひ慰め爰には頼みの寺もあるまじ當節の御菩提所天満山長法寺の塔中の住僧は怪來とて某が元よりの友達なり彼を頼みて參らせんと此の國には鐘三夫婦が身寄のなきと思ふが故葬式の事は更なり七日の佛事石塔婆を立つる事さへ官六郎取賄ひて京



太郎を直ぐに亡父の後役にと千早の助に願ひけり、是は借て置き此の頃浪花新町に玉柏屋才兵衛とて音に聞えし遊女屋あり抱への遊女は更にも言はず召使ふ者出入の者下が下迄心を用ゐ能く勞り恵みければ彼れ等も亦其の恩を思ひて客を等閑に成さざる故に繁昌して今此廓第一の福裕の身のなるもから富に嬌らず華美を好まず只だ折節の保養には寮と名けし下邸木津川邊に求め置き是へ行くのみなりけるが三月末の事なりけん櫻は早くうつろへど池の邊の藤の花咲き出でたりと彼の屋敷を守らせ置きし塔八と言ふ者より告越しければさあらばとて内の事は女房に委せ置き娘のお谷弟の才七己の目には花紅葉よい子を持ちしと往來の人も眺むるが先づ樂みにて二人を立派に装はせ供はお谷が氣に入りの仲居のお光其の外に二三人の男女を連れ才兵衛は彼處に至り門を入るより四邊を見渡し「庭の掃除の行届き池にも落葉は更になし綺麗好きなる者を置き見違

へる迄好い庭になりしと座敷へ打通り煎茶の後はお七が花切作りのめじかの刺身お谷が焼た田楽にて酒汲み交し才兵衛の心地よげなる有様を塔八遠目に打眺め「敷松葉を取た跡のこけにまた青みがこす、たんぼは延び過ぎ董はいちけるどうで有らうと思つたが先御機嫌で安堵したと己が部屋に入る後から仲居のお光が田楽の箱を以て走り來たり「旦那様が私を呼んで塔八にいつぞや酒を飲ませうと言つたれば禁物とやら下戸とや

秋川國貞画 柳亭種彦作



ら盃を手にも取らぬ今日は飯の菜になるものを遣れと仰やるからさア之を持って來たお前只の田楽ちやと思つて食ふと罰が當るお谷様のお慰み十本焼けば七本落ちる緋鹿の子の襦袢の袖が味噌に成るやら金襴の抱へ帯が焦げるやら積つて見たら大層な高い者に付て居ようと打笑へば塔八頂き「私は新參者お家内の様子は存じませぬがお跡取は才七様お谷様はお片付なさると見えて毎日々々五月蠅程諸所から言込みまだ御相談は出來ぬ様子どういふ所がお望で御座りますると問ひければお光は差寄り小聲に成り「廣い世界に彼のお子程運のよい者はあるまいまだ少さい時此方のお内へかむろに賣られて御座つた處が如何様實の親達が玉柏屋のが眞實の父様や母様だと欺して越した事ちやから其の晩にお家さんの懐へ遠慮もなくぐすくとはひつて寝て何と言つても側を離れず父さんあんな衣服が着たい母さん何か食べたいと其明日から我儘一杯お慈悲深い

旦那様矢張り其れが可愛くなり子の無い者が人の子を貰つて不憫を加へれば本の子が出來ると言ふ事お娘にせうではないかと親元から買ひ切り披露を成さると其翌年お生れなされた才七様其實の御子よりも未だにお谷様が御秘藏こんなに氣量の好い娘例へば何程分限でも悪い男の處へは遣らぬ男が好くて彼れが氣に入り年頃も似合なら身上には頼着せぬ嫁にと言は地面でも金でも付て先へ遣う聲におこさば元手を入れて先の男の望の商賣勝手な處へ店を賣して遣ふと常々言うてなれど好い男が近頃切れ物お前が十七八ならば打て付てあらうのに惜い事ちやと言ければ塔八は首を振り「そんな無法は止めにしてお谷様には丁度好い心當りの男もあれど私は其處へ行かれぬ身の上そんならあなたは親知らずと云ふ程な事でお内へ「いへ〜其れも旦那様が何程言うても實の親には違ひたからうと知らぬ振りで折々はお遣せなさる母さんはお果てなされ今では確

父さん計り其のお人のもし顔はと言ひかゝる折「お光く〜と奥より呼ばれて「あい〜と狼狽廻り走り行く、作者口上

さて申わけもなき事は、此所にて書き可申と後巻と記し候處、目づもりちがひにてをさまりかね候間大和の巻後巻と仕り彫刻出来次第賣り出し候間相かはらず御求めの程、事、番、候



大正六年四月八日印刷
大正六年五月廿二日發行

編輯者

國書刊行會文藝部

(家繪本文庫)第一回配本(邯鄲諸國物語)

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

著作
所有

發行者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
右代表者

太田藤四郎

印刷者

東京市麴町區有樂町二丁目一番地

吉原良三

印刷所

東京市麴町區有樂町二丁目一番地
報文社

發行所

國書刊行會

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
電話 東京橋三一九四
振替 東京一四七三番



終

